通なされたるものなるが故に、其の教法が日に月に隆盛になるのである。さ
を、お示しなされたるものである。さて今回は此のお辭によつて、謹く宗祖聖人
の立教開宗の御苦勞の程をお話に及びます。

凡そ世の中に不思議なことは種々あるが、中にも宗祖聖人程不思議なお德を
具へ給へる方は、古今の史乘の中にて其の比を求むることが出來ませぬ。聖人
が世を去り給うてより此の方、既に六百五十有餘年も經過してをることである
が、而も歲月が經てば經つ程、多くの人々が益聖人の御德を慕ひ奉ることゝ
なり、現に先年の六百五十回の御遠忌の際の如きは、幾十萬の人々が命がけにて
御本山へ參詣し、遙し在世の古を追懷し奉つたことでありました。それよ
りこの方今日に至る迄、諸國の末寺は申す迄もなく、有緣の門信徒の方々に在り
ても、それ〳〵に其の御法要を營み奉りてをることである。是は一體何の爲で
あらうか。尤も御本山には血脈相承の善知識がましますことでありますから、
其の御法要を營み給ふことも、敢て不思議と申すことはありませぬが、さしたる

因緣もない一般の門末の方々迄が、我が祖先の法要よりも大切なる佛事を營む
と云ふことは、實に一大不思議の現象と申さねばなりませぬ。

昔より今日に至る迄、私共の祖先なり、又現に私共の身の上に就いて、一方
ならぬ苦勞をして下された方は幾人もある、或は一國の政治の舞臺に立つて良
政を布き、或は一身を軍國の事に委ね、身命を賭して國家の安泰を謀りて下され
たるが爲、私共が今日疊の上にて、安樂に渡世家業を營むことが出來るのである。
而も私共は其等の方々に對して、何れほどの感恩の思ひがあるか、固よりお互
に其の御苦勞のことは忘れはをらぬ、爾し今其の方々の年回法要が廻
り來つたからとて、宗祖聖人に對し奉る程の渴仰の思ひは、何としても浮び出
て參らぬ。現に近代の偉人で私共の大恩人たる伊藤公が薨去せられてから、
未だ日も淺いが、而も其の年回であるからとて、國を擧つて報謝の法要を營みは
せぬ。反之て六百五十有餘年も前に御往生なされて、お互に其のお顏を拜した
ことゝもなければ、又其のお辭の一つも承はつたことのない、宗祖聖人の御遠忌

法要と聞くと、我も人も我が身の事を忘れ、生命にかへても參詣がしたい、又營まして頂きたいと云ふ思ひが生じて來る、實に不思議なことである。斯樣な不思議な心持ちの生じ來ると云ふに就いては、深き原因がなくてはならぬ。

一體私共が多くの志士仁人より受けた所の恩惠と云ふものは、孰れも此の世一代を渡るに就いての恩惠であつて、決して未來永劫に亘つての最大恩惠と申すとは出來ぬ。然るに宗祖聖人より頂いたる御恩は、曾に煩惱熾盛の此の世の一代の間を安樂に渡るだけでなくして、未來永劫迷ひの打止め迄して頂くのであります、それでありますから苟くも明信佛智の身の上となると、假令其身を粉に致しても、報恩の赤誠が表現したいと云ふ望みが起り來るのである、是が則ちさきに申した不思議な心持ちの生ずる最大原因であります。

尤も釋尊一代の說法は、孰れも皆前に申したやうな現當二世の功德を具へてをるのであつて、如說に修行すれば皆其の利益がある、從つて其の敎法をお傳へ下されたる諸宗の御開山樣方は、皆悉く難有い御方々であります。然るに敎

を承はる所の此方の器が麁末である爲何うしても其等の方々の敎訓を信奉することが出來ぬ。其處になると易行易修の念佛の一法は、男女貴賤の簡びなく、容易に之を信受奉行し、我も人も皆諸共に其の法味に浴することが出來るのであります。爾し、此の易行の念佛にても、若し其の敎化の方法が、今日の私共の生活振りと一致せぬときは、假令念佛を喜ぶにしても、此樣な身分であつては、順次の往生は覺束なからうと、寶の山に入りながら、手を空しくて歸ると云ふ風情となつて、折角の法門に遇ひ奉りながら、淨土の聖衆となることが出來ずして、再びもとの三途に立ち歸らねばならぬことゝなるかも知れぬ。現に其事に就いての最も大切なる物語りが、聖人の御在世の昔にあつたのであります。

今より七百十有餘年の昔卽ち建仁三年の初冬のことである、一日吉水の庵室にて、法然聖人が時の關白藤原兼實公と、種々と法義のお物語りをあそばされてあると、話の進むにつれて兼實公は聖人に對して、かね〴〵承はるが如く、彌陀の本願は善惡の凡夫を悉くお救ひ下さると云ふとでありますが、それは決し

て間違ひないことでありましやうかとお尋ねなされた。聖人は、それはまた今更改まつてのお尋ねにも及ばぬことではござらぬか、經には既に十方衆生とお呼びかけなされてあり、釋には一切善惡凡夫得生者、莫不皆乘阿彌陀佛大願業力、爲增上緣と仰せられて、佛の本願力に乘托すれば、往生成佛することは必定であります、何等の疑惑を挿むことは入りませぬと仰せられた。

すると兼實公は、固より如來の本願に就いては、少しも疑ひを懷くことはござりませぬが、爾し茲に一つの不審ありて、日頃お尋ね申さんと存じてをる次第、それは外でもなく、既に善惡の凡夫を簡び給はぬものならば、此の庵室へお集りのお弟子方は、何故に孰れも清僧のお暮しをなさるのであるか、三百幾十人の方々は、悉く捨家棄欲の清僧であり、私一人のみが在家の日暮しを致してをる爲、何んとなく心の奥底にたよりなき所があり、何うも腑に落ち兼ぬると申された。

聖人は、其邊のことは常々申してをることで、出家であつて念佛申すがよいならば、出家で申さるがよい、在家であつて念佛申すがよければ、在家の身分であるもよい、妻帶するがよいならばそれもよい、機の善惡を簡び給はぬ如來の本願の前には、そんなことは少しも頓着することは入り申さぬ、弟子共は清僧の暮しをするのが、身の上の爲に勝手がよろしきゆゑ、あゝして居るのであります。貴下は朝廷の御用をお勤めあそばす大役があるから、今日の御身分にてよろしいではないか、そんなことで御本願をお疑ひあそばす事は、大なる誤りであると、懇にお諭しなされた。

此の御化導を蒙られたる兼實公は、私自身は御老師の如き明師に遇ひ奉り、其の御敎誨を承はつて、日頃の疑念を晴らすことが出來ましたが、爾し今の如くお弟子の方々が、清僧のお暮しをなされてあると、後の世の人々は矢張り私と同樣に、在家止住の身にては、迚も念佛の利益を蒙ることは出來なからうとの、疑念を起すに相違ありますまい、此の邊に就いては、是非に御考慮を仰ぎたいことであります と申された。

聖人も此の道理ある申出には、其の耳を傾け給はぬことにも參らぬ。兼實公

は話を進め、それにつき一つ御相談を申したいことがありますが、外でもありませぬが、私の末の娘が年頃でありますから、此れにお弟子の中より一人の婿を迎へ、在家の身にても念佛往生が出來ると云ふ、生きた身業說法をして頂きたいさすれば私一人のみならず、後の世の人々迄も、心置きなく念佛の教を信ずることであらうと存じますれば、此の義は是非に御聞入れを仰ぎたいことであると申し出された。法然聖人も、如何にも御尤もなることゝ御同意なされた。

三百幾十人のお弟子の中にて、誰が此の大役を仰せ付かることであらうか。法然聖人の御胸の中には、既におきめになつてをることがある。兼實公とお別れなされた後宗祖聖人をお招きになり、さきの兼實公よりの申出をお物語りあり、斯樣の理由であるから、是非に貴房に此の大役を勤めて貰ひたいと仰せ出された、我が宗祖聖人には、實に寢耳に水である。此の仰せを承はるゝと共に宗祖聖人は、御師匠の仰せとあらば假令火の中水の底にでも參らねばならぬことでありますが、爾し今日再び在家の身分に立歸ると云ふことのみは、迚もお受け申上ぐることは出來かぬると、堅く御辭退申上げられた。

法然聖人は、如何にも左樣であらう、されば迚て兼實公の申出も亦無外に斷ることも出來ぬのみならず、念佛往生の一門を弘通する上に在つても、確かに大切なる問題なれば、是非に貴房の御苦勞を煩はしたいとて、種々と道理を盡した御物語りがあつた。所が宗祖聖人に取つては、一代の浮沈に關する一大事であるから、容易に御受けなさらなかつた。すると法然聖人は、是程迄に申しても承知が出來ぬとあらば、貴房に見せる物があるとて、傍らの手文庫より一通の書付をお取出しなされて、それをば宗祖聖人の前へ差出された。それには「行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴臨終引導生極樂」と云ふ四句の偈文が記されてあつた。

之を一見なされたる聖人は、非常に驚かれました。それも無理のないことで、實は其の年の春のさる夜、聖人は六角堂の救世菩薩より、此の四句の偈文の夢想を感得せられたことであつたが、餘りに不思議なお告であつた爲、深く心の奥底

に秘して、誰にもお話しなさらなんだのである。然るに其時の靈告の儘が記されてあるゆゑ、是は唯事ではない、正しく如來樣の思召であらう、それならば我が一身のことは彼れ此れ申出づるべきことではない、此の上は勢至菩薩の御化身にてまします御師匠の仰せに從ひ、救世菩薩の御再來にてあらせらるゝ、聖德太子の御跡を慕ひ、在家止住の身となつて、如來の御代官を勤めんと御決心あそばされ、遂に法然聖人の仰せをお受けなさることゝなり、程なくして玉日の宮樣と御同棲なさることゝなつた、此時聖人は三十一歲にて、玉日の宮樣は十八歲にてましましたのである。斯くて御同列にて法然聖人をお伺ひなさると、聖人は誠によい坊守が出來たことであるとて、非常にお歡びなされたと申すことである。是が則ち前に申した、「われ二菩薩の引導に順じて、如來の本願をひろむるにあり」とのお辭の出た因緣であります。

顧ふに大聖釋尊が此の土へ御出世あそばされてよりこのかた、二千五百有餘年の間佛弟子と云へば孰れも如法修行の清僧でありしに、宗祖聖人が在家止住の身となつて、如來の教法をお弘めなさると云ふのであるから、世の中の人々の驚きは尋常一樣ではなかつた。たゞさへ南都北嶺の人々の嫉みをお受けなされてをる吉水のことであるで、事あらば擧足を取らんと待構へてをらるゝ所へ、此の破天荒の事が始まつたものであるから、人の誹り世の批評は容易ならぬことであつたと思はるゝ。彼れは惡魔の再來ではないか、外道の振舞ひではないか、獅子身中の虫ではないかと、あらゆる惡口雜言は聖人の御一身上に蝟集したに相違ない、恐らくは顏を上げて、都の市中をお歩きなさることも出來なんだ位であつたらうと思はるゝ。聖人とて生血の通うてをる御身である、憂いも辛いも充分御承知である、されば斯る非難攻擊の中をお通りなさるに就いては、再び元の淸僧の身に立歸らうかと思召したことが、幾度もあつたらうと窺はる。其の都度さうではない、自分一人を潔くするのは衆生が在家のまゝで念佛しても、往生が出來ぬかとの疑ひを生じて、折角弘願の一法に遇ひ奉りながら、疑情の迷夢に惑はされて、奈落の底に沈むかも知れ

ぬ、斯くては如來樣へ對して申譯がないと、日に月に幾度も齒をくひしばり、眼を閉ぢ耳を塞ぎてお過ごしなされたのである。此の御苦勞があつたお蔭にて、今日私共が心置きなく、五欲の家に寢起きしながら、念佛申すことが出來るのであります。是を思ふと實に云ふに云はれぬ感慨が、胸の中に浮んで參ることであります。

何事も人事と思ふと、左程に感せられぬが、一度我が身の上に引き受けてみると、定めし斯うであつたらうと、人一倍に同情の思ひが生じて參る。只今申した宗祖聖人の御苦勞の如きもさうであつて、之れを我が身に引受けてみると、何んとも申せぬ難有さが感せらるゝことである。御文一帖目第三通に、「たゞあきなひをもし、奉公をもせよ、かゝるあさましき罪業にのみ、朝夕まどひぬる我等ごときのいたづらものを、たすけんとちかひましますぞと、ふかく信じて一心にふたごゝろなく、彌陀一佛の悲願にすがりて、たすけましませとおもふこゝろの一念の信まことなれば、かならず如來の御たすけにあづかるものなり」と申すお辭がある。それにつき人あり て私に向ひ、御文の中に獵漁りする者もお助け下さると申すお辭がありますが、之は眞實でありますかと尋ねましたら、私はそれは上人の仰せの通りで、必ずお助けを蒙るに相違ないと答へる。所が其の人が、私は漁師でありますが、如何に如來樣の本願であるとしても、物の生命を取る者をお助け下さると云ふことは疑はしい、さればとて私の只今の家業を廢めて、念佛行者となるとも出來ませぬ、就いてはお寺樣は人をお救ひ下さる役目であるで、何うか私一人をお救ふと思うて、貴僧自ら私の家に婿入りして下されて、網を引き魚を料理し、是れでも往生成佛が出來ると云ふ、手本をお見せ下されと申したら、其時の私の心中は何んなものであらうか。他人のことは存せぬが、私自身は迚も應と承諾することは出來ませぬ、そんなことをしたら、私の名も私の身も地に落ちて、再び世間に顏出しすることが出來難くなる、それが惜いで私は先方の申出を聞入れて、其の人を安心せしむることが出來ない、誠に淺間敷心中であります。

私風情の如き者でさへ斯樣である、況して宗祖聖人は叡山第一の學者と崇められたお方であり、學問から申しても、德行から申しても、其の當代に多く比類のない御方である。其の御方が如何に末代の衆生が不便であるからとて、進んで百難千謗の中におはいり下されたることは、實に難有い大慈悲心の御所作であると、たゞ〳〵鑽仰し奉るより外ないことであります。

法然聖人の門下には多くの高僧方がましました、中にも鎭西の聖光上人、西山の證空上人は、先師聖人の後を襲ぎて、それ〴〵淨土の一宗を興行あそばされ、今に幾十萬の有緣の人々を御勸化下されてある。爾し兩上人共、始終獨身の淸僧にて在した爲、今日遺弟の方々も、男の方は獨身生活を爲し、女の方は尼僧となつて、念佛三昧を行じて居らるゝことである。從つて在家暮しの者は、何んとなく一段氣がひけて、肩身が狹い感じがする。所が我が宗祖聖人の御化導はさうでない、愛妻愛子の日暮しの儘にて、往生成佛するのであるとの先達にお立ち下されたのである。それゆゑお互に孫子の世話をなし、或は又右に刀物を持ちて魚

鳥を料理し、左に珠數をつまぐつて念佛申すと云ふ生活が出來るのである。こんな難有い仕合は又とない、是であるから一度信心決定の身分となさしめて頂くと、聖人の御恩德の程が偲ばれて、何んとしても其の恩德に報謝し奉らねばならぬと云ふ、氣分となるのであります。

抑も聖人御一代の御苦勞は、何んの爲であるかと申すと、前にも申した如く、唯私共に信心を得させて、報土往生を遂ぐる身としてやりたいとの思召より外ない。所が其の信心とて、何にもむつかしいことはない、私共は明日の日が何うなるやらさへ知らぬ愚な者であるで、到底未來永劫に亘つての前途がわかる筈はない。よしそれがわかるとしても、それでは世の中の一切の事を打捨てゝ、其の用意にかゝると云ふことも出來ぬ身分である。大悲の阿彌陀如來は其處をお見拔き下されて、私共の爲に願行をお勤め下され、其の出來上りたる大善大功德を一名號の中に攝めて、功德善根のなき貧苦の者は、此の名號を持ちて涅槃の城に來るがよいと、お呼びかけ下さるのである。それゆゑ私共は何等の

遠慮も疑惑も挿まずして、其の名號を頂き、後生御助け候へと、むづと如來の御袖に縋り奉りて稱名念佛すればよい。さすれば大悲の阿彌陀如來は、可愛い一子であるとて、八萬四千の大光明の中に攝取し給ひ、假令鬼が連に來ても、惡魔が引張りに來ても、決して其の手にお渡しなさることはない、之を經には橫絕五惡趣惡趣自然閉とお說きなされてある。お互に此の境涯に立ち至つたならば、未來の事に就いては何等の心配も入らぬ身となり、從つて現在生活の上にも、誠に心安い日暮しが出來ることとなる、之を信心決定の行者と申すのであります。宗祖聖人は私共をして、一日も早く此の身分にしてやりたいとの遺瀨なき思召の爲に、滿九十年の間種々と御苦勞下されたることである。されば聖人の御苦勞の程を窺ふに就いても、一日も片時も急ぎて信心決定して、目出度念佛の行者とならねばならぬことであります。

第一四　大慈阿彌陀佛

建長八年丙辰二月九日夜寅時、禪の寤位夢想の告云、聖德太子親豐聖人を禮し奉て曰、敬禮大慈阿彌陀佛、爲妙敎流通來生者、五濁惡時惡世界中、決定卽得無上覺也。しかれば祖師上人は、彌陀如來の化身にてましますといふことあきらかなり。

御傳鈔上卷第四段の御文であります。此の御文の始めに建長八年とあるは、年次を擧げられたものであつて、宗祖聖人の八十四歲の御時である、二月九日夜寅時とは、月と日と時とを指示し之を當今の曆に當つると、ざつと一ケ月遲れで三月十日の朝の四時頃となる。其の時お弟子の一人なる蓮位房が、聖德太子が出現せられ宗祖聖人を禮拜し、

敬禮大慈阿彌陀佛　爲妙敎流通來生者

五濁惡時惡世界中　決定卽得無上覺也

と讃歎なされたと云ふ夢を見た。此の讃歎の偈文のおこゝろは、大慈大悲の阿彌陀如來を敬禮したてまつる、御佛は十方群生海の衆生の、三毒五欲の中に常沒

常流轉せる有樣を、見るに見兼ね給ひ、それを救はんとて、我が使に我が來にけりとの風情にて、淨土の蓮臺を後にして、他力念佛の妙教を流通せんが爲に、宗祖聖人と姿を變て來生せられた。此の御出現のありし爲、前佛の出世には遲れ、後佛の出現には先き立ちたる、五濁惡時惡世界のたゞ中に在る惡人凡夫が、其の教に耳を傾けて、間違ひもなく無上正覺の證りを開くことが出來ることゝなる、誠に難有き仕合であると、滿腔の感謝をお述べなされたと申すことである。次に「しかれば祖師上人は、彌陀如來の化身にてましますといふことあきらかなり」とあるは、此の聖德太子の御讃歎の偈文の意を味うてみると、我が祖師聖人は阿彌陀如來の御化身であると云ふことは、一點の疑をさしはさむことが出來ぬと云ふ、覺如上人の御批判のお辭であります。

御文の意味はざつと斯樣であるが、さて蓮位房は何うして斯樣な夢を見たか、又覺如上人は何故に此の樣な夢の話を御傳鈔の中にお書き加へなされたか、此の二つのことは是非共一考してみなければならぬ、大切なる問題であります。

それにつき先づ夢の因緣からお話しすることゝする。今は昔承久元年の七月下旬の候、其の當時の北面の武士であつた源賴茂が亂を起し、仁壽殿を燒伐ちした。所が賴茂は直に捕へられて、誅に伏して治まりがついた。賴茂の弟に宗重と云ふ十八歲の若侍があつて、常陸の下間の城の留守を預かつて居つたが、兄の罪に依つて同じく死罪に處せらるべきことゝなつた。宗祖聖人は如何にも不便な者と思召し、命乞ひしてお連れ歸りなされ、お弟子となされた、此が則ち今の夢を見た所の蓮位房である。斯樣な因緣のある爲、蓮位房は宗祖聖人をば命の親と尊敬し、爾來御膝下を離れずしてお給侍申上げてをつた。

所がそれより三十七ケ年經ち、世は建長八年の春を迎へ、昔の十八の若侍の蓮位房も、今は五十五歲の老人となつた。此の春の始めより宗祖聖人は、何にとなく御不例の氣味に渡らせられ、始終病床の人におなりなされた。何分にも御老體に渡らせ給ふことであるで萬一のことがあつてはならぬと、お弟子方は深くお案じ申上げた。蓮位房は兄弟子の顯智房と共に、夜の目も碌に睡らずして

御看護申上げて居つた。所が一日御看護のひまに、顯智房と種々の物語りをしてをつたが、不圖したことから蓮位房は顯智房に向ひ、貴房は御師匠をば如何なるお人であると思はるゝかと尋ねた。すると顯智房は、それは申す迄もなく權化の御再來であらせらるゝと答へたるに、蓮位房は、自分も時には左樣であらうと想ふともあるが、又時にはさうでも無からうと疑ふこともあつて、明かな判斷がつきかぬると申し、顯智房の意見には全然同意を表せなんだ。顯智房は茶を喫みながら莞爾として、それは人々の觀めやうであるで、今此處で彼れ此れ云ふても所詮がない、孰れ其の中に思ひ當らるゝこともあらうと申して、話の緒口を切つて了ふた。蓮位房は物足らず感じたるも、此の上議論するのもよろしからずと存じ、其儘としてしまうた。

此の話があつてより間も無く二月九日の夜蓮位房はさきの夢を見たのである。餘りに不思議な夢であるので、醒めて後其事を顯智房に物語ると、智顯房は其處である、それゆゑ前日は孰れ其の中に思ひ當らるゝと申したのである、御師匠は尋常の方とは異つてをる、正しく阿彌陀如來の御化身であるに相違ないと申した爲、蓮位房は非常に感動し、爾來ひとしほ心を入れて、御給侍申上ぐることゝなつた。

夢物語の因緣は斯樣である。さて次に覺如上人は何故に斯樣な不思議な話を、御傳鈔の中にお記しなされたかと云ふことを、お話ししなければならぬ。昔の厚信の方々ならば、此の物語を聽聞すると、何んのこともなく、實に難有いことゝ隨喜の涙に咽びもしやうが、今日の如く學問の進んだ世の中では、なか〳〵さうは參らぬ、却つて夢なんかゝ何んの證據になる、そんな事を唯一の證據として、それゆゑ宗祖聖人は彌陀如來の化身であると談ずることは、實に不合理の至りであると、一概に否定し去るに相違ない。尤も私とても夢物語が何程の價値を有するか、又それが實際上の事實と、何れほどの相違があるかと云ふ位なことは、充分承知はしてをる、而もそれにも拘はらず、此の物語に對し深厚の敬意を表するに就いては大なる理由がある、先づそれを一つお話しする。

人ありて若しお互の宅へ參り、貴方の御主人はなか〳〵難有いお方でござる、私は夜前の夢に、聖德太子が現はれ給うて、貴方の主人を阿彌陀如來の御化身であると讃歎せらるゝのを見たと申した所で、お互の家族の者は、如何にも左樣でござるに相違ないと、同意致すであらうか、恐らくは此の人はよい加減なお上手を云ふと、鼻のさきであしらうて、決して取上げは致すまゐと思ふ。何故に左樣に同意せぬかと云ふに、それは私共の日常の所作が、常に如來樣に遠ざかり、始終鬼の仲間に近い事のみを致すからである。若し私共の日常の所作が、佛の御行ひに近寄つてをつたならば、家族の者も或は左樣であるかも知れぬと、一分の同情を他人の稱讃に表するに相違あるまゐと存ず、此の點が卽ち大に注意しなければならぬ所である。人情は昔も今も變らぬ、宗祖聖人の日常の御行狀が、お互の如く朝から晩まで三毒の煩惱づくめであつたならば、蓮位房は決して前申したやうの疑問も起さなければ、又其の夢物語に對しても、隨喜の涙を零す筈はない。然るに斯くも感動したと云ふことは、全く宗祖聖人の眞俗二諦に亘つての御所作が、私共と大に異つて居られた所があつたからであらう。

此の外に今一つ注意しなければならぬことは、此の夢想があつた年代である、私は之れが若し三十七年の昔、卽ち承久の元年頃にでもあつたことならば、左程に難有くも感じはせぬ。何故ならば若し其の時分であると、蓮位房が宗祖聖人に命乞ひをして頂いた時であるで、凡そ此の世の中には聖人程難有いお方は無いと、一途に仰信してをる時であるから、それが夢となつて現はれたのであらうと申すことも出來るからである。然るに其時より三十七ケ年を經過し、血氣盛りの蓮位房も、今は五十五歲と云ふ分別盛りとなり、過去三十七ケ年間常隨昵近して、宗祖聖人の御行狀をば、夜となく晝となく、遂一に見聞申したる上に、如何にも阿彌陀如來の御化身にて在ますに相違ないとの確信を懷いたのであると思ふと、私は何んとしても此の一條の物語に對し、深厚の敬意を表せずには居られぬものであります

三十七ケ年と云ふ長い年月の間蓮位房は宗祖聖人の如何樣なる御行狀を見

聞し奉つたのであらうか。抑も宗祖聖人の御一代は、是を大別すると二つとなる、卽ち二十九迄の自力御修行の御時代と、其の已後の他力念佛者の御時代となる。此の二つの時代の中に於て、蓮位房が感服し奉つたことが、萬一自力御修行の時代の事柄であつたのならば、私は少しも感歎することが出來ぬ、何故ならば廢惡修善は其の修行の根本思想であり、修諸功德は日常の行事である、從つて斯樣の行爲をなさる方は、一般の人々から觀めたら、如何にも殊勝のことであると感心するのは當然のことであります。

所が蓮位房が聖人のお弟子となつたのは、此の自力御修行の時代では無くして、後の他力念佛者の御時代である。他力の行者はもろ〳〵の雜行雜修を振捨てゝ、たゞ一心に念佛申すばかりである、されば聖人の御行狀の上にも、斯樣なことは迚も自分共にては企て及ぶことが出來ないと申すやうな、難行苦行のあつた筈はない、其の日常の御日暮しは、全く私共とは少しも變つた所は無かつたに相違ない。それにも拘はらず蓮位房が尋常の御方でないと感じた所を見ると、何うしても其處に何等かの原因があらねばならぬ。それに就いて茲に一つお話し申すべきことがある、蓮位房は彼の名高い辨圓濟度の一條と云ひ、或は又信樂房が聖人に背きて本國へ歸らうとした時、お側の弟子方が御本尊なり御聖敎なりを、お取上げになされては如何と申上ぐると、それはよろしくない、假令自分に背きて其等の聖敎等を野山に打捨てることがあるとしても、それを拾ひ上げたる者が、又何にかの因緣として佛敎に入るかも知れぬで、其儘に致しおくがよいと、仰せられたることも見聞してをる。凡そ此等の事は到底尋常人にて考へ至らぬ所である、而も聖人はいつの時にも、斯樣の御心掛けにてまします爲、蓮位房は、迚も尋常人では斯るやさしい心掛けで居らるゝものでない、恐らくは權化の御化身でいますであらうと、深く感じ入つて居つたに相違ない。

無碍光佛のひかりには　清淨歡喜智慧光

その德不可思議にして　十方諸有を利益せり

で、卽ち內心に頂かれて居る他力信心の御働きが、自ら其の外相に現はれ出で、

桃李ものいはず下自ら蹊を爲すの風情にて、聖人をして斯る芽出度き御行動に出しめられたのである。從つて蓮位房の感じ入つたのも、難行苦行に非ずして、此の常の一擧一動の上に現れ出でたる、御行狀にあつたものと思はるゝ。

斯樣に考へてみると、此の夢物語の一條の如きも、夢其物が難有いのではなくして、夢のやうなたよりない事柄に對してさへ、お弟子方が感涙に咽んだと云ふことが、非常に難有いことゝなる、而して其の感涙の流れ出づる源は、近く建長八年二月九日の夜に非ずして、遠く三十七ケ年の昔の承久元年より此の方、建長八年に亘る長い年月の間の、宗祖聖人の日常の御行狀が原因となつたものである。顧ふに私共は正しく目前に示したる事に對してさへも、他の人々より何んのかのと疑惑せらるゝものである、況して夢の樣なことを物語つた所で、誰一人として信用して呉れる者はない。然るに宗祖聖人は、夢のことでさへも其の弟子方に感服せしめらるゝと云ふ、偉大なる御德をお具へなされてある、此の一點のみにても、私共は聖人の前に頭を下げずには居られぬ。

さて此處迄お話し申して來ると、覺如上人が何故に此の物語を御傳鈔の中へお書き加へなされたかと云ふことを、大略推察し奉ることが出來る。上人は單に一場の不思議の物語であつたと云ふ位の感じで、お書き加へなされたのではない、私共が宗祖聖人として尊敬し奉る御方は、斯樣の御德の高い方であるされば苟くも聖人の御教を信じて、其の御流れを汲める者は、假令萬分の一なりとも、其の御行狀を慕ひ奉らねばならぬとの、御深切の思召の餘りに、御筆をお染めなされたものであらうと窺はるゝ。

思ふに他力念佛の教は、逆惡の凡夫を其儘なりで救はんとある、誠に切れ味の鋭い教である、それが爲に兎もすると、自分の持つた刀で、自分の身體を傷つくることが無いとも限らぬ。お互に逆惡の凡夫が本願の正客であるから、假令何のやうな惡い事を致した所で、我が往生には障害とはならぬと云ふやうな勸違ひを致したならば、それが正しく持つた刀で、其の身を傷つくると申すものである、されば萬一斯樣な心得違ひを致すものがあるならば、此の一條の御物語に顧

て、深く反省しなければならぬことである。尤も宗祖聖人と私共とは非常な相違はあるが、而も如來廻向の信心は全く同一である、してみれば其の御跡の慕へぬ筈もない、お互に茲に氣を付けて、我が日常の行爲を顧み、眞俗二諦に亘つて、宗祖聖人の御氣に叶ふ所の、日暮しをしなければならぬことであります。

第一五　吉水の告白

而翌日集會のところに、上人親鸞のたまはく、今日は信不退行不退の御座を、兩方にわかたるべきなり、何の座につきたまふべしとも、各々示給へと。そのとき三百餘人の門侶、みな其意をえざる氣あり。

御傳鈔上卷第六段に擧げられたる、名高い信行兩座のお話中の一節の御文である。法然聖人の御化導は、旭日の昇るやうな勢ひにて、都鄙上下の間に行き渡り、我も人もと聖人の禪室を訪ねて、出離の一大事を承はることゝなつた。本段の始めに其の有樣を說いて、「紫禁青宮の政を重ずる砌にも、先黃金樹林の蕚にこゝろをかけ、三槐九棘の道を正す家にも、直に四十八願の月をもてあそぶ。しかのみならず戎狄の輩黎民の類ひ、これをあふぎこれを貴ずといふことなし。貴賤轅をめぐらし、門前市をなす」と、お記しなされてあつて、上は九重の帝室のやんごとなき御方を初めとし、文武百官は申す迄も無く、下は底下の賤民に至る迄、孰れも他力易行の法門に歸依を致したことであつた。

此等多くの歸依者の中にて、其の重なる者を數へてみると、先づ禁裏にては、後白川法皇、高倉院、後鳥羽院を初め、女御の方々も多く御歸依あらせられ、文官にては關白兼實公を筆頭とし、大炊御門左大臣經宗公、花山院左大臣兼雅、右京太夫隆信、其の弟民部卿範光、大宮内府實宗卿、野宮左大臣公繼卿等あり、武臣に在つては、平重衡、平道盛、甘糟太郎忠綱、宇津宮賴綱、園田成家、熊谷直實、津戸爲家等である。加之出家の方にても、西山派の祖師となられし善慧房證空上人、鎭西派の聖光上人を初めとし、安居院の聖覺法印、往生院の念佛房念阿、二尊院の聖信房湛空、及法蓮房信空上人等の方々も、孰れも其の門下に集まつて敎を請はれた。

法然聖人は此等道俗の人々に對して、日々法門の御物語りをあそばされて、ひたすら念佛弘通の爲にお盡しなされてあつた。所が建永元年の春のさる日、宗祖聖人が法然聖人に對し、私は只今より六年以前に、難行道をさしおきて易行道の法門に歸入し、爾來恩師の御敎誨に依りて、今は正しく往生の一大事に就き、些少の疑ひも無き身となり、誠に身に餘る仕合せと歡びをりしも、それと共に日

頃思ひ煩ふことは、日々參集の方々の心中の程であります。此頃では常隨侍近の方のみにても、三百八十餘人に上り、而も此の多數の方々も、其の心は其の顏の異なるが如く、人々各別にして、等しく恩師の御化導を蒙りながら、其の心の据り處は或は相異つてをるかも知れませぬ、萬一左樣なことがあるとすれば、折角一師の下に集りながら、單に今生一世の契に終りて、未來は二十五有界に別れねばならぬことゝなります、それでは誠に遺憾至極でありますゆゑ、何うか御弟子方が參集の砌に出言仕つて、面々の心中を尋ね申さんかとも存じますが、此の儀如何なものでござりましやうかと、お尋ね申上げられた。

すると法然聖人は、それは至極よい所に氣付かれたることである、早速明日にても一同の參集したる折、貴房より其の旨を申出さるがよいと仰せられて、快く宗祖聖人の申出でをお許しなされた。此時の聖人の御心の中の歡びは、譬へやうのない程であつたと窺はる。されば其の夕

いつもよりけふの今宵のながきかな

あすのむしろをいかゝと思へば

との一首をお詠みなされ、明けの日の會合をば、おまちこがれなされたと申すことであります。

―― 愈〻其の當日となると、法然聖人は禪室の廣間の上座にお出ましなされ宗祖聖人は筆を執つて皆の方々の參集をお待ちになる。定刻になると三百八十餘人のお弟子方は、それ〳〵參上せられた。其時宗祖聖人は一同の方に對して、今日は御師匠の御許しを得て、御一同の日頃の御領解の程を伺ふことに致した次第である、御師匠樣のかねての御敎化は、彌陀の本願を信じて念佛申して往生せよとの仰せであるが、さて此の仰せの中に、本願を信ずると云ふことゝ、念佛を申すと云ふことの二つがあります。それで本願を信ずるとは、我が心に信ずることであり、念佛を申すは、我が口に稱ふることであります、されば信と行との二つとなるのでありますが、御一同は信を往生の正因として、正定聚の位に入り給ふか、或は行を正因として不退の德を得給ふか、其の邊の所を明白に仰せられたい、

私は其の申出を承りて、それ〳〵に記帳致さんと存ずと申し出された。本段には此事をば、「上人親鸞のたまはく、今日は信不退行不退の御座を兩方にわかたるべきなり、何の座につきたまふべしとも、各〻示し給へ」と、お記しなされてあります。

―― 參集の方々は餘りに不意の尋ねにして、而も信不退か行不退かと云ふ點に就いても、未だ心が定まつてをらぬ爲、さしづめ何んと返事を申してよいかと、途方に暮れられたる模樣がみゆる。御傳鈔にはその有樣を記して、「その時三百餘人の門侶、みな其意をえざる氣あり」と記してある。

兎角の中に法印大和尙聖覺は、私は信不退に座に着かんと申し出でられた。此の聖覺法印と申す方は、宗祖聖人とは無二の親友であつて、もと聖人を吉水へお導きなされたのも此の御方であり、それに此の御方は吉水の門下に在つても智慧第一と申され、朝廷への御用の如きも、始終法然聖人のお代理として、參內なされたと申すことである。法印のお書きなされたものに、唯信鈔と申す御聖敎

があるが、宗祖聖人はそれを和げて、唯心鈔文意と云ふ一部の書を御製作なされました、其の外銘文の中にも、法印のお辭につき、なが〳〵とお述べなされてをる所がある。斯様の御方であるゆゑ、宗祖聖人と同一の安心にてましますことは、申す迄もないことである。

一　眞宗開話

聖覺法印につゐいて、信空上人がお出ましなされて、私も法印と同樣に信の座に着かんと申し述べられた。此の御方は中宮大進治部太輔行隆卿の第七男であつて、明善法印は此の信空上人をば、念佛宗の先達傍若無人と云ふべしと譽られたことがある位、厚信なお方である。

斯く聖覺法印信空上人と、次第に信の座へお着きなさると、其處へ熊谷蓮生房が遲れ馳せに參上して來た。御繪傳を拜見すると、其時の蓮生房が急いで來た有樣があり〳〵とみえる、傘と杖とが椽側に打捨てあり、下駄の片足はひつくりかへつてをる、如何にも大急ぎで參つた有樣が、目に見えるやうに描かれてある。さて參上してみると、平常とは事變りて、何にか一大事の相談でもあるやうにみゆる。かねて南都北嶺の方々から、種々の難題を持ちかけられて居ることであるで、熊谷は心配でならぬ。それで座に着くや否や直に、「善信の御房の御執筆何事哉と」お尋ね申した。聖人は、「信不退行不退の座をわけらるゝなり」とお答へなされた。熊谷は、「しからば法力もるべからず、信不退の座にまいるべし」と申して、直に其の席に着いた、それで信の座の第三番目が熊谷と定まる。斯く定まると熊谷は重ねて、誰か私の先きに信の座に着かれましたかと尋ねたるに、聖人は、左樣でござる、第一の着座は聖覺法印、第二は信空上人、さて第三が貴房でござるとお答へなされると、熊谷は、それは殘念至極のことを致した、自分は武門に在つた折りは、九郎判官の配下に屬し、大小幾十度の戰ひに參加し、就れの時にも一の鎗の手拭は人に讓つたことがない、されば出家を致したる後も、極樂往生の一大事の相談に當つては、斷じて人後に落ちるやうな不覺は取らぬと覺悟致してをつたに、今日遲參の爲に、斯く一の鎗の功名は聖覺法印に取られ、二の鎗も出來ぬとは、實に心外の至りである、非常に落膽したとのことである。

斯くて日も漸く西山に傾きかけたが、而も誰一人として熊谷に續いて申出づる者がない、そこで宗祖聖人は、御自身の名前を信不退の方へおかきなされた。それからやゝ暫くありて法然聖人は、源空も信不退の座につらならんと申出でられたるに、三百八十餘人の方々は、孰れも「あるひは屈敬の氣をあらはし、あるひは鬱悔のいろをふくめり」とあつて、斯んなことなら始めから信不退の座に着くべきであつたにと、孰れも後悔なされたと申すことである。

信行兩座の區別のお話は、是でざつと申述べ終つたのであるが、之をお聞きなされて、何うお感じなされたとであつたか、三百八十餘人の方々に就いては、「常隨昵近の緇徒そのかずあり、都三百八十餘人と云々」と、お記しなされてあるからは、決して障子の外や椽の端にて、腰掛聽聞をせられた方ではない、孰れも三衣着用の僧分のみで、日々吉水の禪室に參集し、而も常隨昵近して其の敎へを蒙り、更に餘念の無き人々であつて、決して在家の人々が商買片手に聽聞するやうなとは、全く其の趣きを異にしてをるのである。加之此を敎導あそばす方は、古今に比類の無き智慧第一の法然聖人であります、然るにそれであるにも拘らず、愈心中の領解は何うかと尋ねらるゝと、前述の如き次第である。三百八十餘人とある此の餘人の辭の中には、四五人と云ふ意味が含まれてある、してみると聖覺法印、信空上人、熊谷蓮生及我が聖人と、信の座につかれた方を除いてみると、幾りの人數は三百八十人內外となり殆んど其の總體と申してもよい位である、それが孰れも御師匠と同一の安心に住せられてをらなんだと申すことは、實に想像の出來ぬ程の事柄である。

御傳鈔の中には、其の理由を說明して、「こゝに數百人の門徒群居すといへども、更に一言をのぶる人なし、これ恐くは自力の迷心に拘りて、金剛の眞信に昏きがいたすところ歟」と申してあります。卽ち三百八十餘人の人々は、未だ自力の迷ひがさめやらぬ爲に、折角の明師に遇ひ奉りながら、其の御化導の眞髓を會得することが出來なんだのである、大經の中に「若し斯經を聞きて信樂受持することは、難中の難にして、此れに過ぎたる難は無し」と仰せられてあつて、何分にも自

分の一切の智慧も才覺も打捨てゝ、心身を擧げて如來の大願力に打ち任すと云ふのが、他力の極意であるから、たゞおうやうの聽き方をして、自力の迷執が離れないと、到底金剛の信心は頂かれるものではない。

只今では信不退か行不退かと尋ね申したら、我も〳〵信不退と述べらるゝに相違ないが、爾し其の領解は七百年の昔に、信不退で往生するのであるとの手本が描いてあつたからのことである。從つて今の領解は何うかすると、其の手本の上を繪取るやうな事には成つてをりはせぬか、萬一其の手本を引上げらるゝことがあつても、立派に信不退と進み出ることが出來るであらうか、是れは確かに熟考せねばならぬことであります。古今第一の明師なる法然聖人の御化導を蒙りてさえ、斯樣であるとしてみると、今日の我々くは餘程に心を入れて聽聞致さないと、到底無二の念佛者となることは出來ないかも知れぬ。されば此の座り連らなる方々は、此の一條の物語を承はるにつきても、此度の一大事に就いては浮々と聽き流してならぬと、深く注意せられたいことである。

信行兩座の御批判は昔吉水の禪室のみにあつたと思うてはならぬ、今日只今此の座に在つても、我が心の中には、此の御批判の御相談がふりかゝつてをるとは覺悟しなければならぬ。信じて助けらるゝか、行じて參る積りであるか、多少の念佛が稱へらるゝと云ふ所に安心して、まさか地獄に墮つるやうなことはありもしまぬと思ふやうな心中で居られはせぬか、萬一左樣なおゝまかな聽き樣であつたならば、斷じて金剛の信心は頂かれるものでない、何んでも一つ心根を丈夫にして、久遠劫來の自力の迷執を打破つて、うつくしき他力の行者となり、此等先達の方々の御跡を慕ひ奉る身の上と、ならねばならぬことである。

信か行か。辭はたつた二つであるが、而も此の二字の心得樣によつて、超證涅槃の大益が得らるゝ身ともなれば、又其の反對に再び生死の海に沈沒しなければならぬともなる、されば お互に心を入れて、眞面目に聽聞しなければならぬことであります。

第一六　武藏野の蓮生房

次に沙彌法力熊谷直實入道遲參して申云、善信の御房の御執筆何事哉と。善人上人のたまわく、信不退行不退の座なわけらるゝなりと。法力申て云、しからば法力もるべからず、信不退の座にまねるべしと云云。

信行兩座の區別の席に於て、最も異彩を放つたのは熊谷入道であるが、此の熊谷の事に就いては、種々お話し申したいことがあるで、今回はそれを申述ぶることゝする。

文治元年の春の三月、平家の一族が壇の浦の藻屑と消えて後、世は源氏の天下となつたが、是れまで源氏の配下に在つて、關東一の荒武者として名を轟かしてをつた熊谷も、泌々と世の無常を感じ、遂に遁世して佛門に入り、一つは自分の後生の爲、一つは敵味方の人々の菩提をも弔はんと決心し、窃に鎌倉を逃れ出でゝ京へ上ることゝした。其の途中箱根に泊つた時京より下り來つた妙眞といふ尼と同宿し、其者より念佛往生の法門を聽き、且つは京に上らば安居院の聖覺法

印なり法然聖人を訪ねて、詳しく其の教を受くるがよいと云ふことまで敎へられた。熊谷は殊の外のよい手がゝりを得たことゝ喜び、それで京に上り來るなり、直に聖覺法印を訪ねて出家の手引を願ふことゝした。

熊谷が安居院の聖覺法印の下に參つた時、先づ式臺の石にて懷中せし短刀を研き、其の上にて坂東より來つた者であるで、何うか法印に面會を得たいと申入れた。院の人々は其の樣子のたゞならぬを觀め、先づ第一に驚いた。中には熊谷であると云ふことを知つてをつた者があつて、其の旨を聖覺法印に申入れて、御用心なさるがよいと云ふ注意をした者もある。爾し面會せずには濟ます譯にも參りかぬるで、やがて法印が出て逢はるゝと、熊谷は、自分は武門に生れた悲しさには、幼少の時より武器を執つて戰場に出で、多くの人を斬り殺し、首を取ること數知れぬ程でありました、斯樣な者でありますから、到底人並の事では成佛することは出來ますまいで、若し此の手が人を斬つた手であるで、切り捨てねばならぬとならば、惜氣なく切り捨ても致し申す、或は腹を斷ち切れとのことなら

ば、それも致し申すで、何うか御遠慮なく私に成佛の道を敎へ下されたいと申出でた。是を聞かれたる法印は涙を流して喜び入られ、其の覺悟ならば菩提の大道も直に悟ることが出來るとて、懇に生死無常の理を申聞かされ、尙ほ吉水に法然聖人をお訪ね申して、其の敎を受くるがよいとのこと迄申添へられた。熊谷は非常に喜びて、直に吉水の禪室をお訪ね申すことゝした。

法然聖人は早速お出逢ひなされ、貴下が熊谷殿でござるか、今日斯うして佛門に入らるゝも、全く佛の御計らひに出でたることであつて、凡夫の淺はかなる考へから出たものでないで、先づ其の邊の所をお考へなさるがよいと申聞かされ、それより御懇に極重の惡人は彌陀の本願を信じ、念佛申して往生するより外に、成佛の道が無いと云ふこと、且つ其の彌陀の本願には、善惡の凡夫を簡び給はぬがゆゑに、貴下の如き武門の方にても、何んの遠慮も入らぬ、たゞ〳〵本願の不思議力を信じて、念佛を歡ぶに限ると云ふことを、叮嚀にお物語りなさると、熊谷は大聲を上げて足ずりして泣き叫んだ。聖人は何故にさやうに泣かるゝかと

お尋ねなさると、熊谷は、自分の如き多くの人を斬り殺した者が、成佛させて頂くことであるで、定めし頭を碎き手足を切捨て、生命をも差上げねばなるまゐと存じ、家を出る時より深く其の覺悟を致して參つたことであります、それに指一本切ることも入らず、唯念佛申すばかりにて、往生成佛することが出來るとは、何にたる難有いことであるか、是では折角用意致したる短刀も役に立ち申さぬことゝなり申した、是を思ふと泣かずには居られませぬと、思ひのありだけを打明けて申上げたる所、聖人は熊谷の此の飾なき告白をば、深くお歡びなされて、尙ほ御懇に易行の法門を御物語りあそばさると、宿緣純熟したる熊谷は、卽座に無二の念佛行者となり、其儘吉水に止まつて、長へに聖人の御敎へを受くることゝなつた。

此の熊谷の入信の因緣をお聞きになつた方々は、何ういふ感じが浮かびましたか、思ふに道を求むる者は此の覺悟が無くてはなりませぬ、昔は雪山の童子は一句の法文を聞かん爲に、身を羅刹の毒牙に投せられたことがあり、今は熊谷は

短刀を懐中し、必要とあらば生命を差出しても苦しくないと云ふ覺悟を致してをつた。それであるで法然聖人の御化導が一言半句もあだに聞えぬ、皆悉く我が往生成佛の唯一の門戸であると承はり、唯一座の御化導の下に、無二の信者となつて了ふたのであります。

一體私共は御法義の聽聞に就いての心掛けがよろしくない、今日諒解することが出來なんだならば、復明日承はる迄のことゝ、恰も我が身に關係せぬ世間話でも聞く時のやうな心持ちにて、お座參りをしてをりはせぬか、左樣なことでは、假令一生涯法義の席へ顏を出して居つても、信心の獲られる時はない。熊谷は生命がけで吉水へ參上してをる、若し法然聖人から、お前は其の手で多くの人を殺したのであるで、そんな淺間敷き手は切捨てねばならぬと仰せられたら、卽座に左右の手を切捨てたに相違ない、お前のやうな者は、人並では助かる道がないで、此の場で切腹するがよい、されば今生の罪が消えて、來世は成佛することが出來ると仰せられたら、直に腹も切つたであらふ、何しろ生命がけである。法然聖人の前に座つた熊谷には明日の生命はない、晝に明日の生命がないのみならず、次の一刻迄の生命もない、唯今卽刻が娑婆の終りとなるかも知れぬの覺悟をしてをる、それであるから極重惡人無他方便、唯稱念佛得生極樂の御化導が、泌々と此の熊谷一人の爲であると頂かれたのである。

御法義のお話は決して學問沙汰ではない、此の一句が解せられぬから、それが會得出來ねば安心が出來ぬとか、此の道理が承知出來ぬで、念佛が歡ばれぬとか云ふ樣な、呑氣な學問沙汰ではない、一息々々が娑婆の終りである、解かる解らぬと云ふやうな議論をしてをる場合でない、無常の殺鬼は只今汝の生命を取るにより、其の以前の一分間の中に、出離の要道を聞けと申してをるのである、一刻實に千金萬金である、決してあだに過ぐすことは出來ぬ、短刀を胸元に突付けられて、今生命を取るが、さて平生の聽聞は何うぢやと云はるゝ思ひになつてみると、其儘來いとの御勅命は、他人の爲ではなかつた眞に私一人の爲であつたと云ふことが、疑ひなく會得出來るに相違ない。

さてお話が前にもどるが、法然聖人の御化導に依つて無二の念佛行者となつた熊谷は、其の後日々吉水の禪室に參つて、法然聖人の御化導を蒙つてをつたことである。所が正治二年の秋、古郷の老母が病氣であるとの通知を得た爲熊谷は取る物も取り敢ず吾妻へ下ることゝした。かねて慈恩大師の「行住座臥不背西方」の金言を守りて、出家以來一度も西方に背を向けたことの無いので、何うして關東へ下らうかと深く心配した。其の結果とう〳〵鞍を逆さに置かせ、それに乘つて吾妻下りをした。道行く人々はその理を知らぬ爲嘸れもあれよあれよと指ざし笑ふたが熊谷は一向平氣である。

淨土にも剛の者とやさたすらん
西にむかひてうしろ見せねば

とは、其時熊谷が詠んだ歌であります。

長い東海道の道中を、時には逆馬に乘り、又時には徒歩で急いだが、藤枝の宿に着いた時に、路用の金が無くなつて了ふた。それでさる家を訪ねて、旅の者で路用が盡きて困り居ることであるから、何うか鳥目一貫借して貰ひたいと申入ると、宿の主人は、見知らぬ方に貸すと云ふことは出來兼ね申すが、爾し路用金が無くてはさぞ御迷惑のことならんで、何かよい質物にてもあらば、それをお預り申して御用立てせんと申した。熊谷は、見らるゝ通りの身の上なれば、是と云ふ物も所持致し申さぬが、爾しそれが無くては貸されぬとあつては困り入り申すと云ひ、何うしたものかと暫らく考へて居たが、やがてはたと手を打ちて、それでは至極大切の寶なれども暫くお預け申すで、何うか口を開いてお受け下されと申した。

主人は不思議でならぬ、質物ならば手にてお受け申すべきに、口にて受けよとは何ういふことでござると尋ねたるに、熊谷は、世の常の寶ならば手渡しも出來申すが、自分の寶はそんな麁末な物ではござらぬ故、是非口にてお受けがして貰ひたいと申して、何うしても主人の申出を聞かぬ。主人も妙なことゝは思ひながらも、それではお受け申さんとて大きな口を開いた。すると熊谷は、うや〳〵

しく合掌しつゝ、十念の念佛を稱へたるに、不思議にも一念佛毎に金色の佛體が現はれて主人の口に入つた。主人を初め一家の者は、此の不思議にいたく打驚き、是は定めし常尋人にてはあるまねと存じ、其の名を尋ねたるに、熊谷は自分は名も無き念佛者であると申すのみにて少しも實を語り申さぬ。やがて主人より差出したる鳥目を受取り、大切なる寶物なれば、いづれ受け出し申すで、是非に流さぬやうにして貰ひたいと申殘して出て行つた。

武藏野にさしかゝつた時、先方より大勢の供をつれたる武士が來る。熊谷は自分の昔なぢみの者では無いかと思ひながらも、途を避けて打伏して居ると、其の中に武士は熊谷の前に來た。誰であるかと我れ知らず頭を上げてみると、思ひも寄らぬ年來親しく交つてをつた宇都宮彌三郎賴綱であつた。熊谷は笠を取つて、さて〳〵宇都宮殿でござつたか、自分こそは昔の熊谷でござると申したるに、馬上の賴綱は物をも云はず唾を吐きかけた。熊谷は以て外の慮外なりと、直ちに笠打捨てゝ飛びかゝらうとしたが、又忽ち大地に打伏して涙を流し、あ

ゝ自分が惡かつた、昔友達にさへ振捨てられたる此の者をば、阿彌陀如來なればこそ御助け下さるのであると申して、お念佛を稱へて行列の行き過ぐるのを待つことゝした。

此の有樣を觀めたる賴綱は、忽ち馬より飛び下りて、あゝ自分が惡かつたお許しあれ、自分は此度都の大番に參るのであるが、貴下が出家なされたことも豫て聞き及んでをるから、いづれはお尋ねも申さんと存じてをつたことであつたに、斯樣な處でお目にかゝるとは存じもよらぬことであつた、只今の振舞は其の罪許し難からうが、幾重にも御容赦ありたしと申し、それより兩人は種々と昔物語りなどをした。熊谷は貴下も今は時めく武士にてあるも、無常の風は何時其の身の上に吹き來るかも知れぬで、是非にお念佛を申されたいと、懇に本願の不思議の程を物語り聞かせた所、それが佛緣とも申すべきであつたか、其の後賴綱も亦法然聖人に從つて出家し、殊に後年此の賴綱が、自分の一族の稻田九郎賴重に申送りて、宗祖聖人を越後國より常陸へお迎へ申すことゝしてをる。

さて此の熊谷と頼綱との武藏野の會見の一條に就いては、私共は深く我が身の所作に就いて顧みなければならぬことがある。熊谷は久しく逢はなんだ友達と出遇うて、あゝめづらしい所で出遇ふたと、我を忘れて聲をかけた、それに先方では唾を吐きかけた、斯樣の場合に出遇ふたら、お互は熊谷のやうに、あゝ私が惡かつたと大地に打伏して、阿彌陀如來の御恩を歡ぶことが出來るであらうか。世の中は極樂の聖者の仲間のみではないで、種々の事にも出遇へば、種々の人とも交らねばならぬが、如何なる時にも鬼の姿を現はさずして、お念佛一つで通ることが出來るであらうか。何にかと云ふと、私は當り前の事をしてをるに、先方が無法に出るから仕方がない、斯樣なことまで默つて居ると、人が馬鹿にして了ふと、常に我が身の我慢の角を振立てはせぬか、若し左樣なことがあつたら、實に熊谷に對して恥かしいことである。

一代の半以上を戰場で暮した熊谷は、一旦法然聖人の御化導を蒙りたる後は、極樂參りがうれしくてならぬ爲、西に背中を向けることもせず、逆馬にまで乘つて吾妻下りをしてをる。然るに生れ落ちたる其日より、淨土眞宗の御門徒として頂きながら、御佛の前で親子兄弟が喧嘩するやうなことがあつては、實に佛祖聖人に對して申譯が無い、如何に此儘ながらの御助けであるとは申しても、少しは其の邊の事に就いて注意しなければならぬ。蓮如上人は御文三帖目第十三通に、「夫當流門徒中において、すでに安心決定せしめたらん人の身のうへにも、また未決定の人の安心をとらんとおもはん人も、こゝろうべき次第は、まづほかには王法を本とし諸神諸佛をかろしめず、また諸宗諸法を謗せず、國とところにあらば守護地頭にむきては、疎略なくかぎりある年貢所當をつぶさに沙汰をいたし、そのほか仁義をもて本とし、また內心に阿彌陀如來を一心一向にたのみたてまつて、自餘の雜行雜善にこゝろをばとゞめずして、一念も疑心なく信じまねらせば、かならず眞實の極樂淨土に往生すべし、このこゝろえのとをりをもて、すなはち彌陀如來の他力の信心をえたる、念佛行者のすがたとはいふべし」と仰せられてある。してみるとお互に安心と未安心とに拘らず、人の人たる道に就いて

は、深く注意せねばならぬことであります。況して熊谷が此の生きた行狀の說教をして呉れてをることを聽聞した上は、些細の事に何んのかのと不足を申すべきではない。

故郷に歸つた熊谷は、暫時家に止まりて母の病氣の看護をして居つたが、其の中に病も漸次輕快に向うて來た爲、再び都へ上ることゝした。歸り途にてさきの藤枝の宿へ立寄りて、宵て借り受けたる鳥目を返し、其の代りに質入れしたる十念の念佛を返して貰ひたいと申入れると、是には主人も困り入つて了うた。貴僧の如き高德の方なればこそ、斯る御奇瑞の事も出來申すべきも、我等如き下賤の身にては、逆も左樣なことは出來難ければ、何卒御許し下されたしと、ひたすらに謝し入るのみである。

熊谷は、否や〳〵左樣ではない、念佛は我が力で稱へるものでもなければ、又作りたるものでもない、されば賢者が稱へたとて其の功德が增すでもなければ、愚者が申したとて減りもせぬ、よしや善人であらうが惡人であらうが稱ふる念佛には少しも變りなければ、何んの心配も入らぬ、先づ稱へさつしやるがよい、すれば早速お受取り申さんとて、大きな口を開いて其の用意にかゝつた。主人も詮方なく、それでは稱へてみましやうとて南無阿彌陀佛と申すと、不思議にも一體の化佛が現はれ出でた。斯くて十念念佛の九の聲まで稱へた時、傍らにあつた家內が、斯樣に尊きお念佛なれば、是非に後の一聲を私共夫婦の者にお讓り下されと申し、主人も亦堅く其の口を閉いで了うた。熊谷は左樣に所望さるゝことならば、其の方達の望みに任せて取らすると申聞かし、其儘立出でゝ都へ上つたと申すことである。所が後年宗祖聖人が關東より都へお歸りの節、此の主人は深く聖人に御歸依申上げて、我が家をば道場とした。斯くてさきに熊谷が種蒔き致した念佛が、芽出度く花を咲き實を結ぶことゝなつたのである。

熊谷の一代に就いては、斯樣な難有い話がある、兎も角斯る厚信の方であつた爲、信行兩座の區別の時に、何んの考ふる暇もなく、直ちに「しからば法力もるべか

らず、信不退の座にまいるべし」と、卽座に信の座に着かれたのである。お互に熊谷の跡を慕うて、如何なる時にも、然らば我も漏れてはならぬ、信不退にて往生させて頂くと云ふ身に、一日も早く成らねばならぬことであります。

第一七　同一の信心

そのゆへは聖人の御信心と、善信が信心と、いさゝかもかはるところあるべからず、たゞ一也と申たりしに、この人々さがめていはく、善信房の聖人の御信心と、我信心とひとしと申るゝこと謂なし、いかでひとしかるべきやと。

只今申述べた信心諍論のあつたのは、建永元年の秋の八月のことでありました。此の日吉水の禪室では、宗祖聖人を初め、聖信房勢觀房念佛房等の上足の御弟子方がお集りなされて、四方山のお話しをなされてをつたが、そのうちにはからずも他力信心のことにつき一大諍論が始まつた、御傳鈔に「上人親鸞のたまはく、いにしえわが大師聖人源空の御まへに、聖信房勢觀房、念佛房以下の人々おほかりしとき、はかりなき諍論をしはんべることありき」とあるが、卽ちそれである。念佛房の申さるゝやうは、同じく淨土往生を願ふと云ふも、凡夫の信心は何うしても誠が足らぬ困つたことである、自分の如きもいつになつたら、御師匠の如き堅固の信心を得て、疑ひなく往生を遂ぐることが出來るであらうかと。列座の

方々は、如何にも左樣でござる、私共の如き淺慮の者では、容易に大師聖人の如き芽出度き信心の行者となることは出來申さぬ、貴房のお嘆きに就いては實に同感の至りであると申された。所が宗祖聖人御一人は、自分は左樣に存じ申さぬ、上人の御信心も善信の信心も、いさゝかもかわりはないと思ふと、反對の論を申し出された。

すると聖信房以下の人々は、是はけしからぬことを申さるかな、貴房の信心と聖人の信心とが少しもかわらぬとは、餘りに差し出でたる申分ではないか、其の理由をば詳細に承はり申したいと反駁せられたる爲、茲に議論の花が咲いて來た。さて此の議論のことにつきお話し申す以前に、少しく聖信房以下の人々の略歷を物語つておくことゝ致します。

聖信房湛空は德大寺左大臣實能公の孫で、始めは天台の法門を學びて一角の學匠となられたのであつたが、中頃法然聖人に歸依し無二の念佛行者となり、嵯峨の二尊院に住して、ひたすら念佛三昧を修してをられた。此の信心諍論のあ

つた年の冬のさる夜、吉水の禪室にお泊りなされたが、夜も更けて人の寢靜まる頃、法然聖人が獨り聲高々とお念佛を稱へらるゝと、聖信房は餘の難有さに、私も共にお歡び申て居りますと云はぬばかりに、一聲二聲咳拂ひをした。然るに翌日法然聖人が聖信房に對し、昨夜自分が稱名申してをつた時、咳をしたのは貴房であるかとお尋ねなされた。聖信房は如何にも左樣でござります、他人は御師匠のお念佛を拜聽致しませねど、私のみは確かに承はりをり申すと云ふ趣きをお知らせ申さんが爲、斯くは咳拂ひを致したことでとお答へ申し上ぐると、法然聖人は殊の外御機嫌惡く、それはけしからぬことである、自分は人に聞いてもらうが爲に念佛は稱へ申さぬ、昨夜は餘りの寒さに、老の身には寢付き惡く、それにつきても法藏菩薩が此の法然一人を濟度せんが爲に、假令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔と、寒苦の中も御厭ひ無く御苦勞下されし程が偲ばれて、つい我を忘れて臥床より出でゝお念佛申したやうな次第で、決して他人に聞かさうと申す樣な所存は毛頭もないと申されたる爲、聖信房も覺えず感涙に咽んだと

申すことである。法然聖人の御流罪の時には、聖信房は配所へお供をして參つた。建長五年七十八歳にて往生せられた、宗祖聖人の御往生に先だつこと十一ケ年である。

次に勢觀房源智は淨華院の開基にて、備中守平師盛の子である、平家沒落の後世を憚り、十三歳にて法然聖人の御弟子となつた。聖人は殊の外愛まれて特別に教育をせられたと申すことである、聖人にお仕へ申したこと十有八年間であつた。聖人の御往生の間近ふなつた時、聖人に對し、念佛往生の要義は年來御化導を蒙り奉りしことなるも、尙ほ御親筆にて肝要の御所存一筆あそばされたし、後の御形身にも致さんと存ずとお願ひ申し、遂に聖人より一枚起請の御文を頂かれた。曆仁元年十二月十二日、宗祖聖人の御往生に先だつこと二十四年、功德院にて頭北面西し、二百遍の念佛を稱へ、最後に陀佛の二字ばかりきこえて、息がたへたとのことである、五十六歳であつた。

念佛房念阿は嵯峨の往生院に居られた方であつた。此のお方も始めは天台

の學匠であつたが法然聖人の御勸めに依り、名利の學道を去つて隱遁の風光を樂まるゝことゝなつた。聖人の御入滅の後往生につき疑心が起り、今にも無常の風が吹き來らば、生死の問題はいかゞすべき、若し源空聖人にして御在世ならば、早速參上して御尋ね申すべきにと、お嘆きなされてあつたに、其の夜の夢に空聖人が虛空に現はれ給うて、彼佛今現在成佛といへばすゝむるぞかし、衆生稱念必得往生なれば、何んの疑ひがあるべきやと仰せられたと思ふと、夢が醒めたとのことである。それより後は一點の疑心も無く念佛三昧に住し、建長三年九十五歳にて往生せられた、宗祖聖人の御往生に先きだつこと十一ケ年である。

斯く孰れも立派な學匠達である、從つて議論もなか〳〵しつかりしてをる。前に申した如く、宗祖聖人が法然聖人の信心と自分の信心とが、すこしも變る所がないと云はれたことを聞咎められたのも無理ないことである。是が若し文盲の人々の談合ならば、あゝ左樣でござるかと申すばかりであるが、今は決してそんな氣樂なことでは此の座の議論は治まりがつかぬ、されば善信房の聖人の

御信心と、我信心とひとしと申さるゝこと謂なし、いかでひとしかるべき」と詰問せられた。

是に對し宗祖聖人は、是はしたり、貴房方の咎め立てこそ却つて腑に落ち申さぬ、若しも私の智慧才覺が御師匠のそれと同一であるとでも申すのならば、それこそ實に差出でがましき申分であるが、往生の信心については、かね〴〵御師匠より承はる通り、全く如來廻向の賜なれば、是には師弟子の區別のあらう筈はない、從つて「聖人の御信心も他力より給らせたまふ、善信が信心も他力也、故にひとしくてかはるところなしと申也」と、澁滯なく申開きをなされたるに、法然聖人は一座の議論を靜かに御聞き取りになつた上にて、さておもむろに口を開きて、最後の判斷をお下しになつた。

「信心のかはると申は、自力の信にとりての事也、すなはち智慧各別なるがゆへに信又各別也」とは、聖人の最初のお辭である。卽ち聖道自力の行者は、我が身我が身に智慧を研き功德を積みて進み行く者なれば、有智と無智との間に大變の

相違が出來て來る。是は其の修行の性質として、何うしても免ることが出來ぬ、恰も學校の生徒が同一の授業を受けながら、或者は及第し又或者は落第し、或者は卒業後に立派な人物と成つて世の中の大立物となり、又或者は音も聲も無く埋木となつて、一生を終つて了ふやうなものである、其處が卽ちとりもなほさず智慧各別なるがゆゑに信も亦各別なりの處である。

一同の信心

處が他力淨土の敎はそれとは趣きが異つてをる、法然聖人は其の意を說いて、「他力の信心は善惡の凡夫ともに、佛のかたよりたまはる信心なれば源空が信心も善信房が信心も、さらにかはるべからず、たゞ一なり」と仰せられた。如何にも是が他力の他力たる處であつて、卽ち他力とは他の佛の力に依りて往生を遂ぐるのである。聖道自力の諸宗の如く、我が智力德行を以て成佛せんと企つるものならば、其の力次第にて種々の區別が出て參る。他力には我が力を寸分用ゐることを敎さぬ、もろ〴〵の雜行雜修自力の心を捨てよとは、つね〴〵承はる處の御化導である、我が力にて企てずとも、親樣の方にて、以大莊嚴具足衆行、令諸

衆生功德成就と、一から十まで親様の賜にて佛にさせて頂く、恰も長者の子供が赤裸で生れ出て來ても、親の財産を譲り受くると共に、其日其時から大福長者となるが如く、或は又一圓の金は、長者も貧者も同一の金の用きを有するが如きである。されば他力の門戸の中には、善惡邪正有智無智の差別はない、大小聖人みながら、如來の弘誓に乘すなりであります。

されば法然聖人は、「我かしこくて信ずるにあらず」と仰せらる、如何にも御尤もなる仰せである。兎も角私共は我がかしこくて信ずるやうに思ふ傾きがある、聖教の一卷も繙き、又法文の一句でも覺えたりすると、それで一角の信者になつたやうに思ふが、是は大變なる誤りと申さねばならぬ。もと〳〵阿彌陀如來の本願には、何一つ凡夫の力をかりたいと云ふことはない、我が淨土は我れ自身にて建立せんと御誓ひなされたのであるで、私共はそれに對して寸分も加減することは出來ぬ、一から十まで佛任せであり、私共はたゞすなほに助けてやるとの仰せを信じて、御助けに預るより外に別の仔細は無いのである。

既に我がかしこくて信ずるのではない、孰れも皆同一の念佛を頂いて往生させて貰ふのでありますから、法然聖人は、「信心のかほりあふておはしまさん人々は、わがまいらん淨土へはよもまいりたまはじ、よく〳〵こゝろゑらるべき事なり」と、仰せられてある。如何にも聖人の仰せの如くにて、若しも人々各々に其の信心が相違して居つたならば決して同一の安養淨土に往生することは出來ぬ、何故なれば因が同一念佛であるから、果も亦同一の彌陀同體である。然るに人々各々に其の因が異なつて居つたならば、其の果の上にも相違が生じて來ることは必定である。されば法然聖人の御跡を慕うて、彌陀同體の證を開かうと思ふたならば、それと共に聖人と同一の信心に住しなければならぬことであります。信心諍論に對する法然聖人の御批判は前述の通りであつた爲勢觀房を初め其の餘の人々も二の句をつぐことが出來ませなんだ、それで「こゝに面々舌を巻、口を閉ぢてやみにけり」とあつて、さしもの諍論の席も事無く治まりがついたのである。

信心諍論のお話は是でざつと申述べ終つたのである、所が茲に一つ不審の晴れぬことがある、それは何にかと申すと、同一の信心を頂くものならば、同一の働きが顯はれねばならぬ筈なるに、然るに宗祖聖人と私共とは、日常の日送りの上を觀めてみると、決して同一に參つて居らぬ、聖人は辨圓にも反對なさらぬ、日野左衞門にも不平を申されぬ、又流罪の折にも一言半句の小言を申されずして却つて是なほ師敎の恩致なりとお歡びなされてをる。然るに私共は迚もそんな芽出度き心掛けにはなれぬ、もとより往生の一大事に就いては、佛智の不思議力に依りて御助けに預かると申すことには、一點の疑ひをもさしはさまぬ、此の點に就いては宗祖聖人の後へには落ちぬ積りであるも、其の日常の日暮しとなると、何うしても聖人の御行狀のお傍へも寄り付くことが出來ぬ、是は何うしたものであらふかとのことである。

是に就いては私自身も久しく苦しんだことであります、爾し只今では其の邊のことに就いては、少しの苦惱も致さぬことゝなりました。それは又何うして

ゞあるかと申すと、斯うであります。思ふに宗祖聖人は權化の御身分で在ます故、一切萬事が前述の如く芽出度き御行狀にていましたのでもあらうが、私共は地獄這ひ出しの横着者であり、從つて斯る芽出度き行狀の出來かぬるのも一分の道理がある。爾しそれが出來ぬとて決して嘆くには及ばぬ、青年血氣の男が、半日に十里を歩んで歸りたとて、老親はそれを聞きて飛び立つ程に喜ぶものでない、親の喜びは、這へば立て立てば歩めの親心にて、疊の上を一足二足歩み出した時に、さては不具ではなかつたかと、我が身の年の寄るのも忘れて躍り上つて歡ぶものである。今も亦それと同じく、半日に十里の道をお歩みなさる程の宗祖聖人の如き芽出度き行狀が出來ぬとて、大悲の親樣がお悲しみなさるのではない、貪瞋煩惱の大難路を、假令少々づゝにても、如來樣の御冥見に恥入りて、南無阿彌陀佛に引立てられて、細々ながらも念佛行者らしき歩み方が出來だした時に、大悲の親樣はさては鬼の子ではなかつた、此の分ならばやがて往生して呉れるならんと、十劫正覺の曉天より今日今時まで、思ひづめに思うて居られし重

荷をおろして、やれ〳〵是れで一安心とお歡びなさるに相違ない。斯う思うてみると、私共は宗祖聖人の御行狀の眞似が出來ぬと嘆くよりも、假令少々づゝにても淨土往生の行者らしき日送りを致し、念々稱名常懺悔の日暮を致すことが肝要であります。

第一八　各別の信心

大師聖人まさしくおほせられて云、信心のかはると申は、自力の信にとりての事也、すなはち智慧各別なるがゆへに信又各別也。他力の信心は善惡の凡夫ともに、佛のかたよりたまはる信心なれば、源空が信心も、善信房の信心も、さらにかはるべからず、たゞ一なり。我かしこくて信ずるにあらず、信心のかはりあふておはしまさん人々は、わがまいらん淨土へは、よもまいりたまはじ、よく〳〵こゝろにらるべき事なりと云云。

同一の御師匠の下に在つて、朝夕其の化導を蒙られてをるにも拘らず、何故に斯くも大切なる信心の一段に相違が生じたのであるか、是は是非共其の原因を承知しておかねばならぬ、それでないと淨土の法門でありさへすれば、それが淨土宗であらうが、或は眞宗であらうが、孰れを聽聞しても落付く所は一つであるで、構ひはないと云ふやうな、淺はかな聞き樣に流れ、折角易行の法門に値遇しながら、眞實報土の往生を遂ぐることの出來ぬ虞れがあるからであります。

さて法然聖人の門下の中にて、一つの流派をお開きなされ、それが今日まで傳はつて、最も盛大なるは鎭西の一派である。此の派の御開山は聖光上人と申す

お方で、筑前の生れであり、七歳の時に出家し、三十六歳まで天台の學問をなし、其の年法然聖人の門に入られた。聖光上人が始めて吉水へ參られた時の模樣が、口傳鈔の中に次のやうに記してある。

そのとき空聖人、はたとかの修行者をにらみましますに、修行者また聖人をにらみかへしたてまつる。かくてやゝひさしくたがひに言說なし。しばらくありて、空聖人おほせられてのたまはく、御房はいづくのひとぞ、またなにの用ありてきたれるぞやと。修行者まふしていはく、われはこれ鎭西のものなり、求法のために華洛にのぼる、よつて推參つかまつるものなりと。そのとき聖人、求法とはいづれの法をもとむるぞやと。修行者まふしていはく、念佛の法をもとむと。聖人のたまはく、念佛は唐土の念佛か、日本の念佛かと。修行者しばらく停滯す、しかれどもとく案じて、唐土の念佛をもとむるなりと云云。聖人のたまはく、さては善導和尙の御弟子にこそあるなれと。此のお辭に依りてみても、聖光上人が尋常のお方でなかつたことは能く諒解せらるゝ。ともかく非常に才智のすぐれた方であつた爲、法然聖人も深く其の學才の優れたる點をお譽あそばされて、腹藏なく念佛の奥義を御敎示なされた。越えて三十七歳の時、師命を奉じて伊豫の國へ布敎に赴かれ、翌年復都へ上り、それより六年の間吉水に在つて、法然聖人の御敎化を受けられた。元久元年八月吉水を辭して筑紫へ歸り、專ら念佛門の弘通に從事せらる。

九州へ下られた聖光上人は、其後九ケ年を經て建暦二年、卽ち我が宗祖聖人が越後から常州へお移りなされた時筑後の山本に善導寺を建立なされ、茲に一宗の基礎をおすゑなされた。斯くて暦仁元年の二月、卽ち宗祖聖人が關東開敎の事業を大成して、再び都へお歸りなされてより四ケ年經たる年、光明遍照の句を稱へながら、芽出度く往生の素懷を遂げられました。

上人面授のお弟子に然阿上人と申す方があつた、石州の生れで、俗姓は藤原氏名は良忠と申す、三十八歳にて聖光上人に謁し、其の敎導を蒙られたことが二ケ年であつた。上人の滅後師敎を傳へて諸國に敎化を試みられたが、道俗の歸依

する者甚多く、後宇多天皇より紫衣を頂かれた、八十九歳にて鎌倉の光明寺にて往生せらる、鎭西の一派は此の御方の力によりて大成せられたのである。

鎭西の一派に次て有名なのは西山派である。此の派の開祖は證空上人と申し、俗姓は源氏名は善慧と申上ぐる、十四歳の時に法然聖人のお弟子となられ、二十ケ年以上も聖人のお膝下に居られたのである、聖人が選擇集を著はされた時、其の勘文をせられたのは此の上人であつた、西山の善峰寺に居られた爲、世間では西山上人と申した。寶治二年の十一月我が宗祖聖人が淨高二帖の御和讃を御製作あそばされた年、阿彌陀經を誦しながら御往生あそばされました。

以上の二宗と我が淨土眞宗とが、法然聖人に依つて開かれたる淨土門の中において、最も勢力ある宗派である。此の外に尙ほ九品寺とか長樂寺とか申す宗派もありましたが、爾し今は何等の勢力もない。さて同一の御師匠の下にてお育てを受けられたお弟子方であるのに、何故に斯樣な相違が生じたのであるかと申すと、蓮如上人は御文二帖目第十五通に、「抑日本において淨土宗の家々を

たてゝ、西山、鎭西、九品、長樂寺とて、其外あまたにわかれたり、これすなはち、法然聖人のすゝめ給ふところの義は一途なりといへども、あるひは聖道門にありし人々の、聖人へまいりて淨土の法門を聽聞し給ふに、うつくしく其理耳にとゞまらざるによりて、我本宗のこゝろをいまだすてやらずして、かへりてそれを淨土宗にひきいれんとせしによりて其不同これありと」とお說きなされてある。如何にも此の仰せの通りであつて、各宗派の祖師方が執れも御自分の好きの方へ、御師匠の敎化を引き入れなされたるが爲であり又峯ともなると同一風情であります。

されば此等の祖師方のお眺め方は、何んな具合であつたかと申すと、是をお話しすると少々むつかしい談議に流れるが、ざつと次の四點が其の相違の起る根源となつてをるのであります。

一　諸行本願非本願の相違。

二　一類往生二類往生の相違。

三　一念往生多念往生の相違。

四　報土化土二類有無の相違。

此の四點の相違に就いて諸宗派の祖師のお考へを申すと、先づ鎭西に在つては、彌陀の本願は念佛往生に在ることは爭ふことは出來ぬこととなれば、念佛以外の萬善諸行は非本願の行と申さねばならぬ、爾し阿彌陀如來は萬機を普益し給ふ御方なれば、假令諸行の行者にても、至誠心、深心、廻向發願心の三心を發得した者なれば、必ず如來の御助けに預かるものである。加之其の諸行の多小に依つて、臨終の來迎佛にも報佛、化佛、夢想佛の相違が生ずるのであるとせらる。されば此の一派では諸行非本願と說きて、自力の諸行を廢しながらも、而も念佛と諸行との、二類の往生が出來ると云ふことを談ずるのである。

次に西山派では諸行に對する考へが多少鎭西派とは異つてをる。此の一派では、往生の一大事は念佛一行に限るとする、爾し三心發得の行者となると、自ら諸行を修することゝなる。それは何故かと申すと、もと此の念佛の中には、永劫修行の折に萬善萬行が封じ込められてあるが爲に、其の體內の功德が現はれ出るのであるとする。されば萬善諸行の說いてある一切諸經は、孰れも捨てることは出來ぬ、それゆゑ總じて一代經に依ると申し、一代諸經を悉く自派の敎理を說明し給へるものとして依用せらるゝのである。從つて此の一派は諸行非本願一類往生と云ふ說を立てながら、而も一方には其の諸行を執り上げらるゝのである。

長樂寺派の開祖の隆寬律師は、西山鎭西と同じく諸行非本願說を唱へられたが、而も此の派では報土と化土の區別を立て、諸行の行者は化土の往生より遂ぐることが出來ぬ、たゞ念佛の行者のみ報土往生を遂ぐることが出來るとせらる、此の點は我が宗祖聖人の敎へ給ふ處と一致してをる。爾し其の念佛往生に就いては宗祖聖人と解釋を異にせられ、往生は平生業成に非ずして、一に命終の一念の時に來迎佛に遇ひ奉る時に確定するものとし、平生に幾多の念佛を稱へたる者が、其の利益を蒙るものとせらる。從つて他流からは此の一派を、多念義と申

すのである。

九品寺の覺明上人は以上の諸師と異なつて、諸行本願と云ふことを唱へられた。何うして左樣なことを申されたかと云ふに、四十八願の中、第十八願は念佛往生の願なるも、第十九願には念佛と諸行とが誓はれ第二十願には諸行の往生が誓はれてある、されば念佛でも往生が出來れば、諸行でも亦往生が出來るのである、根機の拙ない者は念佛に依るがよし、上根の者は諸行を修むるがよいと、隨分思ひ切つたことを申されたのである。それでは選擇集のお指圖は何うなさるかと云ふと、あれは法然聖人が下根の者に對して、易行易修の念佛の一道を說かれたものとせらる。ともかく此の一流も亦二類往生を談じ、而も念佛よりも諸行の方が優れてをるとせらる。

兎に角法然聖人と云ふ一本の大きな幹から前申したやうな種々の枝が出たのであるが、その枝振りの趣きがそれ〴〵異つて居るのは、蓮如上人が仰せられた通り、御自分々々々々の眺め方が異つたからである。されば其の邊に就いては

別に改めて申述ぶるも入らぬやうなものなれども、此の相違の中心點が、念佛と諸行との關係如何に在ることでありますから、此の點に就いて今少しくお話し申すことゝする。

さてそれをお話し致すにつき、前以て法然聖人の御化導の方規と云ふことを申さねばならぬ。聖人御一代の御化導は、全く聖道の諸宗に對して念佛の一宗を立つるを以て、宗の本旨となされたのである、從つて聖道門に在つては、四弘誓願を立て六度萬行を修するを以て、成佛の大道とするのであるが、之に對して、聖人は、淨土門に在つては四弘誓願を起すに及ばぬ、願は如來の本願に依り、行は念佛の一行に依る、此の本願と念佛とが、凡夫が往生成佛すべき唯一無二の大道であると、お說きなされたのであります。而してそれが證明として淨土三經中にお示しなされてある念佛は、それが假令多少自力の趣味を帶びてをつても、少しもお構ひなく兢れも御引用なされて、大聖釋尊は斯樣にお示しなされてあると仰せられたのである。是は何にも法然聖人が淺漠たるお考へにてなされたる

のでは無くして、所謂諸宗對向の必要上、諸行以外にも易行念佛の大道があると云ふことを顯示するとを以て、最大急務とせられたからであります。例へて申すと、荒蕪の地を開拓する時に、先づ始めには地ならしを致し、後に再び其の整理を試みるが如きである。聖人の御一代は此の荒地開拓が最も重要なる事業であつた、それゆゑ念佛の性質の如何の如き、細密なる事柄は後にお讓りなされて、先づ六度萬行に對して、念佛の一行があると云ふことに、全力を傾倒されたのであります。

さて念佛と申せば南無阿彌陀佛より外には何物もないに、それに何うして種々の相違が生ずるかと云ふことは、直に注意をひく所の疑問である、是は大經を窺うてみると忽ち諒解せらるゝ、大經では第十八願の上に顯れたる念佛と、第十九願の上に顯はれたる念佛とが、多少相違してをるのであつて、卽ち第十八願の念佛と申すは、彌陀の誓願不思議力を信じた上に、其の不思議力に依りて御助けに預るとの嬉しさの餘り、御恩報謝としての稱ふるのであり。第十九願の念佛は、他の諸行を附隨したる念佛であつて、決して獨立してをらぬ。第二十願の念佛は、十九願のやうなとはないが、それでも尙ほ私共が稱ふる所の偏數の功を廻向することを要求せられてある。

——各別の信心——

等しく是れ同一念佛であると申しても、それが前上の通り三種の區別があるのである。然るに法然聖人は是等總ての念佛を一括して、念佛往生の願と仰せらるゝそれゆゑお弟子の方々は、各〻其の氣の向ふ所に從ひ或は第十八願を中心として念佛をお勸めなさる我が宗祖聖人の如きあり、或は十九二十の願を目的として念佛をお勸めなさる、西山鎭西等の諸師が出來たのである。それが爲に前に申した如き、諸行本願とか非本願とか、或は一類往生とか二類往生とかと申すやうな相違が生じて來たのである。尙ほ此の三願の相違は、自然三部經の上にも顯はれ來り、大經には第十八願の本旨が說かれ、觀經には第十九願の意が開顯せられ、阿彌陀經には第二十の願の思召が述べてあります。それでありますから各派の祖師が三經を御取扱ひなさる上にも、各〻異なる處がありまして、宗

祖聖人は敎と云ふは大無量壽經是れなりと仰せられて、最も重きを大經におかれ、西鎭兩派の祖師方は觀經を中心の經として、最も是を大切にあそばすのである。

阿彌陀如來が念佛の一法を以て、一切衆生を救はんとお誓ひなさるに當り、何故に斯樣な三種の相違をあそばされたのであるかと申すと、是れはもと私共の根機にそれ〴〵の不同がある爲、それをば一機も漏さず救はんとの大悲心より、斯くも三種の大願を建立せられたるものである。一體私共の信仰の徑路は、何うしても此の三種の道程を經てをるのである、卽ち始めて道に志す者は、何事も倫理とか道德とかで無くてはならぬやうに思ひ、一も道德二も倫理と、兎角に實踐道德の一天張りにて押し通ふさうと致す傾きがある、是が十九の願の所であります。所が人生の複雜なる、到底それが遣り切れかぬる、其處で今度は我れ已上の佛の力を仰ぎ、それに依りて目的を達せんと致す、是が卽ち十九の願より二十の願へ移りた所である。然るに此の佛の力を我が物として進まんとするのも、なか〳〵容易でありませぬ、何うかすると、自分の煩惱やら懈怠の爲に押倒されて、其の手を離さうとする恐れが生じて來る、其處で愈〻自力の無効と云ふことに氣付きて、茲に始めてあゝ自分の力にてお助け下さるのであると、第十八願の難有さが泌々と歎ばるゝやうになる。而して斯樣の變化は一人の身の上に起るのみでなく、世の中には一生の間十九の願の機で終る者もあれば、或は二十願の機で過ぐして了ふ者もある。されば大經には此の三種の機類のことをば、第十八願を正定聚の機、第十九願を邪定聚の機、而して第二十願の機を不定聚と仰せられ、此の三機の中にて邪定不定の者は、眞實報土の往生を遂ぐることが出來ぬとお說きなされてある。

人の機類が三通りに別れてをる爲、自然本願にも三願の區別が出來たのではない、而も此の三願は、決してそれを終局の目的としてお立て、なされたのではない、孰れも皆第十八の願海へ誘引せんが爲に、暫らく斯樣の方便門をお開きなされたのであります、宗祖聖人は其の意を說きて、

至心發願欲生と　十方衆生を方便し
衆善の假門ひらきてぞ　現其人前と願じける
至心廻向欲生と　十方衆生を方便し
名號の眞門ひらきてぞ　不果遂者と願じける

と仰せられました。要するに自力の信は智慧各別なるがゆゑに、信も亦各別なりで、西山鎭西の方々は、各自己の智慧を働かせらるゝがゆゑに、其の信心の上にも相違が生じて、或は二十願或は十九願と、其の智相應の處に安住せられたのである。爾し私共は決してそれを彼れ此れ申してはならぬ、たゞ〳〵我が機に相應したる第十八願の信心を獲得し、法然聖人なり宗祖聖人なりが、お參りなされてあるお淨土へ、往生させて頂くことが肝要であります。

第一九　化僧の眞影

貴僧二人來入す、一人の僧のたまはく、この化僧の眞影をうつさしめんとおもふこゝろざしあり、れがはくば禪下筆をくだすべしと。定禪問て云、彼化僧たれびとぞや。件の僧の云く、善光寺の本願の御房これなりと。こゝに定禪たなごゝろをあはせ、ひざまづきて、ゆめの中におもふやう、さては生身の彌陀如來にこそと、身の毛いよだちて恭敬尊重をいたす。また御くしばかりをうつされんに足ぬべしと云云。かくのごとく問答往復して、夢さめをはりぬ。

御傳鈔上卷第八段中の一節の御文である、例に依つて先づ此の物語の大要をお話しに及ぶ。宗祖聖人の常隨眷近のお弟子に、入西房唯圓と云ふ方があつた、唯圓は日頃聖人の御壽像を頂き、我が居間にかゝげて御尊敬を申上げたいと云ふ念願をいだいて居りましたが、何分にも今日の如く寫眞の術も開けてをらぬ時であるで、御肖像を頂くとすれば、繪師をして直接其の御眞影を寫さしめねばならぬ、從つて時日も手數も餘程に入ることで、それでは御老體の聖人に對し、恐れ多いことであると思ひ、念願は山程あるも御遠慮申してをつた。所が聖人が古稀の春を迎へられた、仁治三年の九月の二十一日の朝、入西房に向はせられ、貴

房は日頃自分の肖像を所望してをるさうぢやが、遠慮は入らぬで今日寫し取らしたら何うぢや幸ひ近い所に定禪法橋と云ふ繪師が居るから、彼の者に依頼するがよからうと仰せられた。御傳鈔にこのことをば、「御弟子入西房、上人影の眞影をうつし奉とおもふ心ざしありて、日ごろをふるところに、上人その心ざしあることをかゝみて、おほせられて云、定禪法橋七條邊居住にうつさしむべし」と申述べてあります。

―眞影の僧化―

入西房は上人のお辭を承はり、躍り上つて喜び、早速使者を遣つて法橋を迎へることゝした。招きに應じて法橋は參上致した。然るに法橋は聖人の御居間に通り、聖人の尊顏を穴のあく程凝視てをつたが、やがて如何にも心の眞底から感じ入つた面持をして、さて物語るやうは、世にも誠に不思議なことがあります、私は夜前實に不思議な夢をみました、其の夢と申すは、氣高い御僧が兩人、私の枕元にお立ちなされて、其の中の御一人が申さるには、此の御方の肖像を寫したいで、何うか其許筆を執つて吳れまゐかと。私はそれはお安い御用でござりますが、一體其の御方は誰樣でござるかとお尋ね申したるに、さきの方は此の方は善光寺の本願の御房にてましますと仰せられた。私はさては生身の彌陀如來にてましますかと、總身の毛も彌立つ思ひをなして、御敬ひ申上げました。するとさきの方は重ねて、長き手間がかゝつてはよいと申さる、斯くしばかり寫して頂けばよいと申さる、斯る問答を致してをるうちに夢が醒めました。何うも不思議な夢を見たことであると思うて居りましたに、さて今朝お招きに預かり、只今斯うして聖人の御尊顏を拜し奉るに、全く夜前夢の中にて拜み奉りました、生身の阿彌陀如來其儘でござる、實に奇瑞と申さうか、不思議と申さうか、何んとも申す辭がござりませぬとて、たゞ〳〵感涙に咽びて、聖人を拜み申しました。すると傍らに侍つて、此の一部始終の物語りを聞きたる、入西房を初め其の他のお弟子方も、其々に感涙に咽ばれ、それで夢のお告げの通り、みくしのみを寫し奉ることにせられた。此のみくしの御影は、入西房の開いた枕石寺に寶物として、只今も藏められてあります。

さて此の一段の物語を覺如上人は御批評なされて、「つら〳〵この奇瑞をおもふに、聖人彌陀如來の來現といふことゝ炳焉なり。しかればすなはち弘通したまふ敎行、おそらくは彌陀の直說といひつべし」と仰せられてある。私は上人の此の御批評をば、如何にも御尤もなることゝ存じます。斯く申すと世の中の人は、夢物語りなんかに感心するとはおかしい、そんなことを彼れ此れ云うて難有がるのは迷信であると、一概に否定するかも知れぬが、私とても其れ位のことは能く存じてをるが、而も尙ほ此の御物語に對し、多大の尊敬の念を懷抱てをると云ふことに就いては大なる理由がある。爾しそれをお話し申す前に、先づ此の物語に出てをる入西房のことにつき、少しくお話しせねばならぬ。

建保五年の十一月の中旬、卽ち宗祖聖人が四十五歲の暮れの頃である。其の頃聖人は有緣の人々に對して道を傳へ給ふが爲に、席の溫まる暇もないと云ふ有樣で日々諸方へお出かけなされてをつた。此の日も其の御布敎の先きよりお歸りの途次、久慈郡大門村で日はたつぷりと暮れてしまね、相悪く西風の大吹雪にて、迚も稻田迄お歸りなさることは出來かぬる。それでお弟子の方は、此の邊にてお泊りになり、明日稻田へお歸りなさることに致さんとて、土地の豪士の家を訪ねて一夜の宿を請ふことゝせられた。家の主人は日野左衞門尉賴秋と申し、もとは近江の日野の武士であつた者が、此の地へ渡り來つた者である、至つて邪見な性質の人であつた爲、一夜の宿を貸して呉れぬのみか、入らざる惡口雜言迄も申述べた。其の爲お弟子の方も致方がなくして、すご〳〵出で來りて其の旨を聖人に申上ぐると、それでは今一度自分が入つて賴んでみるとのことである。

聖人は御自身にて日野家をお訪ねなされて、一宿のなさけをお願ひなされたるに、如何にもお弟子の申した通り、邪見の主人は聖人の申さることに耳を傾けぬのみか、はては亂暴の振舞ひも致しかねまじき見幕であつた爲、お弟子方は聖人を庇護申して、ともかく門外へお連れ出し申した。すると主人は、內部から門の戶を閉め切つて了ふた。雪は益〻降りしきり、風は膚を刺す如きである、お弟

子の方々は心外の涙をはら〳〵と落し、下賤の自分共ならばともかく、攝政家の御身分にてまします御師匠樣が、衆生濟度の爲とは申しながらも、此の御苦勞を下さると云ふことは、何んとも申樣のなき恐れ多きことであると愁嘆すると、聖人はそれをお聞き咎めなされ、お前方は何を申さることである、阿彌陀如來が此の親鸞一人を救はんが爲に御苦勞下されしことは、僅か一夜の吹雪の中の辛勞位ではない、兆載永劫の長い間云ふに云はれぬ難行苦行を御成し下されたことである、それを思ふと今宵一夜の辛苦位は物の數でもない、入らぬことを申すよりも、お念佛を申さる方がよい、自分は此の家の主人が佛緣を結ばぬ限りは、決して立去らぬと申され、尙ほ

さむくともよろこびうけん西の風
　彌陀のかたよりふくと思へば

と一首の歌をお詠みなされた。

斯くて師弟諸共稱名念佛と共に、一夜を其の門前に明かさんとせられたる所、

其の夜の眞夜中を過ぐると思ふ頃、主人の左衞門尉は夢に驚かされて目を醒まし、妻を呼び起して、不思議な夢を見た、只今誰ともなく枕元に立ちて、今宵門前に阿彌陀如來樣がお宿りなされてあると告げ知らしたと申すと、妻も亦妾も同樣の夢を見ましたと申すゆゑ、是は不思議なことである、兎も角調べてみやうとて、夫婦同道にて門を開いてみると、驚くまゐことか、暮方に惡口雜言して追ひ出した旅の僧方が、雪の中にて靜かに念佛申して居られた。此の有樣を一見したる夫婦の驚きは一方でない、早速に家の內へお迎へ申し、ひたすらに宵の無禮の程を謝し奉りたる所、聖人は更に咎め給ふことなく、却つて夜を徹して懇々と他力念佛の難有きことを申聞かしあそばされたるに、惡に强い所の主人は善にも亦强い習ひにて、卽座に發信して聖人のお弟子となり、爾來常隨昵近して聖人の御用を勤むる身となつた。

さて此の日野左衞門尉賴秋が、只今の御肖像を頂く入西房でありますそれでありますから定禪法橋の夢物語りをば、一倍に深く感じ入つたことであつたと

思はる。法橋が宗祖聖人をば、生身の彌陀如來にてましますと申した時、入西房は如何にもそれに相違あるまね、それでなくては、昔我が身が大邪見の振舞ひを致した時に、あのやうな大慈悲の御所作をあそばすことの出來るものでない、世の尋常の人ならば、十の中で八九迄は、賣手に買手の風情にて、邪見と邪見の角の衝き合ひをせねばならぬことであるに、それで無くして橫着者が尙ほ可愛の親心にて、無蓋の大慈悲心を以て、私共の家族の者を御勸化下されたことであつた、聖人が若し阿彌陀如來の御再來でなかつたならば、何うして斯樣な芽出度き御掘舞ひが出來るものかと、我が身の上に受けたる實驗に照し、人一倍の感涙に咽んだことであつたらうと存せられるゝ。

兎も角定禪法橋の物語は、此の夢あつて始めて入西房の心の中に浮び出でたのではない、夢の物語りのあつた時よりも、二十六年も昔の時に、既に宗祖聖人をば生身の彌陀如來にてましますと云ふ種をば、其の胸の奥底に蒔付けられ、それが今の法橋の物語りに依りて花が咲いたのである。斯うしてみると、此の一段の物語は、單に夢物語であるとして、なほざりに觀過ごすことは出來ぬ。

さきの第四段の蓮位房の夢物語と云ひ、今此の入西房の物語と云ひ、宗祖聖人と其のお弟子方との間には實に一種不可思議なる關係が顯はれてをる。一體世の中の事柄は遠美近醜と云ふことは爭はれぬ事實であつて、隔たつて觀めた時には如何にもうつくしく見えた物も、さて近寄つて見ると左程にもないと云ふことが多いものである。人の身の上に就いても左樣である、年に一度か二度しか會見せぬやうな人には、時には高僧知識であると感ずることがあつても、愈日々晨夕を共にすることゝなると、案外に感ずるやうなことを幾等も見聞することがある、或は世の中では如何にも溫厚篤實の人と云はるゝ方が、家庭に入つてみると、一族の人々に怨言の種を蒔いてをる者が幾等もある、是等の事を考へてみるにつけても、宗祖聖人は其の當隨の人々が夢の如き取留めもなきことに關してさへ、斯くも感涙に咽んでをると云ふことは深く考へてみねばならぬことである。

思ふに宗教は空論では何等の役にも立たぬ、實際の事實の上に其の効果を顯はしてこそ、始めて其の功能があると申すべきである、聖人は議論の方ではない、實行の御方である、一擧一動の上に如來の光明を輝かして、三毒五欲の黒闇の中に、一道の慈光を投せられたる御方である、「慈光はるかにかむらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ」で、此の法喜のよろこびがやがてお弟子方の隨喜の感涙となつたものである。

―― 眞宗聽聞話 ――

邪見の人も正見になり、怒つた人も喜ぶ人となる、それを爲さしむる動機は一に此方の心掛け一つである。昔門外へ聖人を追出した日野左衞門は、今は感涙に咽ぶ所の入西房となつてをる。是を思うてみると私共は深く反省しなければならぬ、怨みは外に在るのではない、我が心の中の三毒の煩惱を治むる所に、立處に怨みも敵も皆悉く消え失せて了ふのである、雪の中にて不足を仰せられなかつた宗祖聖人は、遂に入西房と云ふ芽出度きお弟子を得らるゝことゝなつてをる。されば此の一段の御物語を承はるにつき

ても、我も亦聖人の如き芽出度き態度に出でなければならぬと云ふ、覺悟を致さなければならぬ、それでないと此の物語を拜聽した所詮はない。

―― 化僧の眞影 ――

夢の樣なる事にさへ、斯る信仰をお弟子方に起さしめ給へる聖人の御流れを汲めるお互は、假令斯樣な芽出度きことは出來ぬとしても、責めては現在我が身の實行してをる事に對して、他人の方より疑惑を挾まれぬだけの日送りをしなければならぬ。殊に聖人は遠い人々に敬慕せられ給ふのみでなく、近きお弟子方に斯る渴仰の頭をうなだれしめられてをるとである、私共もよし隔たる世間の人々迄に隨喜の思ひを惹起さしめなくとも、責めては近い我が家族の者の中に、怨言を聞くやうなことの無きやうにせなければならぬ、それで無くては假令口には念佛申しても、心は遙に聖人と相隔たることゝなるのである。斯樣に思うてみると、此の一段の御物語は、實に甚深微妙の御教訓を、私共に下さることゝなるのである。

第二〇　吉水の法難

淨土宗興行によりて聖道門廢退す。これ空師の所爲なりとて、たちまちに罪科せらるべきよし、南北の碩才慎申けり。

— 眞宗開顯 —

此の一段には念佛停止の由來が記してある、凡そ淨土門に流れを汲める者は、自宗他宗を論せず、是非一度は承はらなければならぬ所であります。只今から此のお辭により、其の當時の模樣をお話しに及ぶことゝする。

安元元年法然聖人が四十三歳にて叡山を下り、吉水に禪室をかまへ、他力念佛の法門を御弘通なさることになつてより此の方、世の中の人々のうちにて、苟くも出離の一大事に心を苦しめて居る者は、我も〳〵と聖人の許に參り、其の御敎化をば承はることゝなつた。而して其の人達と云ふのが、名も無い町や村の人々のみでなく、恐れ多くも九重の雲上の御方々より、文武百官の人々迄が、孰れも皆聖人の敎化に耳を傾くることゝなつた。それが爲に始めの中は、世間にも差したる評判のなかつた吉水が、なか〳〵やかましくなつて參り、よるとさはると、其の噂の出ぬことはないと云ふやうな次第となつた。

一體此の時分の佛法と云へば、叡山か奈良か高野山かの三ケ所に限られてをるやうな有樣であつて、なか〳〵に勢力があつた。殊に叡山と奈良とは都に近い爲に、何にかと云ふと朝廷に對して强願すると云ふ無法の所作迄も致し、時の朝廷の人々も、此の二大本山の衆僧の處置には、ほと〳〵持て餘してをられた。御白川上皇の述懷に、朕が意の如くならぬものは、鴨川の水と、双六の賽と、山法師とであると仰せられたお辭がある位であつて、其の權力の强かつたことは、今から想像の出來ぬ程である。

— 吉水の法難 —

此の如き權力を有し、而も佛法の根本といへば、さきに申した如く奈良か叡山か高野山かに限ると思うて居つたに、頃日始めて吉水に下りて、念佛弘通の緒口を開かれたる法然聖人の敎が、日出の勢ひにて弘まる有樣を覩ては、何うしても默つてをることが出來なくなつて來た。それが先づ第一に表面に顯はれたのが文治二年の大原問答である。所が此の時法然聖人は辭を盡して淨土易行

の法門を解說なされた爲、列座の南都北嶺の高僧方も、如何にも尤もなることゝ感服せられて、共々に念佛を歡ばるゝことゝなり、其の席は無事に治まりがついた。

道理の上では聖淨二門は對立し、而も末法の今時には聖道門よりも淨土門の方が、時機相應の敎であると云ふことは會得出來ても、而も叡山と云はず奈良にも幾百十の衆徒がある、而してそれが悉く如法の修行者のみでない、それであるからして吉水の繁盛と云ふことは、何うしても快く思はれぬ、何にかの因緣があつたならば、思ふ存分嗜めてやらうと云ふことは、大衆方の心の中にむらむらとしてをつた。所が又一方吉水の方でも、日に月に隨喜の人が集まり來るにつれて、其の中には種々と法然聖人の敎を曲解する者も出來て參り、何うかすると他宗他門の人々に對して、是非の批評を試みたり、或は又法然聖人が夢にも仰せられたことの無い、辟法文を申立つる者も生じ來り、それが爲都鄙の間に宗論の斷え間がないと云ふやうなことゝなつて來た。かねて事あれかしと祈つて

居つた叡山の大衆方は、遂に時の座主眞性僧正に對し、專修念佛の敎を停止すべき事を訴へ出でたのである。

此の時法然聖人は、自分の門信徒の者の心得誤れることは充分申聞かし、再び邪義をつのりて敎界を惑亂せしむるやうなことは致さぬとて、七ケ條の制誡文を認め、百九十人のお弟子方の連判狀を添へて、之を眞性僧正の許へ差出された、それが爲に一時は事も無く治まりがついたのである。其時差出されたる制誡文と云ふのは斯うである。

一 いまだ一句の文も窺はずして、眞言止觀を破し奉り、餘佛餘菩薩を謗ることを停止すべき事。

一 無智の身を以て有智の人に對し、別行の輩に遇ひ、好んで諍論を致すことを停止すべき事。

一 別解別行の人に對し、愚痴偏執の心を以て、本業を棄て置くべしと稱し、强ちに之れを嫌ひ嗤ふ事を停止すべき事。

一 念佛門に於ては戒行無しと號し、專ら婬酒食肉を勸め、適律儀を守る者には雜行人と名づけ、彌陀の本願を憑む者は、造惡を恐るゝこと勿れと說くことを停止すべき事。

一 未だ是非を辨へず、痴人聖敎を離れ、師說を非として、恣に私義を述べ、妄に諍論を企て、智者に笑はれ、愚人を迷亂することを停止すべき事。

一 愚鈍の身を以て殊に唱導を好み、正法を知らずして種々の邪法を說き、無智の道俗を敎化することを停止すべき事。

一 自ら佛敎に非ざる邪法を說き、僞つて師範の說と號することを停止すべき事。

さて此の七ヶ條の制誡文を仔細に讀んでみると、吉水の禪室へ出入する信者の中にも、隨分誤つた考へを懷いて居つた者が多分に在つたことを能く諒解することが出來る。制誡文は七ヶ條に別れてをるも、要するに他宗の人々をば雜行人であると貶め、惡人往生なれば罪惡の其儘が、如來のお目當であるとの邪見

をつのり、或は一知半解の事柄をば、如何にも知つた風に世間に吹張して、世を誤り人を惑はしたと云ふことに過ぎないのであります。是等は實に獅子身中の虫であつて、斯樣な信者があつては、假令叡山や奈良の方に、一分の宗派心がなかつても小言が出ずに濟むはづはない、況して自宗の興廢にも關すると云ふ一大事件であるから、是等の點を數へ上げて、專修念佛の停止をやかましく云はれたのも無理のないことである。

さて此の制誡文が出ましたのが元久元年十一月七日であつたが、是れが爲に叡山の火の手も一時は治まりがついたが、爾し何んと申しても新しい宗門が頭を上げて來て、是迄の宗門の領分を占領して行くのであるから、無事に落着きのつく筈もなければ、又久しい間自力聖道の敎によりて頭を固められた方々が、そんなに容易に他力の敎に御同意なさる筈もない。加之吉水の信者の中に在つても、此の制誡文に鑑みて自說の謬りを匡した者もあれば、又何うしても其の誤りを改めずして、益〳〵邪義を云ひつのる者もあつた、それが爲に一時の治まりは

復忽ち破れて、再び南都北嶺の物議の種となつたのである。それで翌々建永元年の二月に、奈良の興福寺の方から堂々と朝廷へ對して、念佛停止の事を訴へ出られた。其時の訴狀の中には、次の九ケ條が數へ上げてある。

一　妄に邪宗を弘むる事。
二　私かに新像を販ぐ事。
三　釋尊を輕んじ侮る事。
四　萬善諸行を廢する事。
五　諸神を麁略にする事。
六　淨土の敎旨に昧き事。
七　念佛の奥義を謬れる事。
八　僧尼を損ひ亂す事。
九　國家を亂する事。

此の訴狀に對しては、朝廷より吉水に對して注意を促して、斯る誤りに陷らぬやうにせよと申聞かされたけれども爾し念佛停止の命令はお出しにならなかつた。それが爲に奈良の大衆等は、何うも不平が解けない。

所が茲に一つ面倒なる事が起つて來た、興福寺の衆徒から念佛停止の訴へが出た年の冬、後鳥羽上皇が熊野へ行幸あらせられたるそのお留主の間に、仙洞御所に宮仕へして居る松虫鈴虫と云ふ二人の若き局が、鹿谷の法勝寺に法然聖人のお弟子なる住蓮安樂と云ふ二人の僧を訪ねて、黒髮を下ろして尼となつて了ふた。御所の方では上皇の寵姬が二人迄も姿を隱したことであるで、上を下へ の大騷ぎしたが、誰云ふとなく此の二人の宮女は鹿谷にて尼となり、紀州路さして落ち行いたと云ふ評判が立つた。上皇は熊野から還御に成りて此事を聞し召され、非常に逆鱗まし〳〵、是では奈良や叡山の大衆が小言を云ふのも無理はないとて、直に念佛停止の宣旨をお降しになり、それに關係せる重なる人々をば、死罪若しくば流罪に處せらるゝことゝなつた。

是に就いても考へねばならぬことは、總て物事は一寸した油斷の所から、取返

しのつかぬやうな大事を惹起すと云ふことである。こゝ兩三年前より叡山及奈良の人々から、吉水に對して種々の非難が出てをると云ふことは、既に充分承知のことであり、殊に法然聖人よりは、七ヶ條の制誡文迄もお出しになつて諸弟子方を注意されてをることであつたに拘らず、鹿谷の一件が思ひがけず湧き出して來た爲、遂に吉水一門の人々の上に、思ひも寄らぬ大災難が降りかゝつて來ることゝなつたのである。そうしてみると此樣なことは、啻に七百餘年の昔の事とのみ思うてはならぬ、今日と雖も若しも心得誤りをして、自他の上に迷惑をかくるやうなことがあつたならば、一宗の上に大なる面倒をかくることゝなると云ふことは、忘れてはならぬことであります。

此の宣旨の爲に罪科に處せられた方は幾人もあつた、法然聖人は土佐國の幡多へ御流罪とならせられ、宗祖聖人は越後國の國府へ、淨聞房は備後國へ、禪光房は伯耆國へ、好覺房は伊豆國へ、法本房は佐渡國へ、成覺房は阿波國へと流された、善綽房と、性願房と、住蓮と、安樂との四人は、死罪に處せられたのである。斯くて

元久元年より此の方四ヶ年間、縺れに縺れてをつた吉水の問題も、始めて其の一段落がついたのである。而して此の一段の成行きをば、御傳鈔に、「淨土宗興行により聖道門廢退す、これ空師の所爲なりとて、たちまちに罪科せらるべきよし、南北の碩才憤り申けり」と、お示しなされた。

さて此の念佛停止の宣下の在つたのは、承元元年二月二十八日であつたが、關白兼實公は此の機に乘じて、叡山の大衆共が、吉水へ亂入するやうなことがあつてはならぬと氣付かれ、直に法然聖人をば小松谷の小松殿へお移し申された、宗祖聖人も亦岡崎の庵室へお歸りなされて謹愼さるゝことゝなつた。されば是迄は貴賤輻輳をめぐらし、門前市をなした程の盛大を極めた吉水の聖人の許へも、世間を憚りて音訪ふ人々も無くなつた。

一日お弟子の善慧房が小松谷に法然聖人を伺はると、聖人は常の如くに高聲にお念佛を申して居らるゝ。念佛停止の宣下あつて未だ日も經たぬに、斯くもお念佛を申してをらるゝものであるから、善慧房の驚きは一方でなかつた。そ

れで直に聖人に對して、今日の場合に斯くもお念佛を申さることは、如何のものでござらうか、之が若し萬一朝廷へ聞えましたならば、此の上復如何なる宣旨が下るかも知れませぬで、當分は假令內心にお歡びなさるとしても、聲に出してお稱へなさることだけは、お止めなさる方がよろしからんかとも存じ奉る、さすれば南都北嶺の人々の怒りも釋けて、自然配所に赴き給はずして、都に留まり給ふことも出來申さんかとも存ず、私は既に左樣に致しました爲、流刑を免れて無動寺へ預けらるゝことゝなつて事濟み申したれば、御師匠樣におかせられても、是非に左樣にあそばさるゝ方がよろしからんと、御諫言を申上げられた。

すると法然聖人は御氣色をお變へなされて、源空に於ては流刑の一條は尠しも氣にはかけ申さぬ、七十の坂も昔に越えた此の身なれば、假令都に留まるとした所で、娑婆の別離は遠くもあるまゐ、年久しく都の者に敎化の緣を結んだことであるで、是より邊鄙に赴き、田夫野人の輩に弘願の妙法を敎ふるも、亦是れ素懷を果す所であると仰せられて、少しも念佛の聲をお止めなさらぬのみならず、一

座の者に對して、專修念佛の尊きことを御申し聞かされた。

所が其時其の座に連らなつて居つたお弟子の西阿は、兎にも角にも既に宣旨の降れる上は、此の如き御義はあるべからざることでござる、各方も是に對して御同意申上ぐることをお控へなさるがよいと申した。法然聖人はその辭の終らぬ中に、汝は經釋の文を見ざるかと仰せらる。西阿は、經釋の文もさることながら、世間の機嫌もあることなればと申上ぐる。之を聞かれたる聖人は聲を勵まして、源空は之が爲に、假令死刑に處せらるゝとも、此事のみは斷じて止むことは出來ぬ、假令我が舌は寸斷さるゝ事がありとも、念佛の一事のみは片時も廢することは出來ぬと言ひ放たれた。是を承はりたる一座の人々は咳嗽の一つもする者なく、たゞ〳〵感涙に咽び入るのみであつた。

小松谷に法然聖人をお伺ひなされたる善慧房は、岡崎の草庵に我が宗祖聖人をお訪ねなされたるに、聖人も亦其の師法然聖人と同じくお念佛を申してをらるゝ。善慧房はさきに法然聖人に申上げたる如く、我が宗祖聖人に對しても、暫

く念佛を廢して世の機嫌を避けては何うかと、友情を盡して反省を促がされるに、其時宗祖聖人は、御注意の程は難有い、自分も何うかして此の念佛を差止めんと苦心してをることであるも、何分にも他力廻向の御催しに依りて浮び出る念佛であるで、自分の力にては何うすることも出來かぬると、申されたと云ふことである。

二月二十八日に宣下ありしより茲に半ケ月を經過し、三月十六日には愈〻配所に赴かるゝことゝなつた。其の前夜宗祖聖人は、窃に小松谷に法然聖人をお訪ねなされて、最後のお訣別を惜まれた。思へば建暦二年の春始めて吉水に教を蒙りしより此の方、星霜七ケ年を經過し、其の間一日としてお側を離るゝことなく、敎化の恩に浴し來りたるに、今は圖らずも此の悲しき生き別れとなるとは

昨日今日とは思はざりしを

と、思ひのありだけを一首の歌にお詠みなされて、涙に咽び入らるゝと、法然聖人は、

別れ行く路は遙にへだつれど
　宿りは同じ華のうてなぞ

と御返歌あそばされて、等しく涙に衣の袖をしぼられた。

其の翌朝早く宗祖聖人は岡崎を立ち出でられて配所へ赴かれ、法然聖人も亦小松谷を出でゝ四國へ旅立たれた。斯くて都の中には暫く念佛の聲が絶ゆることゝなつた。

吉水の法難

今でこそお互に何處の片田舍へ參りても、念佛の御法の聞かれぬ所とては無いが、此の念佛の敎が七百有餘年の昔、此の如き最大厄難の中に、弘通の緒口が開かれたものであつたと云ふことに氣付かせて頂いた限りは、假令一文半句の法文にても、決して廉略に聽聞してはならぬことであります。

第二一　害心の消滅

禪室に行て尋申に、上人左右なくいであひたまひけり。すなはち尊顔にむかひたてまつるに、害心たちまちに消滅して、あまつさへ後悔の涙禁じがたし。

此の一節は御傳鈔下卷第三段の中に在るお辭であつて、宗祖聖人の御一代の御化導中に於て、最も異彩を放てる辨圓濟度の御物語であります。

建暦二年聖人は久しく棲みなれ給ひし越後を後にして、有緣の人々に道を傳へつゝ、信濃より常陸の國に入り、遂に笠間鄕の稻田に御留錫なさることゝなつた。然るに佛法弘通の本懷こゝに成就し、衆生利益の宿念はたちまち滿足することゝなり、幽栖を占め給ふも道俗跡をたづね、蓬戸を閉ざし給ふも貴賤衢に溢ると云ふ風情にも、我も〳〵と聖人の御敎化に隨喜し奉ることゝなつた。此の間に聖人のお弟子となられたる重なる人々の名のみを數へても、眞佛房、性信房、順信房、成念房、西念房、性證房、善性房等、大略五十有餘名もある。されば覺如上

人は此のことを本段の始めに「聖人常陸國にして專修念佛の義をひろめたまふに、おほよそ疑謗の輩はすくなく、信順の族はおほし」とお示しなされてある。

斯く聖人の弘通し給ふ念佛の敎が盛んになるにつれ、餘門餘宗の敎は其の反對に衰へて參る。從つて其の流れを汲める人々は、何うしても聖人に對して快くない、それが爲にさきの念佛停止の時の如き災難が、復再び聖人の御一身上に降りかゝつて參つた。殊に此度はさきの御流罪の時とは其の趣きを異にし、直接に聖人を殺害せんと迫り來りたのである。覺如上人は其事を記して、「而に一人の僧山臥云々ありて、動すれば佛法に怨をなしつゝ、結句害心をさしはさんで、聖人を時々うかゞひたてまつる」と、仰せられてある。

白刄を振つて聖人を殺害せんと試みた所の山臥と云ふのは、如何なる宗派の流れを汲める者かと云ふに、此れは矢張佛道修行者であつて、始終嶮岨な山中を遍歷して修行をなし、常に山上に宿するが故に山臥と云ふ名稱がついたのである。其の流派には本山派と當山派との二派がある、本山派は役小角を開山と仰

ぎ、天台宗の聖護院に屬し、當山派は醍醐寺の聖寶尊師を開山とし、眞言宗に屬してをる。而して我が宗祖聖人を殺害せんと試みた山臥は、聖護院配下の播磨公辨圓と申す者であつた。

山伏の辨圓は聖人の敎の弘まるにつれて、自分の信徒が日に月に減少して行くものであるから深く聖人を恨み奉り、彼れさへ亡き者とすれば、我が一門の繁盛は昔に立歸ることは必定と、恐ろしき考へを懷き、愈〻聖人を唯一箭に射止めんと企てた。其頃聖人は有緣の人々を勸化せんが爲に、始終鹿島行方の邊りへお出かけなされ、其の都度板敷山をお通りなされた。辨圓は此れぞ待伏するには屈強の場所と思ひ、仲間の人々小山寺吉祥房等、三十五名の修驗者と打語らうて其の用意にかゝつた。所が不思議なことには何うしても都合よく聖人と廻り合はぬ、麓で待伏せて居ると嶺を通られ、嶺に隱れてをると麓を通られる、奇怪でならぬ。それで一同は熟議の結果待伏することを廢めて、不動明王の像を板敷山の頂上に勸請し、禪室に護摩壇を築き、三日三夜の間祈願を込めて禱り殺さうとしたが、諸天善神の御守護ある聖人の御身に對して、何うしてそんな無法が通らうぞ、幾等禱りても少しも其の効驗が現はれぬ。それが爲に辨圓の瞋恚の焰は益〻燃え立ち、此の上は稻田の草庵へ乘込んで、事に依らば唯一打ちに致さんと決心した。

斯くて武裝いかめしき姿にて、稻田の草庵を訪ね案內を請うた。稻田では辨圓のかねての仕打に就いては、疾くより承知のことであつて、我が聖人の御身の上に危難がかゝり來らねばよいがと、案じてをられたる矢前に、異形の辨圓が訪ね來たことであるで、上を下へと大騷ぎした。然るに聖人は一向に恐れ驚き給ふことなく、左樣のことならば自分が直接面會して遣らうとて、何等も用意し給ふことなく、直に出でゝ面會なされた。此のお仕打ちには、如何に瞋恚と怨恨に身も心も凝り固まつてをる辨圓も、あつとばかりに驚き入つた。辨圓の心の中では、定めし弟子共が刀を振つて刀向ひ來るであらう。若し然らば日頃鍛へ上げたる我が腕にて、切つて切つて切りまくらん、萬一逃げ隱れでもすることもあ

らば、此の弓に矢つがうて、唯一箭に射止めんと存じをつたのである。それが只今申す如く、身に寸鐵も帶び給ふことなく、左右なく出遇ひ給ふたものであるから、何んと致してよいか途方に暮れて了ふた。それで暫くの間はたゞ何んとなく聖人の尊顏をつく〴〵とみまもつて居つたが、忽ち後悔の涙に咽び入りつゝ、日頃の所作をば詳しく物語りて、深く自分の心得違ひを謝り入ると、聖人は少しもお咎めなさることなく、懇に他力本願の難有き趣きを申聞かされたものであるゆゑ、惡に强い辨圓は善にも强く、卽座に弓箭を打折り、柿の衣を脫ぎすてゝ、墨の衣に身を改め、直に聖人の御弟子となつた。聖人は非常にお歡びなされ、明法房と云ふ法名を御下附あそばされました。此時辨圓が自分の心中を一首の歌に詠み顯はした。

あだとなる弓箭も今は引かへて
西に入るさの山の端の月

御傳鈔には此事をば「たちどころに弓箭をきり、刀杖をすて、頭巾をとり、柿の衣を

あらためて佛敎に歸しつゝ、終に素懷をとげき」と、お記しなされてある。

貴方方は此の一條のお話をお聽きなされて、何んな感じが致しますか。廣い日本の中にて、古往今來幾多の大人物も出で、赫々たる功名を史上に留めたる者は幾數十人もあるが、而も誰か一人我れに仇を爲し恨みを結び、白刄を振つて殺害せんと、じり〳〵と我が膝元へ詰め寄せたる者に、左右なく出遇うて言下に我が弟子としたと云が如き、偉大なる感化を與へた者があるか。是を思ふと私共は此の一事のみにても、宗祖聖人が世の常の人々とは、非常におかはりなされた方であつたと申すことを、讃歎せずには居られませぬ。

左右なくいであひたまふと云ふことは、今日お互の如く宗祖聖人のお流れを汲んでをる者に執つて、片時も忘れてはならぬお辭である。私共は我れを殺さんとする惡徒に對しても、左右なく出遇ふだけの寬き胸を持たねばならぬ、況して日常起居を共にし、渡世を同じくする者に對しては猶更のことである。それに恥かしくもなく、同じ家の內にあつて切つても切れぬ因緣あるにも拘らず、濟

むの濟まぬのとて、赤眼となつて相爭ふと云ふことは、何んとも申譯のない次第である、こんなことでは何うして聖人の御眞影にお眼にかゝることが出來やうぞや。

―眞宗講話の一節―

然るに世の中には能く御法義を歡ばれる方でありながら、一向に此の邊の所には氣付かずして、泣いたり怒つたり恨んだりするのが、凡夫の自性であるとて、少しも反省をせられぬ方がまゝある、斯樣な方は何うも自分の勝手のよい所のみを聞かれて、自分に都合の惡い所は、耳を覆うて居るのであると申すべきである、恰も子供が苦い藥を飮まずに、甘い口直しを食うて了ふのと同樣である。氣に入らぬから怒るの、思ふやうにならぬから腹が立つのと云はるゝ方は、聖人が性信房へ送られたる御消息の中のお辭を味うてみるがよい。

この念佛する人を、にくみそしる人をも、にくみそしることあるべからず、あはれみをなし、かなしむこゝろをもつべしとこそ、聖人はおほせことありしか。是は法然聖人の仰せられたるお辭であるが、それを引用してかく仰せられたのである、兎も角、にくみそしる人をも、あはれみをなし、かなしむ心をお持ちなされたる聖人が惡いか、にくみそしる人々に對し、思ふ存分惡口雜言する人々が善いか、私共は深く心を靜めて再思三考せねばならぬ。

―害心の消滅―

一體阿彌陀如來の第十八願には、何んとお呼びかけ下されてあるか、十方衆生とお呼びかけなされてあるではないか、既に十方衆生とある以上は、我に從ふ者は救ふも、我に背く者は救はぬと申さる如き簡びはない、大蛇を欺く女人も、鬼の上前を取る惡人も、一人もお見捨てなく、三界は我が家なり、其の中の衆生は皆我が子なりと、怨親平等に視はしまして、何うしても一度は助けねばおかぬ、救はねばおかぬとあるが阿彌陀如來の大御心である。此の大御心の鏡に向ひましたならば、恨み給はぬ宗祖聖人が善いか、恨む所の人々の方が惡いかと申すことは、一目に判斷することが出來る。

宗祖聖人は何故に斯樣に辨圓に左右なくお逢ひなされたのであるかと申すと、申迄もなく聖人の御心の內には、憎い恨めしいの凡夫の心が主人とならずし

て、可愛いとしいの佛心なる他力の信心が、主人となつてをつたからである、此の信心の顯はれ出でた所が、卽ち左右なく出遇ひ給ふ所の所作となつたのである。而して此の信心なるものは、決して聖人の專有物ではない、同一念佛無別道故にて、私共も矢張り彌陀たのむ一念の時に、此の大信心の主人となる。してみると私共と雖も、是非に聖人の御跡を慕うて我に仇を爲し恨みを結ぶ者にも、左右なく出遇ふ所の寬廣の心がけを致さねばならぬ。

斯樣に申すと貴方は、そんなことを心がけてかゝるのは、或は自力ではないか、如來樣は惡人正機と仰せらるゝ限りは、私共は何事も如來樣におまかせしいて、我が機に目をかけずして參ればよいではないかと、云はるゝかも知れぬが、萬一左樣な心掛けで居らるゝと、大變な誤りに陷ることゝなります。百里の差も、始め踏み出す一歩に基くものであるから、此の點に就いては深く注意しなければならぬ。全體惡人正機と云ふとは、阿彌陀如來の方から仰せらるゝお辭であつて、私共の方から自慢らしく申すべきことではない、親は病身の子程可愛と

申すのは、親が云ふことであつて、子より其事を申立てゝ、それゆゑ不養生して病身になると言ひつのつたら、大變な間違ひ事となる。

此の邊の分際については、聖人の御在世の當時にも、既に其の取違へをした者があつたとみへ、御遺著を拜見する毎に、此事に就いての御訓戒を承はることが幾度もある、而して其のお話のある所に、いつも此の辨圓が引合せに出してある。明法房の辨圓は聖人の御化導を蒙りてより後は、打つて變つた善人となつて、芽出度き大往生を遂げたのである、其事は常陸の國の人々が能く存じてをることであるゆゑ、聖人はいつも明法房の事を考へてみるがよいと仰せらるゝのである。次の常陸の國の同行中へ送られたる御消息は、最も詳細に此事をお示しなされてあります。

おほかたは年比念佛まふしあはせたまふ人々のなかにも、ひとへにわがおもふさまなることをのみ申あはれて候人々もさふらひき。いまもさこそ候はんとおぼえ候。明法房などの往生しておはしますも、もとは不思

議のひがごとをおもひなんどしたるこゝろをもひるがへしなんどしてこそ候ひしが。われ往生すべければとて、すまじきことをもおもひ、いふまじきことをもいひなどすることはあるべくも候はず。貪欲の煩惱にくるはされて欲もおこり、瞋恚の煩惱にくるはされてねたむべくもなき因果をもやぶるこゝろをこり、愚痴の煩惱にまどはされておもふまじきことなんどもをこることにてこそ候へ。めでたき佛の御ちかひのあればとて、わざとすまじきことどもをもし、おもふまじきことゝもおもひなんどせんは、よく〳〵この世のいとはしからず、身のわろきことをおもひしらぬにて候へば念佛せさせたまふことも、その御こゝろざしにては順次の往生もかたくや候へからん。

昔は彌陀のちかひをもしらず、阿彌陀佛をもまふさずおはまし候ひしが、釋迦彌陀の御方便にもよほされて、今彌陀のちかひをきゝはじめておはします身にて候なり。もとは無明の酒にえひ、貪欲瞋恚愚痴の三毒をのみこのみめ

しあふて候ひつるに、佛のちかひをきゝはじめしより、無明の酔もやう〳〵にすこしづゝさめ、三毒をもすこしづゝこのますして、阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふて候ぞかし。しかるになほえひもさめやらぬにかさねて酔をすゝめ、毒もきえやらぬになほ毒をすゝめられ候はんこそあさましく候へ。煩惱具足の身なればとて、こゝろにまかせて、みにもすまじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことをもゆるして、いかにもこゝろのまゝにてあるべしとまふしあふて候らんこそ、返々不便におぼへ候へ。えひもさめぬさきになを酒をすゝめ、毒もきえやらぬにいよ〳〵毒をすゝめんがごとし。藥あり毒をすゝめ、念佛を申してひさしくなりておはしまさん人々は、この世の惡しきことをいとふしるし、この身のあしきことをばいとひすてんと、おぼしめすしるしも候はずとおぼへ候。佛の御名をもきゝはじめしより、無明の酔もやう〳〵にすこしづゝさめ、三毒をもすこしづゝこのますして、阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふて候ぞかし。しかるになほえひもさめやらぬにかさねて酔をすゝめ、毒もきえやらぬになほ毒をすゝめられ候はんこそあさましく候へ。煩惱具足の身なればとて、こゝろにまかせて、みにもすまじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことをもゆるして、いかにもこゝろのまゝにてあるべしとまふしあふて候らんこそ、返々不便におぼへ候へ。えひもさめぬさきになを酒をすゝめ、毒もきえやらぬにいよ〳〵毒をすゝめんがごとし。藥あり毒をすゝめ、念佛を申してひさしくなりておはしまさん人々は、この世の惡しきことをいとふしるし、この身のあしきことをばいとひすてんと、おぼしめすしるしも候べしとこそおぼえ候へ。

是等の御化導を能く〳〵味うてみると、如何にも私共は聖人の御跡を慕うて、左右なく敵にも出遇はねばならぬと云ふことが諒解出來る。

斯く申すものゝ、私共は一代の中に、恐らく宗祖聖人が辨圓にお遇ひなされたやうな大災難には、多分出遇ふことはありますまゐ。してみると私共は宗祖聖人よりも、餘程果報の善い者であると歡ばねばならぬ。それに何うしたことか、些少の物の云ひやうが惡いとて赤眼をつり、少しの仕打ちが氣に入らぬとて、隣家近所へ恥かしい程の大聲を上ぐると云ふことは、誠に宗祖聖人に對して申譯のないことであります。

それと申すも內に眞實の信心が獲得せられて無いからのことである、無い袖は振られぬ、振る度毎に顯はるゝのは、三毒の醜き生地のみである。斯う思うてみると、益〻阿彌陀如來の御力をたのみ、此の淺間敷私共の根性をば、責めては人並になりとも仕上げて頂かねばならぬ。何うか一日も片時も早く、急ぎて信心獲得して、聖人と御同樣の日暮しが致したいことである。

第二二　後の明法房

たちどころに弓箭をきり、刀杖をすて、頭巾をとり、柿の衣をあらためて、佛敎に歸しつゝ、終に素懷をとげき。不思議なりし事なり、ずなはち明法房これなり。上人これをつげたまひき。

――後の明法房――

さきに辨圓濟度のお話を致した時に、未燈鈔の中に記してある聖人の御消息を引きて、惡人正機の本願なれば、惡い事を致した所で、別に恥入るには及ばぬと云ふやうな橫着根性を出してはならぬと云ふことを申したことであつた。爾し其時は餘りお話が長くなる爲、充分其の思召を窺ふことが出來なんだゆゑ、今回はそれをば詳細にお話に及びます。

さて始めに上げたお辭の中に、「年比念佛申しあはせ給ふ人々のなかにも、ひとへに我思ふさまなることをのみ申しあはれて候、人々も候ひき」、とあるのを「年頃お寺參りをして、念佛申してをらるゝ方々」と書き改むると、正しく今日の私共に對しての御訓誡となる、總て何事によらず、御訓誡の御辭を聽聞すると

きは、それを私一人の爲の御化導であると頂くことが肝要である。さて斯樣に頂きますと、次の「ひとへに我思ふさまなることをのみ申あはれて候」とあるお辭が、一大鐵槌を以て腦天を打ちすえらるゝ樣な感じが致して參ります。お互に此のお辭の通り、ひとへに我が身の勝手のよいことばかり申募りて居りはしませぬが、勝手氣儘な振舞ひのみをしては居りはしませぬか、念佛行者でありながら、そんなことではと、他人より注意せらるゝと、すぐ此の機のなりでお助け下さる本願なれば、自力の修行者の如く、何もさう新まつた窮屈なことをしなくともよいではないか、惡人正機とお呼び掛け下さる佛の前へ、善人振つて參るにも及ばぬと、言譯がしたくなりはしませぬか。聖人は私共が此の言譯をすることをちやんとお見拔きなされて、「ひとへに我思ふさまなることを申あはれて候」と仰せなされてある。曇つた鏡には姿は能く映りませぬが、磨き上げられたる鏡に向ふと、此の方の姿はつきりと影を顯はします。宗祖聖人のお心の鏡は、六百五十有餘年の末の私共の心の底まで、お寫し下されたと申してもよい。何うも天下萬人の眼は暗ますことは出來ても、正しき如來のお德を頂かれたる聖人のお心のみは、決して暗まし奉ることは出來ぬ。

思ふさまなる事とは何んなことであるかと云ふに、それをば次に詳しく示して、「我往生すべければとて、すまじきことをも言ひ」と仰せられた實に此のお辭の通りで、私共は何うかするまじきことをもし、思ふまじきことをも思ひ、言ふと未造業と已造業との區別もせず、信前と信後の心得をも無視して、後生の一大事は如來樣がお引受け下さるゆゑ、此の世一生は浮世の波のまに〳〵思ふさまに暮しさへすればよい、と云ふやうな橫着な根性が頭を上げて來てならぬ。それも思ふさまに人の人たる德を發揮して、自力修行の行者にも劣らぬと云ふことを致すのであるならば、多少は寬假すべき點もないではないが、何にがさて其の思ふさまと云ふとは、あられもないひがごとで、今のお誡の中にある通り、「すまじきことをもし、思ふまじきことを思ひ、言ふまじきことを云ひ」との事柄のみにて、まるきり人の人たる德を打ち破ることのみにかゝつてをるのである。然

るにそれをば少しも恥とも思はず、當然の事のやうに思うてをると云ふことは、餘りに氣のよい話ではありませんか。

けれどもそれが煩惱の仕業であるから、致方がないと云はるゝかも知れぬ、成程煩惱の仕業に違ひはない、されば聖人は、「貪欲の煩惱にくるわされて欲もおこり、瞋恚の煩惱にくるはされて、ねたむべきもなき因果を破る心もおこり、愚痴の煩惱に惑はされて、思ふまじきことなんども起ることにてこそ候へ」と仰せられてあるが、茲が前回にもお話し申した、踏出しの一足がやがて東西相距ること千里となるべき所であつて、煩惱の仕業であるから仕方ないと、腕白者の煩惱をいやが上にも腕白させて置くか、さう腕白してはならぬと、たしなめてかゝるか、どちらが善いか、世間尋常の道理にても、是位の事の善惡は判斷がつく筈である。

宗祖聖人は、思ふさまの振舞ひするのは、煩惱の仕業であるから、能く氣を付けて腕白さしてはならぬと仰せられ、蓮如上人も亦、我心にまかせずして心を責めよと仰せられてをる。即ち私共は煩惱の垢に穢れたる我が心を師とするの

ではない、怨親平等の如來の御心を以て、我が心の師匠としなければならぬ、若しさなくして未來は如來のお世話、現在は我が心の世話に成つて暮さうと思ふたならば、恐ろしき魔道に陷りて了ふことゝなる。それゆゑ聖人は、「芽出度佛の御誓ひのあればとて、わざとすまじきことをもし、思ふまじきことをも思ひなんどせんは、能く能く此の世の厭はしからず、身の惡きことをも思ひ知らぬにて候」と、御嚴誡なされてある。

茲であります、煩惱は煩惱の儘に腕白さして置かうと思ふ者は、此の御教誡を何うする積りであるか。一體私共は何故に此の棲み慣れた娑婆を厭うて、見もせぬ安樂淨土を慕ふのであるか、申迄もなく此の世は煩惱成就の世界で思ふ樣にならぬ、然るにそれが厭やである故、彼の淨土を願ふのである、即ち韋提希夫人が其の身の不仕合を厭うて、極樂淨土の往生を願はれたのと同一であります。さて斯く此の世の苦みを厭ふとするならば、其の苦みは何によつて來るかと云ふことを察しなければならぬ、苦みは結果であつて、それの來る原因は別に存在

して居る、煩惱がそれである。さうしてみると苦惱の娑婆を厭うて、安養の淨刹を願ふ程の者は、屹度煩惱が厭でなければならぬ、然るに未來は如來のお助け、現在は煩惱づくめの心の働きの儘と云ふのは、聖人が「能く能く此世の厭はしからず、身の惡ろきことをも思ひ知らぬ」と仰せになる所であります。

斯樣な分際にて幾等念佛を稱へた所が、何んの効能もない、假令珠數をつまぐりて、我は佛法者にて候と申した所で、姿は佛法者でも、心は永き世聖人の御門徒たるべからざる者となる。此事は何にも私が勝手に申すのではない、聖人は次下に、「念佛に志もなく、佛の御誓ひにも志のおはしませぬにて候へば、念佛せさせ給ふとも、其の御志にては順次の往生もかたくや候べからん」と仰せられました、如何にも御最もなる仰せであります。抑も佛の御誓ひは、私共の煩惱の根を斷絶して遣ふとの御誓ひである、佛の御苦勞は、私一人の煩惱の治りをつけて遣り度いが爲の御苦勞である、してみると苟にも佛の御誓ひと聞いた限りは、決して煩惱の肩を持つべきでない、假令千萬分の一なりとも、佛に御苦勞をかけぬやうと云ふ志を起さねばならぬ。然るに斯る思ひは些少も抱かずして、たゞ思ひの儘に振舞ひ、三毒の熱を吹きて、得たり賢しとして居るやうなとでは、「其の御志にては、順次の往生もかたくや候べからん」にて、屹度念佛稱へながら、地獄へ墮ちねばならぬと云ふ、大失敗が出來するに相違ない。

全體惡い煩惱が惡いと知られなんだ昔ならば、思ふさまの所作をしても仕方がないが、惡いものを惡いと知つた以上は、知らぬ昔とは是非に異ふた所が無くてはならぬ、此の趣きを聖人は、「昔は彌陀の誓をも知らず、阿彌陀佛をも申さずおはしまし候ひしが、釋迦彌陀の御方便にもよほされて、今彌陀の誓を聞き始めておはします身にて候なり。もとは無明の酒に醉ひて、貪欲瞋恚愚痴の三毒を好みめしあふて候つるに佛の誓を聞きはじめしより、無明の醉もやう〳〵すこしづゝさめ、三毒をもすこしづゝ好まずして、阿彌陀佛の藥を好みめす身となりておはしましあふて候ぞかし」と仰せられた。實に此のお辭の通りにて、昔無明の酒に醉うて、三毒の毒味を此の上ない好物と思うて居つた者が、釋迦彌

陀二尊の善巧方便にて、始めて醉ひが醒めかけ、毒と云ふことに氣付きて、是ではならぬと毒消しの念佛を服藥致しかけたのが、今日のお互ではありませんか、毒と藥の二つの物が、現在私共の目前にならべられてある、私共は毒を執るべきか、それとも藥を服すべきか。

固より良藥は口に苦い、毒は口さはりがよい、加之無始已來の大好物である、あゝ何ちらを取らうか、實に判斷に迷ふ所である。看病人が愚であつて、藥より も毒を勸める、實に困り入るのは今日の私共の心中であります。お互にしつかり氣を付けねばならぬ、一度取りそこなつたら、二度と取返しのつかぬ大失敗を爲ることゝなる。思ひの儘にしやうか、それとも嗜まんか、此の判斷に苦まるゝならば、善知識の御教訓をお聞きなさるがよい。「心をたしなめよ、たしなむは他力なり」とは、蓮如上人が御深切に仰せ下さるお辭である。してみると私共は、何うあつても毒を避けて藥を取り、早く無明の醉から醒めねばならぬ。

それに何事ぞ、惡人正機であるから、毒を飲みながら極樂參りをしやうではないかなどゝ云ふのは實に惡魔が地獄へ引き入れやうとする、恐ろしき咀ひの聲である。されば聖人は、「然るに尙醉もさめやらぬに重ねて醉をすゝめ、毒もきえやらぬになほ毒をすゝめられ候へ。煩惱具足の身なれば とて、心にまかせて、身にもすまじきことをもゆるし、口にも言ふまじきことをも許して、如何にも心の儘にてあるべしと申しあふて候らんこそ、返々不便におぼへ候へ」と仰せられた、此のお辭こそは、實に私共が日夜寸時も忘れてはならぬ金言であります。私共は煩惱具足の凡夫をお助け下さるが、如來のお慈悲であると申し、一も二もなく其の御慈悲の袖の後方に隱れて、勝手氣儘な所作をしてはならぬ、御慈悲の袖には隱れるべきではなくして、それにつゝまれねばならぬ。

隱れると包まれるとは、身を隱す上には同一のやうではあるが、實際は大なる相違がある、隱れたる者は我が身の前に大きな御慈悲の袖垣を造り、其の後方にて我が身の勝手をすることが出來るが、包まれるとさうは參らぬ、御慈悲の袖の

外へは、一寸も手足を出すことが出來ぬ、四方八方が御慈悲で取圍まれて了ふのである、卽ち口も心も南無阿彌陀佛にまろめられて了ふのであります、是が卽ち他力の行者が身の嗜みを致す有樣である、自力の行者であると、御慈悲の袖の中へ這入らずと、自分一量見にて嗜むのであるが、私共は自分の量見にて嗜むのではない、阿彌陀如來のお慈悲にまろめられて、持つて生れた生地を出すことが出來なくなるのである、卽ち嗜むは他力なりとあるは、全く此の味ひを申述べられたるものであります。

最も嗜むと云ふた所で、別にさう角立つたことをするのではない、さきのお辭に、「身にもすまじきことを許し、口にも言ふまじきことを許し、心にも思ふまじきことを許し」と、ある所の裏さへ行けばよいのである、卽ち身口意の三業に、人として恥かしからぬ振舞ひをすればよい。從つて嗜むと申した所で決して彼の自力の修行者と、修諸功德の丈比をするのではない、それであるに、口やかましく嗜むなんどするのは、自力に流れるなぞと云ふ人は、未だ自力とか雜行とか云ふ

ことが、はつきりわかつて居らぬ人である。

實に氣付きませなんだ昔は致し方もないが、如來樣のお手廻しによりて、氣付かして頂きました今日の私共は、是非共此の末燈鈔の御化導に從うて、芽出度き日送りを致さねばならね。反之て若し此の御化導を等閑にして、心の儘に世を過ぐしますと、聖人が本文の終りに仰せられてをる、「醉もさめやらぬさきに酒をすゝめ、毒もきえやらぬにいよ〳〵毒をすゝめんが如し」との風情となる、それでは實に無法至極と申さねばならぬ。醉ざれに酒を勸めてはならぬ、中毒の者には速に解毒劑を與へねばならぬ、それでないと屹度醉ひつぶれて了ひ、毒に當てられて了ふ。心の儘に暮すな、心を嗜めと仰せらるゝのは、此の明白なる大道理があるからである。斯樣に考へてみると、「佛の御名をもきゝ、念佛を申して久しくなりておはしまさん人々は、此の世の惡き事をいとふしるし、此の身の惡き事をばいとひすてんとおぼしめすしるしも候へ」とある御化導は、如何にも御最もと頂かれる。

思ふに後生の一大事に就いては、まるきり凡夫のはからひを捨てよ、凡夫の爲す所の善根は役立たぬで、そんなことには少しも目をかけなと、始終一貫しておすゝめなされた聖人が、何故に斯る心を嗜めよとの御化導をなさるのであるかと申すに、是には大なる理由がある。　卽ち「此の世のあしき事をいとふしるし、此の身の惡き事をばいとひすてん」が爲である、既に正定聚の分人と定まりたる者が、何うして三惡道の所作を好むべき筈はない。尤も未だ不斷煩惱の分際に居る者でありますから、緣に觸れるとそれが頭を擡ぐるとは免れぬが、而もそれが好きであるべき筈はない、厭ひ捨んの思ひの生ずべきが至當である、それゆゑ宗祖聖人は思ひの儘にすなとお誡めなさるのである。

加之私共は此度愈〳〵往生成佛の一大事を決定したとすると、迷ひは此處で打止めとなるのである、願うても望んでも再び迷ひ出ることは出來ませぬ。してみると今生こそは、迷の本源なる煩惱と戰爭を致す最終時であります、迷を轉じて證を開くは此の一擧にあり、而も此の戰には名號の百萬の援軍あつて、煩

惱の大將は既に降服して居る、殘餘の小賊輩にびくついてはならぬ、是非共に憶念稱名勇みありで、勇みの念佛にて凱歌を奏しなければならぬ。而も是を爲して最も光榮ある勝利を占むることの出來るのは、實に此の世界のみであります。されば大經には、「汝等是に於て廣く德本を植ゑ、恩を布き惠みを施して、道禁を犯すこと勿れ、忍辱精進一心智慧し、轉た相敎化し、德を爲し、善に立ち、心を正し、意を正し、齋戒清淨なること一日一夜ならば、無量壽佛の國に在つて、善を爲すこと百歲なるに勝る」とお說きなされて、此の世は實に善を爲し德を積む爲には、最好道場であると仰せられてある。黑い壁に墨を付けた所が、一向に目立ませぬが、白い色をつけると大變に能く目立つ、善根づくめの極樂では、爲善の行爲も目立ませぬけれども、五濁惡時の惡世界の中であると、少々の善事にても、ひときは能く目立つものである。斯樣に考へてみると、私共は修善の最上至極たる南無阿彌陀佛の白色をば、惡業煩惱の黑色に汚れたる此の世界に充分色付けて、彼の明法房と同樣の、芽出度き念佛行者とならねばなりませぬ。

山も山道も昔にかわらねど
かはりはてたる我がこゝろかな

とは、明法房が後年聖人のお歸りを、板敷山にお待ち申して居つた時に詠じた述懷である。昔待伏せした時の山も、今お歸りの遲きをお待ち申してる道も、其の山と道には變りはない、而も人の心には天地の變りがあり、昔の惡徒は今は常隨のお弟子である。思ふに此の變化は獨り明法房のみではない、私共と雖も信前信後の上には、屹度此の變化が現はれ出づるものであります、是が卽ち轉惡成善の德の顯はれであります。

第二三　平太郎の煩悶

しかあれば本地の誓願を信じて、一向に念佛をこゝせん輩、公務にもしたがひ、領主にも駈仕して、その靈地をふみ、その社廟に詣せんこと、更に自心の發起するころにあらず。しかれば垂迹にをいて、內壞虛假の身たりながら、あながちに賢善精進の威儀を標すべからず、たゞ本地の誓約にまかすべし。

此の一節は名高き平太郎段の中に記されてあるお辭であつて、我が淨土眞宗の念佛行者が、餘宗餘門及諸神諸佛に對する心得方を、最も深切にお示しなされたるものであります。

宗祖聖人は六十三歲の八月に、關東より京都へお歸りになり、それより御往生の日まで、都に御在留なされたのである。何分一宗の興隆も既に御成就なされたことであるゆゑ、老後を京都御永住となされました爲、道俗跡を慕ひ奉りて、我も我もと日々其の御化導を蒙りに參つた。其の有樣をば本段の中に「今比いにしへ口決をつたへ、面受をとげし門徒等、をの〳〵好をしたひ、路をたづねて參

集したまひけり」とお記しなされてある。

聖人が六十八の春をお迎へなされた折りのこと、常陸國那荷西郡大部鄕の平太郎と云ふ同行が、遠路遙々と上り來つて、聖人を五條西洞院の御庵室にお訪ね申した。平太郎が斯く遠方から參上致したるは餘の義ではない、本段の中に「而に或時件の平太郎所務に駈れて熊野に詣ずべしとて、事のよしを尋ね申がために、聖人へまいりたるに」とあつて、其の時分には今日の伊勢詣りをすると同樣に、上下貴賤の隔てなく、多くの人々が熊野の權現へ參詣した、殊に處の領主は年々總代を選んで參詣せしめたものであり、而して平太郎は其の選に當つた。所が平太郎は淨土眞宗の無二の信者であつて、雜行を修することは大の嫌ひである、されば自分の一量見に依ると、熊野參詣と云ふことは絶對反對であるが、而も領主の命令であるから否むと云ふ譯には參りかぬる、平太郎は何うしたらよいかと、礒と行詰まつた、それゆゑ其の解決をお尋ねに參つたのである。此の疑問に對して宗祖聖人がお答へなされたのが、只今讀誦に引きましたお辭である。

是に就いては詳しくお話しせねばならぬも、差當り心得置かねばならぬことは、私共の如き淨土眞宗の信者たるべき者が、我が一宗以外の諸神諸佛に對する心得でありまず、されば先づそれからお話し申す。

貴方方も御存知の通り、我が一宗では阿彌陀如來一佛をたのみ奉るのみであつて、他の諸神諸佛をお賴み申すことは、雜行雜修として之を貶るのである。されば淨土眞宗の無二の信者なる平太郎が熊野參詣に就いて、何うしたらよいかと苦んだのは、無理のないとである。所が宗祖聖人は、「證誠殿の本地すなはちいまの敎主なり、かるがゆへにとてもかくても、衆生に結緣のこゝろざしふかきによりて、和光の垂跡を留たまふ。垂跡をとゝむる本意たゞ結緣の群類をして願海に引入せんとなり」とお述べなされた。證誠殿とは熊野の本宮のとである、此の本宮の本地は阿彌陀如來であつて、それが無緣の衆生に結緣せんが爲に、跡を人生に垂れて假りに神と現はれ給ひ、人生の塵にまみれて、之を本願海に引入せしめんとなさるのであるゆゑ、此れに御參詣申した所で、何んの障りにもな

るものではないとの仰せである。さて此の宗祖の思召を最も叮嚀深切にお示しなされたのが、蓮如上人の二帖目第三通の御文で、それには次のやうにお說きなされてある。

一神明と申は、それ佛法において信もなき衆生の、むなしく地獄におちんことをかなしみおぼしめして、これをなにとしてもすくはんがために、かりに神と あらはれて、いさゝかなる緣をもて、それをたよりとして、ついに佛法にすゝめいれしめんの方便に、神明とあらはれたまふなり。しかればいまのときの衆生において、彌陀をたのみ、信心決定して念佛まうし、極樂に往生すべき身となりなば、一切の神明はかへりてわが本懷とおぼしめしてよろこびたまひて、念佛の行者を守護したまふべきあひだ、とりわき神をあがめねども、たゞ彌陀一佛をたのむうちにみなこもれるがゆへに、別してたのまざれども、信ずるいはれあるがゆへなり。

一諸佛菩薩と申ことは、それ彌陀如來の分身なれば、十方諸佛のためには本師本佛なるがゆへに、阿彌陀一佛に歸したてまつれば、すなはち諸佛菩薩に歸するいはれあるがゆへに、阿彌陀一體のうちに、諸佛菩薩はみなことゞくこもれるなり。

此のお示しが卽ち私共が諸神諸佛に對し奉るときの心得方である。かねて御承知の如く、我が一宗にては自力無效と談じて、お互が心の中の思ひは少しも役に立たず、身の勤めは些少も成佛の資糧とはならぬと數へらるゝ。それであるから、私共が諸神諸佛に對して、幾何程の願行を凝らした所で、それが何等の効果を奏するものではない。之は何も神や佛の御方のお力が足らぬからの爲でなく、此の方の器が、それ等の願行に堪ふるだけの德がないからである、勞痕の入つた器は、幾等大切に扱うても、水を盛ることの出來ないのと同然であります。加之此等一切の諸神諸佛は、孰れも私共を生死の苦海より救ひ上げて遣りたいとの思召しより、外の思ひはお有ちなされてない。それゆゑ今私共が如來の本願を信じて、此度の往生に一大安心を致しましたならば、それで始め

て我が年來の願望が成就したと、お歡びなさるに相違ない。

我が一宗に於ける諸神諸佛に對する心得は斯樣である。然るに多くの信者の中には、此の心得方を誤つて、念佛稱へながらも、尙ほ他の諸神諸佛に祈願を運ぶ者がまゝある、此等の人々に限り、あちらの神も賴み、こちらの佛にも願をかけると云ふやうなことを致します。是に就いて面白い話がある、昔さる一人の男が非常に神信心して、靈佛靈社詣れを選ばず、思ひを運び願をかけて、其の護符を頂いてをつた。此の男が或時無二の念佛信者なる友達と旅をしたことがある。然るに或日山中にて劫盜に出逢うた。所が念佛行者は少しも驚く所なく、心を靜めて念佛申してをつたが、反之て一方の男は、こゝぞ平生願をかけてをる所の、諸神諸佛方の御守護を仰ぐべき所と、南無觀音大菩薩、南無藥師如來、南無八幡大菩薩と、あらゆる諸神諸菩薩の御名を稱へて一心に祈願した。所が劫盜の方では、念佛行者の餘りに落付き拂うてをるのを氣味惡く感じ、少しも手出しせず、却つて一心こめて祈願してをる男をば、すつかり裸にして了ふた。劫盜の去つた後で此の男は大不平を唱へた、友達の男は阿彌陀さんのみを賴んでをるに、斯くもお守りを蒙つた、自分はあらゆる諸神諸佛をお賴み申して居るに、少しも其の現益がない、こんな詰まらないことはないと愚痴を零したるに、御守囊の中から、實はお前が一心に自分等を呼ぶものである、之は捨ておけぬと存じ、自分等の中でも評議したるに、お前は眞最初に不動明王を呼んだから、誰よりも先づ不動樣の御苦勞を願ふたるに、不動樣は、否や自分よりも觀音樣をお呼び申してをる樣の御苦勞を願ふたるに、不動樣は、否や自分よりも觀音樣をお呼び申してをるので、此度は觀音樣がお出ましになるに限ると申さる。斯くて推せ〳〵になつて評議が纏まりかね、愈〻最後に、それでは一同で加勢せんと一決し、皆の者が一緒に駈出さうとすると、囊の口が締りてあつた爲、何うしても出ることが出來なんだと申された。是には此の男も二の句が續げなんだと云ふことがある。

此の話は固より作り話であるが、爾し世の中には隨分こんな考へを持つて居る人がある、此の間もさる病人が日々諸方の靈社佛閣に對して、日課を定めて病氣の平癒を祈つてをるのを見聞したことがある、平常には餘程明かに聽聞した

る者でも、何にかの災難に出遇ふと、兎角に斯樣な間違ひを致すものである。さ
れば此事に就いての御化導は、念の上にも念を入れて聽聞してをかねばならぬ。

さて此の疑問を懷き、其の不審を晴らさうとて參上したる平太郎に對し、我が
聖人は何んと仰せられたかと申すと、本段の始めにそのお答を記して、「夫聖教
萬差なり、いづれも機に相應すれば巨益あり。但末法の今時、聖道門の修行にを
ひては成ずべからず。則我末法時中、億々衆生、起行修道、未有一人得者といひ、唯
有淨土一門可通入路と云々。此皆經釋の明文、如來の金言なり」とお示しなされ
てあります。此のお辭の中、「夫聖教萬差なり、いづれも機に相應すれば巨益あり」
とあるは、平太郎が念佛一門以外に、熊野の權現の數もありますが、私は既に他
力念佛の教を信じさせて頂いて居る身分でありますから、別に斯樣な神佛を祈
願致さなくともよいと存じます、よし御祈願致しました所で、其の御利益はあり
ますまゐとも思ひますが、如何がのものでありませうかと、お尋ね申したるに對
しての宗祖聖人のお答へでありて、聖人は、左樣ぢや、其方が申さる如く、何んの利

益もないとは仰せられずして、かへつて聖教萬差で、古より今に至る迄、大聖釋
尊を初めとし、諸の聖者方のお說きなされた聖教は、八家九宗と分れて其の數
あまたあるが、是等孰れの教も、一つとして役に立たぬものはない、其の機〳〵に
相應して、皆悉く廣大なる利益があると仰せられた。爾し茲に一つ注意せね
ばならぬことは、其の法門が我が根機に相應するや否やと云ふことである。幾
等良藥であつても、病に相應せぬと效能がない、藥の良否は病と相應して、それを
根治したる所に於て、始めて其の眞價を顯はすものである。御文三帖目第二通
に此の意を說いて、

夫諸宗のこゝろまち〳〵にして、いづれも釋迦一代の說教なれば、まことにこ
れ殊勝の法なり、もとも如說にこれを修行せんひとは、成佛得道すべきことさ
らにうたがひなし。しかるに末代このごろの衆生は、機根最劣にして如說に
修行せん人まれなる時節なり、

と仰せられてある。

藥は良くても病に相應せぬときは、寶の持ち腐りで仕方がない、されば宗祖聖人は、「いづれも機に相應すれば巨益あり、但末法の今時、聖道門の修行におひては成ずべからず」と斷言せられ、尙ほ其の斷言を確むる爲に、大集月藏經の「我末法時中、億々衆生、起行修道、未有一人得者」の御辭をお引きになり、反之て「唯有淨土一門、可通入路」と御讃歎なされて、末法今時の衆生は根機下劣なれば、高尙なる聖道の修行は迚も出來かぬる、唯夫れ易行易修の淨土他力の一門のみは、男女貴賤老少を論せず、信ずる信の一念に證を開く身にして頂くのであると、お勸めなされたのである。此の御化導の思召を味うてみると、其の溶々として迫り給はぬ所に、如何にも聖人の御心がけのおだやかにましますことが、言辭の上に溢れ出でゝをる、今日淨土眞宗の敎義を宣傳する者は、是非共に此の心がけが無くてはならぬ。然るに現今一流の敎義を讃歎する者の中に、ともすると自讃毀他して平地に波を立つる者がまゝあるが、斯樣のことは深く謹まねばならぬことである。それゆゑ一帖目第四通には、

これによりて念佛者はことに諸宗を謗すべからざるものなり、また聖道諸宗の學者達も念佛者をは謗すべからずとみえたり。そのいはれは經釋ともにその文これおほしといへども、まづ八宗の祖師龍樹菩薩の智論にふかくこれをいましめられたり、その文にいはく、自法愛染故、毀呰他人法、雖持戒行人、不免地獄苦といへり。かくのごとくの論判分明なるときは、いづれも佛說なり、あやまりて謗することなかれ、それみな一宗々々のことなれば、わがたのまぬばかりにてこそあるべけれ。ことさら當流のなかにおいて、なにの分別もなきもの、他宗をそしること勿體なき次第なり。

とお示しなされてある。

昔叡山の座主權僧正顯眞上人が、法然上人を洛北の大原へ招きて、一日一夜の間淨土門建立のことに就いて論議せられたことがある、それが名高い大原問答である。此時東大寺の重源、光明山の明遍、笠置山の貞慶法印、大僧都智海等歷々の碩學方が、三百有餘人其席に連らなられてあつた。法然上人は此等諸大德の

前にて、法相三論華嚴天台等と諸宗の奥義を詳しくお述べなされて、さて申さるやうは、是等の諸宗は孰れも難有い御法ではあるが爾し當今は其の教法に從うて修行するやうな上根の者が尠い、若し之を修行する行者のみならば、何にも改めて淨土の一宗を建立すべき必要もないのであるが、私如き頑魯の者は、迚もかゝる難行には指を染むることは出來ぬ、是れ全く世下り人拙ふして、機教相應せぬからのことであらうと思はる。其處になると善導の釋義をせられたる淨土三部經の教は、末代今日の下根の者に相應し、男女貴賤を選ばず何人も容易に之を修することが出來る、されば私が聖道諸宗の外に、淨土一門を建立するは、決して上機上根の方々の解行を邪魔する爲に非ずして、自分の如き下根の者に對して、淨土通入の門戸を開くのみなりと、理を極め辭を悉してお話しなされたるに、列座の碩學方も孰れも感歎せられて、大衆悉く三日三夜高聲念佛をなされたと申すことである。

宗祖聖人の御化導は全く此の法然上人の仰せのまゝをお傳へなさるのであります。されば、「悉彼三國の祖師おのゝ〳〵この一宗を興行す、所以愚禿勸むるところ更に私なし」と仰せられてをる。尙ほ此の一段の義に就いては申述べたきこともあるで、それは次にお話しすることゝする。

第二四　往生の肝腑

而今、唯有淨土眞說に就て、忝彼三國の祖師をのく〳〵この一宗を興行す。所以愚禿勸むるところ更に私なし。しるかに一向專念の義は、往生の肝腑、自宗の骨目なり。すなはち三經に顯ありといへども、文といひ義といひ、ともにもつて明なるをや。大經の三輩にも一向と勸て、流通にはこれを彌勒に付屬し、觀經の九品にも、しばらく三心と說て、これまた阿難に付屬す。小經の一心、つねに諸佛これを證誠す、これにより て論主一心と判じ、和尙一向と釋す。しかればすなはち、何の文によるとも、一向專念の義を立すべからざるぞや。

平太郎が時の領主佐竹左衞門尉季方の命に依り熊野權現へ參詣せねばならぬことゝなつた折、斯る神社へ參詣することは雜行になりはしまゐかとの疑ひを懷き、其の旨をば宗祖聖人へお尋ね申上げたる所、それに對して聖人が淨土眞宗の骨目とて、一宗の骨髓眼目である所の一心のお話と、且諸神諸佛に向ひ奉る時の心得をばお話しなされたのが、前回よりの物語である。前回には諸神諸佛に向ひ奉る心得方の下をお話し申したるゆゑ、今回は一宗の骨目たる一向專念の義に就いてお話しする。

さて一向專念と申すことは、大經の中に、一向專念無量壽佛とある辭を略したものであつて、卽ち一心一向に彌陀の本願を信じ、稱名念佛し奉ることであります。此事は宗祖聖人が勝手氣儘にお勸めなさるのではない、既に龍樹、天親、曇鸞、道綽、源信、源空と、三國の祖師方が凡夫往生の唯一無二の大道として、之をお勸めなされたのである、宗祖聖人は此等諸師の敎示を我も信じ人にも敎へ傳へ給ふのみであつて、其の間に一點の私意を挾み給ふことはない、「而るに今唯有淨土の眞說に就て、忝なくも彼三國の祖師、おの〳〵この一宗を興行す。所以愚禿勸るところ更に私なし」とあるは、それが爲である。歎異鈔に依ると此處の味ひが尙一層詳細に窺はるゝ、彼の鈔の第二章に此の意を說いて、

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念佛

して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは自餘の行もはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄におちてさふらはゝこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の說敎虛言なるべからず。佛說まことにおはしまさば、善導の御釋虛言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむねまたもてむなしかるべからずさふらふか。

と仰せられてあります。卽ち宗祖聖人の御信心は斯樣であつて、全く法然聖人の御敎化を、無疑無慮に信仰なされたるばかりにて、更に自身の考へをお交へなさることがない、是が則ち他力の他力たる所であります。

お互に斯樣なうつくしき御心掛けになられますか、本當に助かるかしらん、何うかしらんと云ふやうな氣は致しませぬか、こゝが誠に大切な所である。くれ〴〵も申しますが、一流の安心は全く佛智不思議の大願力に乘托するに在つて、お互の僅かの智慧や慈悲の小刀細工は決して許さないのである、從つて此の大願力に乘托したる以上は、假令それが救濟の力なくして、頭下足上と地獄へ落ちても、少しも遺憾がないと云ふ大決心の腹がすわらねばならぬ。

私共は一切を擧げて如來樣の大願力に乘托し奉るのである、既にお任せしたる以上は、我が身の勝手は許されぬ。娘が夫に身を任して嫁となつた限りは、其の嫁と成つた一刹那より、もう娘の時の氣儘は出來ぬ、嫁となつたら嫁の作法を守らなくてはならぬ。お互に無量永劫持ちあぐんだ出離の一大事を、今度と云ふ今度は大悲の親樣が、我を一心にたのまん者は、必ず救ふべしと仰せらるゝ、その先手の呼聲に氣付きて、然らば御助け下されと、至心信樂己れを忘れて、無行不成の願海に歸入し奉つた限りは、親樣のなさるゝ儘である、地獄に落ちやうが、極樂に參られやうが、そんなことは私の方には一向頓着は入らぬ、總て親樣の思召のまゝである。斯う腹のすわつたのが、他力の大信心の頂かれたる姿

と申すものである。

斯樣に申すと、そんな地獄に落るか、極樂に參るかわからぬと云ふやうなことでは、一向安心が出來ぬと申さるかも知れぬが、それは何にも心配するには及ばぬ、五劫の御思惟永劫の御修行の程を案ずるに、ひとへに私一人を助けて遣り度いとのお慈悲の外はないのである、膝へ上り懷へ這入りた赤子をば、何うして親が突き離すことが出來るものか、假令其の身は火の中水の中へ落ちることがあるとも、可愛我が子は、命にかへても助け下さるに相違ない。

然らば其の本願力に乘托したる姿、卽ち子供が親の懷に抱かれたる有樣は、何うであるかと申すと、それが卽ち一向專念である、それゆゑ「一向專念の義は、往生の肝腑自宗の骨目なり」と仰せられ、それを說明して、「大經の三輩にも一向と勸めて、流通にはこれを彌勒に付屬し、觀經の九品にも、しばらく三心と說いて、これまた阿難に付屬す、小經の一心つひに諸佛これを證誠す、これによりて論主一心と判じ、和尙一向と釋す」とお述べなされた。詰り一心に彌陀をたのみ奉り

て、稱名念佛すると云ふより外ないのである。

さて此の御說明のお辭の中に、「大經の三輩にも一向と勸めて、流通にはこれを彌勒に付屬し」とあるは、如何なる思召であるかと申すと、之は大經の第十九願の成就の御文に、捨家棄欲の出來る上輩の人にも、又それは出來なくとも、起立塔像等の善根の積める中輩の者にも、尙ほそれも出來かぬる下輩の者にも、共に一向專念無量壽佛せよと念佛を勸め給ひ、且つ其の念佛をば、經の終りの流通文に至りて、大利無上の功德あるものなれば、之を後代に流布すべしと、彌勒菩薩に付屬なされたと申すことである。「又觀經の九品にも、しばらく三心と說いて、これまた阿難に付屬す」とあるのは、觀經の中に散善のことが說いてある處に、人の機類は善惡に別れ、それに上中下の三大別ありて、而もその三大別の中に、それ〴〵上中下の三種類がある爲、總じて善惡九品となると云ふことがある、此の九品の中、上品上生の下に、淨土往生を願ふ者は、先づ至誠心と深心と廻向發願心を起さねばならぬと云ふことがある。處が善導大師は此の三心を釋して、斯く三心に

別れてあるも、それは彌陀の招喚の勅命を信ずる一心に外ないと仰せられた。而して經の終りに至りて、釋尊は阿難に對し、上來詳しく定散二善の物語りを至したが、要するに念佛の利益を蒙るより外に、凡夫往生の道はないことなれば、汝は能く此の名號の謂はれを會得して、之を皆の者に說き聞かすべしと仰せられてある。それが卽ち「これまた阿難に付屬す」との思召である。最後に「小經の一心つひに諸佛これを證誠す」とあるは、阿彌陀經に、彌陀の淨土へは如何なる善根、如何なる福德の因緣があつても、それでは決して往生することは出來ぬ、たゞ執持名號一心不亂の者のみ、其の目的を達することが出來るとお說きなされ、而も此事たるや、だゝに釋尊御一佛が仰せらるゝに非ずして、上下四方の諸佛が偏覆三千大千世界の廣長舌相を出して、其の間違ひ無きことを御證明なされてあるのである。されば三經の說相は、それ〴〵多少異なる處はあるも、而も肝要は一心に彌陀をたのみ、一向に念佛申すに在り、それゆゑ天親論主は一心と釋し、善導和尙は一向とお勸めなされてをると、仰せられたのであります。

三經の肝要が、一心に彌陀をたのみ、一向に念佛申すに在りとすると、此の一心の味ひは充分會得しておかねばならぬことである。抑も一心に彌陀をたのむと云ふことは、何ういふ具合にたのみ奉るのであるかと云ふに、之をお話し申すに就いては、先づ第十八願中にお誓ひなされたる、三信のお心から窺はねばならぬ。さて三信とは至心と信樂と欲生とであり、此の中至心とは如何なる意味のお辭であるかと云ふに、宗祖聖人は之を釋して、一切群生は無始已來、穢惡汚染、虛假諂僞にして、淸淨の心なく、又眞實の心なし、此の故に阿彌陀如來は永劫の修行に於て淸淨と眞實とを成就し、之を一名號の中に攝めて我等衆生に與へ給ふ。されば至心とは一點の煩惱の汚れなき、眞實心のことであると仰せられた。

誠に聖人の仰せの如く、私共はたしかに淸淨眞實の思ひがない、如何程慈善とか博愛とかと、實意らしいことを口には申しても腹の奥底へ這入りてみると、云ふに云はれぬ汚穢ない思ひが附纏うてをる。それと申すも私共には、如何なる場合にも、人の爲よりも先づ我が身の爲と云ふ、自利の根性が離れぬからで

ある。加之假令穢れた思ひが無いとしても、それがつゞくかと云ふに、なか〳〵さうは參りかぬる、飛鳥川昨日の淵は今日の瀬で、一生は愚か一年の間もつゞきかぬる。それゆゑ適善心を起しても、それが忽ち半途にして挫折して了ふのである。大悲の親樣は此の有樣を見るに見兼ねて、私共に代りて清淨眞實の心をば御成就下されたものである。

次に信樂とは、如來の智慧を我等衆生に與へんとお誓ひなされたるものである。私共は無始已來無明の暗に覆はれ、眞實の智慧の明がない、それゆゑ事に當りて疑情の心を起し、斷然たる決心を定むることが出來ぬ、爲す事行ふ事が上滑りして徹底せぬ、如來は此の弱點を能く知り給ふが故に、永劫の間三業の所修、一念一刹那も疑蓋まじはることなくして、信心の智慧を成就し、之を衆生に廻施し給ふのであると仰せらる。

是亦私共の心の奥底を見拔いての御苦勞である。私共は無始よりこのかた今日今時に至る迄、心の中に清淨の信心と云ふものがない、それと云ふも無

理のないことで、長く二十五有海に流轉し、其の間は常に衆多の苦しみに逐ひ廻され、見る物聞く物が貪欲の種でなくば、必ず瞋恚の種であつた爲、お互の心はひがみにひがんで、人を信ずるとか、人に任すとかと云ふやうな心は、少しも起らぬやうになつたのである、人を見たら盜賊と思へと云ふ諺は、能く其の消息を顯はしてをる。こんな淺間敷い汚れた心に對して、うつくしき信心を起せと申した所が、所詮出來ない相談である。それゆゑ如來は凡夫を相手としては、迚も成佛の相談は出來ないで、自分の方にては、如何なる苦勞を爲しても厭はぬで、堅固の信心を成就して遣ねばならぬとの大悲の御思ひより、此の信心を御成就下されたのである。されば宗祖聖人は、如來苦惱の群生海を悲憐し給ひ、無碍廣大の淨信を以て、諸有海に廻施し給ふと申されてをる。

最後に欲生である。欲生とは欲生我國と云ふ辭を略して申したものであつて、宗祖聖人の御釋によると、是は阿彌如來が、諸有の衆生を招喚し給ふの勅命であるとのことである。何故に招喚の勅命が入るかと云ふに、聖人は、一切衆生は

煩惱海に流轉して、眞實の廻向心がない、それゆゑ如來はあなたの方に、此の願往生心を成就して、それをば一切衆生に廻施し給ふのであると仰せられてをる。

思ふに私共は生死の海に浮つ沈みつして居るのものであるから、何うして明日の明後日のと、前途の事を考へる暇は少しも持たぬ、唯々目前の出來事のみに逐ひ廻されて、今日の一日の日暮しに目を廻し、迚も後生の一大事と申すやうな、末の末を見通す見識は無い。此樣な前途の見えぬ者を相手として、汝の力にて三大劫の修行をせよと仰せらた所が馬の耳に風程のこたへもありはせぬ、それでありますから淨土往生の希望心迄も、あなたの方にて御成就あそばされ、私共は丸の裸で、あなたの願力に乘托しさへすればよいやうに成し下されたのである、實に大悲至極の御方と申さねばならぬ。

三信の思召はざつと是でおわかりなつたと思はる、實際私共が迷ひを轉じて悟りを開くことの出來ぬは、何んの爲であるかと云ふに此の三つの心がけが無かつた爲であります、卽ち私共の心は、始終轉變して眞實の心が缺けてをり、年の始めの考へは年の終り迄は決して續かぬ、一ケ年と云ふ長い間を申さずとも、一日の中にても隨分變りどうしである、それであるから、適〻悟りが開き度いとの心が起りても、すぐにそれが變りて了ふのである。加之疑惑の心は深くして、愈〻是ならばと云ふ大信心はなか〳〵起らぬ、聞いた位では得心が出來ぬ、實際目に見た物でも、何んぞ魂膽はありはせぬかと、裏の裏までも探りてみたくなる、それであるからして、未だ見ぬ淨土や、拜まぬ阿彌陀如來の所へ參り度いと云ふやうな氣の起る筈はない。是が卽ち迷ひの根元であります、此の三つの考へが無くなつて、如何なる時も動かぬ眞實の心がすはり、深く其の御力を信じて、如何にしても往生せんとの願生心が生じ來るのは、全く此の三信廻向の賜であります。

私共が佛になれぬのは、此の三つの心掛けが無い爲である、是れさへあらば佛になれるに相違ないと、自分で此の三つの心掛けを造り上げるのが、觀經の上

にお説きなされてある、自力の行者の三心であつて、彼等定散二善の人々は、至誠心深信廻向發願心と、自分の心を研き上げんと勉むるのである。爾し如來のお望みは、決して行者自身にて此の三心を研き上げよと云ふにあるのではない、あたの方にて作り上げたる三心をば、一名號中に封じ込めて、信心歡喜乃至一念と、たのむ一念の時に、之を行者に授けんとの思召である。所がそれが觀經の上に、三心を發得せよとお示しなされてあるは、暫く自力の行者を他力に誘引せんとの御方便に外はないと致し給ふのが宗祖の思召であります。それゆゑ觀經の九品にも、しばらく三心と說いて、これまた阿難に付屬す、小經の一心つひに諸佛これを證誠す。これによりて論主一心と判じ、和尙一向と釋すと仰せられたのであります。

斯く申すと、それは妙なことである、如來樣の方にて三信を御成就下されたるに、私の方へ頂く時にそれが一心になるとは、解からぬことではないかと云ふ疑ひが生ずることである。此の疑ひは大經一部の所明を研究してみると、直に諒解することが出來る。抑も大經は上卷と下卷とに別れて、上卷には阿彌陀如來の因位の御修行と、果上の御德のことが詳細にお說きなされてあり、下卷には衆生が其の如來の御淨土へ往生する原因と、且つ往生したる上の果上の有樣とが叮嚀に說明してある。それで上卷では衆生救濟の正因として、第十八願に三信のことが說いてあるも、それが下卷に來りて、正しく衆生往生の正因となる處では諸有衆生聞其名號、信心歡喜、乃至一念と、信ずる信の一念となりてをる、是が大切なる所である。何故に斯樣な相違が生じたかと申すに、上卷の第十八願は因願と申して、普請で云ふと、圖面を描き材木を集めたやうなものであり、而して下卷は愈〻其の普請が成就した所である、普請中の造作と、普請成就の二つは、決して分離することは出來ぬが、而も普請の目的は全く其の成就に在ることなれば、私共は普請の出來上りた上にて、是非の批評をしなければならぬ。卽ち因願の時には三信とあつても成就に來りてそれが一信心となつてをりますから、此の信心が肝要であります。是を譬て申すと、恰も一軒の家のやうなものであ

る家は床と天井と柱との三要點に依つて建てられてあるが、而も此の要點が個々別立してをるのではなく、それを總合して一軒の家と云ふのである。それと同じく因願に在りては、至心信樂欲生と、床から天井から柱から、何一つ落ち無くお造り下されたのであるが、さて令諸衆生功德成就と、愈出來上りた一軒家として、私共に讓り渡して下さる時は、天井は天井、床は床、柱は柱と、別々にお讓り下さるのではない、賴む一念、深く信ずる信の一心にて、それ是が汝の物であると、萬行圓備の立派な一軒家をお讓り渡し下さるのであります。尤も此事は何にも宗祖聖人が事新しく申さるのではない、既に天親菩薩は淨土論に於て、此の三信の味ひをば、世尊我一心歸命盡十方無碍光如來、願生安樂國と、一心歸命にてお受けなされてある。それゆゑ今の御文にも「論主一心と判じ」と申述べられ、「愚禿勸むる所更に私なし」の證據となされてある。

呼び聲がたよりなりけり旅の空
雪ふらばふれ風ふかばふけ

とは、北條時賴が佐野の渡にて詠んだ歌であります、今も此の歌の通りにて、かゝる難有き大信心も、全く聞其名號と、あなたの御深切の呼び聲が、私共の心の奥底へ屆いた時に、さては御助け下さるのは、あなた御一佛でましますかと、如來大悲の招喚の勅命に、久遠劫來の迷ひの夢さめた時が、卽ち御助け下されと、たのむ一念の信が開發致す時であります。してみまするとこの大信心は、全くあなた の甫無阿彌陀佛の一法によつて、呼び起されたるものであつて、決してお互の凡夫自力の迷心にて作り上げたるものではない。されば一流所談の一心は全く他力の御計らひに出づるものであります。

さて聖人の御懇切なる御化導を蒙りたる平太郎は、日頃心の中に蟠つてをつた疑ひを晴らし、心置きなく熊野へ參詣した。他の道連れの人々の如く、精進潔齋するでもなく、日常の有りの儘にて道中した。殊に田邊の浦にては、溺死の人の死骸が打遺つてあるのを、手づから埋葬をして遣りなどした。斯くして熊野へ到着して、本殿にて御通夜をして居ると、其の夜夢ともなく現ともなく、證誠

殿の扉を排いて、衣冠正しき方が現はれ、平太郎に對して、其許は何故に精進潔齋もせず、不淨の儘にて參籠したかとお叱りなされた。すると宗祖聖人が忽然として現はれ給ひ、其の方に對し、此の者は私の敎訓を信じて、念佛申す者でありますから、お咎めなきやう致されたかと申して、うや〳〵しく聖人を禮拜せられたと思ふと夢がさめた。餘りに不思議なことである爲、歸途に京都へ立寄りて、其事を申上ぐると、聖人は、左樣なこともあらうと、申されたとのことである。

南無阿彌陀佛をとなふれば　梵王帝釋歸敬す
諸天善神ことゝ〳〵く　よるひる常にまもるなり
天神地祇はことゝ〳〵く　善鬼神となづけたり
これらの善神みなともに　念佛の人をまもるなり
誠に念佛は無碍の一道でありますす、これさへあれば、天神地祇も敬服し、魔界外道も障碍することはない。されば私共は、彼の平太郎の如く、何んの恐るゝ所も無く、念佛一つにて世を渡らねばならぬことである。

第二五　其一人

聖人弘長二歳壬戌仲冬下旬の候より、いさゝか不例の氣まします、自ら爾以來、口に世事をまじへず、たゞ佛恩のふかきをのぶ。聲に餘言をあらはさず、もはら稱名たゆることなし。しかうして同第八日午時。頭北面西右脇に臥給て、つゐに念佛のいきたえをはんぬ。

―眞宗開顯話―

これは御傳鈔下卷第六段の始めの御文にして、卽ち覺如上人が宗祖聖人の御臨終の有樣をお記しなされたるものであります。今此の御文に就いて、少しく聖人の御往生の事をお話し申すことゝする。盛者必衰會者定離の約束は、凡夫の姿をおかりなされたる悲しさには、聖人の上にも免ることは出來ぬ、九十年の長い間衆生濟度の爲に、一日のお休みも無く御苦勞下されたる聖人は、弘長二年の秋の八月の頃より、御不例の氣味にて床につかれたが、それがはか〴〵しく御快方に向はせられぬ爲常隨のお弟子方は申すに及ばず、有緣の同行共も、何分にも九十と云ふ御老境のことなれば深くお案じ申上げてをつたが、九月と經ち十月に入りてより、際立ちて御重症にならせらるゝ。それが爲に關東のお弟子方

は、急ぎ上京して御看護申上げたるも、何分にも命數のみは人力にて如何ともすることが出來ぬ。越えて十一月の二十八日の正午に、念佛の聲の終ると共に、芽出度く大往生を遂げて淨土へおかへりなされた。此の御臨終の時の有樣をば只今御文に、「口に世事をまじへず、たゞ佛恩のふかきをのぶ。聲に餘言をあらはさず、もはら稱名たゆることなし。しかうして同第八日時。頭北面西右脇に臥給て、つゐに念佛のいきたえをはんぬ」とお記しなされてある。

さて此の聖人の御臨終の御模樣が、私共に何を敎へらるゝかと云ふことを深く考へてみねばならぬ、古より高僧知識と云はるゝ方々の御臨終には種々の奇瑞が現はれてをる、遠く聖道門の高僧方の事は申さずとも、近く淨土門の七高僧方に就いて考察してみても、次のやうな記錄がある、卽ち曇鸞大師の御往生の際には、「六十有七ときたり、淨土の往生とげたまふ、そのとき靈瑞不思議にて、一切道俗歸敬しき」とありて、或は天華が降り、或は天蓋が出現したと申すことである、又源信僧都は「源信和尙ののたまはく、われこれ故佛とあらはれて、化緣すで

―其一人―

につきぬれば、本土にかへるとしめしけり」とあつて、自ら其の尋常人にあらざることを、お弟子の慶祐にお告げなされてをる、此の外法然聖人も亦「命終その期ちかづきて、本師源空のたまはく、往生みたびになりぬるに、このたびことにとげやすし」とて、自ら此の娑婆世界へ三度迄も御出現なされたことをお物語りなされたるのみならず、其の御臨終に際しては、「本師源空のおはりには、光明紫雲のごとくなり、音樂哀婉雅亮にて、異香みぎりに暎芳す」とあつて、天に紫の雲が棚引き、天樂自ら聞え、室には異香の香りが暎芳したとある。是に比べると宗祖聖人の御臨終は、非常に異つてをる、而して此の異つたる所に、言ひ盡せぬ味ひがある。

聖人の御臨終には、紫の雲も棚引かねば、天華もふらぬ、「口に世事をまじへず、たゞ佛恩のふかきことをのぶ、聲に餘言をあらはさず、もはら稱名たゆることなし」とあつて、此の稱名の聲がたゆるときが、卽ち此の娑婆世界の御別れとなつたのであります。

抑も此の奇瑞も無ければ、又靈告も無い聖人の御臨終こそは、私共に對する

生きた身業の御說法であります。聖人は凡夫往生の御先達をして下されたのである、聖人は如來廻向の信心は、善惡の凡夫共に同一であると、力說なされた御方である。されば此の信心を頂かれたる聖人の御往生に際し、若し何等かの奇瑞と不思議が現はれてをつたならば、聖人の御跡を慕ふ所の私共の往生に際しても、亦其の奇瑞の出現を要求することゝなる。茲が誠に大切なる所であつて、若し萬一にも左樣な傾向が、同信の人々の心中に思ひ浮べらるゝやうなことがあつたら、忽ち九品の往生を期する所の、自力の念佛者となつて了ひ、眞實信心の行者となることは出來なくなる。されば奇瑞の現はれたる祖師方も難有いが、何等の奇瑞もなく、たゞ念佛して大往生をお遂げなされたる、聖人の御往生は一倍に難有く感ずることであります。

聖人の常の仰せに、「善信がみには臨終の善惡をば申さず、信心決定の人はうたがひなければ、正定聚に住することにて候なり。さればこそ愚痴無智の人も、おはりめでたく候へ」と申されたることがある。是れである、平生業成は一宗

の規範にして、臨終の善惡の如きは何等の條件ともならぬ、私共は宿業の催しによれば、如何なる業報を感ずるかも知れない、假令我が枕元に火車來現しても、少しも驚くことは入らぬ、此の火の車の迎ひを受くべき者が、本願の船に乘托して、芽出度く報土往生を遂げさせて頂くと、たゞお念佛を申す迄のことであります。聖人の御往生に際しては、二十五菩薩のお迎ひも無ければ、紫の雲も棚引かなんだ、たゞ念佛の聲が口から漏れ出づるのみであつた。私共も亦其の御跡を慕ひてお念佛を申し、折角のお迎ひではあるが、火の車には御用はござらぬと辭退して、勇んで淨土の彼岸へ旅立させて頂くのみである。

增上寺の行誡上人が御臨終の夕べの近寄つた時、侍僧の人々は來迎佛の尊影を枕上に掲げんと存じ、寶藏より其の繪像を取出して之を掲げてみると、思ひがけなくもそれが閻魔大王の繪像であつた。侍僧の驚きは一方でない、直に卷收めて掛け代へんと致したるに、上人はそれを觀められて、やがて筆を執つて

起請文之事

一、娑婆世界南贍部洲大日本帝國、知恩院比丘、念佛行者行誡。

右は平素念佛者にて、九品往生の中には、上品上生の機類に該當するものに付、宜しく彌陀尊前へ御取次を請ふ。

閻魔大王御前

と書き記されたと申すことがある。念佛者の往生は是で無くてはならぬ。聖人の御往生に際しては、此の外尙ほ難有い御遺誡がある、それは如何なるものであるかと申すと、卽ち次の通りである。

一、我歲きはまつて安養淨土へ還歸すといへども、和歌の浦曲の片雄波の、よせかけ〳〵歸らんに同じ、一人居て喜ばゞ二人と思ふべし、二人ゐて喜ばゞ三人と思ふべし、其一人は親鸞なり。

一、われなくも法は盡まじ和歌の浦　あをくさ人のあらんかぎりは

これが御臨末の御書である。「一人居て喜ばゝ二人と思ふべし、二人ゐて喜ばゝ三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」とは、何んとも難有い思召ではないか。聖人の此の御一念は、七百有餘年の今日に至つても、生き〳〵として通うてをる。

私　共が緣に觸れ事に當りて、聖人の御苦勞の程を偲び奉る時に、其處に聖人は現はれ給ひて云ひ知れぬ力をお添へ下さる、煩惱に眼を障へられたる私　共には、我が肉眼にては其の御姿を拜むことは出來ぬけれども、心の眼にはあり〳〵と其の溫容を拜し奉ることが出來る。斯樣なことを申すと、佛緣の無い人達は不思議に思はるゝかも知れぬが、少しく宗祖聖人の御敎に耳を傾けられたる方であるならば、如何にも左樣に感ずると御同意なさることであらうと存ずる。

聖人は何うして左樣の不思議の働きを、滅後の今日に御現はしなさるのであるかと云ふに、それが抑も阿彌陀如來の御本願であります。阿彌陀如來は第十八願に於て十方衆生の往生をお誓ひさなると共に、第二十二の願には還來穢土の大願をお建てなされたのである、此の大願をお信じなされたる聖人には、娑婆と淨土の往來は自由であると確信なされてある。されば生前お弟子方に對して、「いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有緣を度すべきなり」と仰せられ、尙ほ此の意を和讃に、「南無阿彌陀佛の廻向の、恩德廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり」とお示しなされてをる。されば私　共は一人では無い、私　共が念佛を稱へる每に、其處に聖人が御現はれ下されて、お前はお念佛を歡んで、自分の跡を慕うて淨土往生を期するかと深くお喜びなされ、陰に陽に私　共をお守り下さるのであります。

誠に「一人居て喜ばゝ二人と思ふべし、二人ゐて喜ばゝ三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」との仰せ程、私　共を力强くするものはない。人生の一代は行路難にして、泣くべきこと悲しむべきことが、朝に夕に湧き出し來つてはてしがない、それが爲には思はず知らず三毒の煩惱の捕虜となつて、始終三惡道の種蒔きをしなければならぬとなる。然るに其の度每に聖人が現はれ給ひて、泣くに、

及ばぬ怒るに及ばぬ、人生は總て皆な自ら蒔付けた業報の現はれ來るものであり、無始以來穢惡汚染の根性をかゝへて來たものなれば、どうせさう〳〵樂みづくめの果報の現はるゝものではない、然るにそれに氣付かずして獨り煩惱を起して罪業を造ると、未來永劫此の苦海を浮び出る時は無い、されば左樣のことに附いて廻るには及ばぬ、それよりも念佛を喜びて、永劫の樂果を期せよと、我が耳元に御さゝやき下さるのである。此の御さゝやきに引立てられて、あゝ左樣でありましたと、前念煩惱後念念佛と、我が心を入れかへさせて頂く所に、悲しみは轉じて樂みとなり、娑婆は變じて極樂となり、轉惡成善の御利益は刻下に現はれ來るのであります。

人生死ぬと云ふこと程厭なことはない、死なば一切萬事が水の泡となる爲、正しく生死の巖頭に立つた時は、何んなに心細ひかも知れぬ。然るに一度聖人の往還二廻向の御化導を承はりてみると、私共の卽今行うてをることは、決して水の泡と消えるのではない、再び此の世に還來して、思ひの儘に其の事を行ふ

とが出來るのである。一念思ひを茲に致すと、厭でならぬと逃げ廻つた死の問題も、左程に苦にもならず、死なば直に安養の淨刹に往生し、やがて再び有緣濟度に還來するのである、斯樣な難有き身の上として頂きたるも、全く彌陀大悲の御恩德の賜であると思ひ出され、臨終斷末魔の苦しい中よりも、我が聖人と御同樣に、口に世事をまじへず、たゞ佛恩のふかきを喜び、聲に餘言を申さず、もつぱら稱名念佛させて頂く身の上となれるのである。是を思ふと我が宗祖聖人の御往生は、此の罪深き私共に對し、安く臨終一念の場に立つことの出來る道を敎へ下されたるものと申さねばならぬ。

念佛を知らぬ人達は、死ぬと共に萬事が終結を告ぐるものと恐れるが念佛を信ずる者は決して左樣な考へは懷かぬ、今世の死は唯是れ人生の一轉化であつて、やがて再び姿を變へて神通自在の身の上となるべき、一段落に過ぎぬと覺悟する。死して後に望みの無い人達は、せめては自己の一代の功績を、石に刻み墓に造りて殘したいと云ふやうな淺墓な望みを起す。然るに念佛の功力を信ず

る者は、そんな賴りの無い望みを死後に繋ぎはせぬ、それよりも遊煩惱林現神通、入生死薗示應化にて、娑婆往來幾千度の大志望の下に、我が亡骸の後の事位は、毛頭念頭に往來は致さぬ。「若し閉眼せば加茂川にいれて、魚にあたふべし」とは、聖人が死後の跡始末をお示しなされたる御辭である其の高潔なる御心境の程は、實に何んとも申樣のなき程である。

——眞宗聯話——

聖人の御臨終の一段の物語りは、實に百千萬言に勝れる偉大なる敎訓をお遺しなされてをる。大經の中に、示現滅度拯濟無極と云ふお辭があるが、我が聖人の御往生は、正しく此の經文のお示しの通りである。されば幸にして聖人の御流れを汲まして頂ける私共は、此の遺瀣なき御化導を感佩し奉つて、我が臨終の刹那に當つて、芽出度き念佛行者の華を開かせて頂かねばならぬことであります。

第二六　念佛の道中

——念佛の道中——

一。佛法をあるじとし、世間を客人とせよといへり。佛法のうへより、世間のことは、時にしたがひ、相ひはたらくべき事なりと云云。（第一五七條）

一。同仰に云く、佛法と世體とは、たしなみによると、對句に仰られ候。又法門と庭の松とは、いふにあがると、これも對句に仰られ候と云云。（第三一四條）

始めの條に「佛法をあるじとし、世間を客人とせよ」とあるは、眞諦の念佛を主として、世相の俗事を處理して參れと云ふことである。次の條の「佛法と世體とある世體は、世間の體相と云ふことにて、卽ち渡世家業のことを云ふ。「いふにあがる」とあるいふの字は、法門と松との兩方にかゝり、法門に對するときは、いふは言の字の意を顯はし、松に對すると結の字となる、卽ち法門は心中を打ち明けて物語る所に上達し、庭前の松は大枝小枝を結て癖を直す所に、善い庭木となると云ふことであります。

是だけ申しておくと、茲に類集したる二ケ條の意味は誰がお讀みになつても、

直に其の思召を汲み取ることが出來ます。所が茲に一つ申しおかねばならぬことは、たゞ單に其の文意だけが諒解出來た所で、其の思召に依つて佛法世法を取計らうて行かぬと、何んの所詮もないことゝなる。さればお互に日常生活の上に、佛法をあるじとし、世間を客人として行くことが出來てこそ、始めて此の二ケ條を拜讀したと云ふことが出來るのであります。お互にはそれが出來てをるか何うか、是は確かに一考せねばならぬ重要なる問題であります。

世の中の人の中にて、多少讀書でもすると云ふやうな人から能く聞く辭の中に、假令幾十人の者が一緒に暮して居つても、各自に己れの良心に省みて行動すれば、波風の立つやうなことなく圓滿に治まつて行くと云ふことがあるが、爾し私はさうは思はぬ。幾等お互に己れの良心に省りみて行動するとしても、それで以て一家一族が圓滿に治まると云ふことは斷言しかぬる、何故ならば、其の良心と云ふものが、能く一家一族を治めて行くだけの、權威と價値を有つてをるものか何うか、と云ふことを怪しむからであります。大聖釋尊は心の師となれ、心を師とすることを勿れと仰せられたることがある、之はなか〳〵深い味ひのあるお辭である。抑も私共の心の本體はそれが善であるか、或は惡であるかと云ふことは別問題として、各自に其の傾向を異にしてをることは爭ふことの出來ぬ事實である、或者は朝寢が好きと云ひ、或者は宵寢が好きと云ふ、話好きあり、沈默好きあり、活動好きあり、靜閑好きあり、實に十人十色であります。それが今各自に好きな方向を執つて行動したならば、其の結果は何うなるものであらうか。船は一つであり、棹を取る船頭は十人ある、而もそれが十方に向うて勝手に棹さしたならば船はくる〳〵廻りて前にも後にも進航の出來ぬこととなる。家庭は一つの船であり、各自の考へは船頭の手にせる棹である、してみると各自が己れの思ひの儘に行動したならば、家庭の船はくる〳〵と廻つて治まりがつかぬとなるに相違ない、それゆゑ釋尊は、心を師とすること勿れと仰せらる。抑も私共の心には、久遠劫來の習慣が一種拔くべからざる第二の天性となつてをるのであります、宗祖聖人は此の習慣性をば、穢惡汚染にして清淨の心な

く、虚假諂僞にして眞實の心なしとか、或は惡性さらにやめがたし、こゝろは蛇蝎のごとくなり、修善も雜毒なるゆへに、虚假の行とぞなづけたると仰せられてをる。而して此の穢惡汚染虚假諂僞の古巣の中に在つて、其の中心點となつて最も横暴を極めてをるものは、貪瞋痴の三毒の煩惱である。爾し茲に一つ注意しなければならぬことは、此の煩惱も平時に在つては、自己の體面とか、社會の制裁とか、或は國家の法律とか、若しくば道德の感念とかに支配せられて、大した不都合を仕出すこともないが、一旦其等の制裁力が弛むと云ふと、忽ち頓でもない厄介なることを始め出すものであります。從つて自己の良心に省みて行動しさへすればよいと云ふ議論は、單に此の制裁力の權威のある時、即ち平時の心的狀態に就いては首肯することも出來るが、異常の場合に於ける狀態に就いては、それでよいと斷言することは出來かぬる。

一體此の制裁力と云ふものは、何程の力を有してをるかと云ふに、それは甚だ薄弱なるものであつて、僅かな事にも忽ち破壞される。大きな聲で話しさへし

ないと云ふやうな婦人でも、電車の中で足を踏まれると、忽ちむつと立腹する、若しそれが男子であつてみると、何んだ失敬なと、忽ち惡口の一つも浴せかける、人の榮華を觀めては我れも亦斯樣な生活が致したいとの欲望が出て來る、言うて返らぬことも、幾度も愚痴を繰返す、此の如く制裁力は誠に薄弱なるものであります。凡そ中心の移動は物體をして動搖せしめねばをかぬ、人の心の中心點が、始終貪瞋痴と動き廻つてをつては、其の行動が二三に轉變するのみならず、其の周圍の者は、常に其の波動を蒙つて動搖不安の心配で日送りせねばならぬことゝなる。近い話が、主人が怒つた爲に家内の顔に不快の雲がかゝり、親の心配の爲に子供が氣を腐らすのがそれである。斯樣の狀態であつては、何うして眞の一家の平安を求め得ることが出來やうぞ。

是れであるで私共は、良心の命令であるかとて、單に自分の心の思ひの儘を以て、事の中心點とすることは出來ぬ、若し左樣なことをしてをると、いつも動搖不安の苦惱に追廻されなければならぬことゝなる。中心點は始終渝らぬもの

でなければならぬ、金剛堅固にして、突ても押しても動かぬものでなければならぬ。然るに私共の心は始終動き通しである、されば之を以て中心點として行くと云ふことは、決して最善の方法とは申せませぬ、釋尊が心を師とすること勿れ、心の師となれと仰せられたのはそれが爲であります。それでは何にが私共の心の師となるものであるか、それにつき私は何うしても念佛の一法を以て、我が心の師とし、我が心の中心點とせねばならぬと信ずるものであります。此事は決して私一個の私言ではありませぬ、宗祖聖人は、「心を弘誓の佛地に樹て、情を難思の法海に流す」と仰せられ、蓮如上人は此の意を解說して「佛法をあるじとし、世間を客人とせよ」と仰せられてをるのであります。

念佛の一法を以て我が心の主人とすれば、能く其の動搖不安の狀態を免ることが出來るかと云ふと、私は確かに出來ると信ずるものであります。其故は抑も念佛なるものは、能く私共を導きて淨土へ往生せしむる偉大なる力を具備するが故に、此の一法を體得する所に、私共は我がはからひにて地獄へも墮ちずして、極樂へ參るべき身となるのである。從つて私共の心中に此の自覺の一念の起る時、それと共に我が周圍のものに對する考へは一變することゝなる。淨土に往生する者は地獄へ行く者でない、餓鬼へ立ち歸る者でない、佛となる者である。人生の行路は二十五有に分岐し誠に迷ひ易いが、然るに一旦淨土に往生すると覺悟した以上は、假令腹立ちの地獄の道が眼前に展開しやうが、自分は淨土往生の行者であるから、斯樣な傍路へ踏み入るべき者でないと、自ら其の途を避くることゝなる、貪欲に牽かれて餓鬼道へ入らんとしても、之は自分の步むべき途でないと、忽ち本道へ立ち歸ることゝなる。斯くて迷路を去つて大道に就き、暗黑を出でゝ光明に入る、歡喜茲に生じ、和樂茲に顯現す、人生生存の本義は明かに眼前に展開して、悅樂の光明が光り輝くことゝなるのであります。

顧ふに世相は複雜であり、貪瞋邪僞は常住に我が心身を取り捲く、此の中に在つて悅樂の光明を認めんとするのであるで、容易のことでは其の目的を達することは出來かぬる、是に對しては充分に其の用意を爲なければならぬ、上人が「佛

法をあるじとし、世間を客人とせよ」と仰せられたるは、此の用意を敎へられたるものである。されば念佛は主人であり、世相は客人である、主人は客人に左右さるべきものでない、一切の指揮は主人自身が下さなければならぬ。腹立たしき世間の出來事、利害の念に眼を暗まさんとする世相の現象に對し、常に念佛の主人の心を以て、それを裁斷して行かなければならぬ、さすれば其處に迷はぬ大道が發見さるゝのであります。此事のみは怒からざるべからずと思ふ所に、いや〳〵己れは念佛の行者であり主人である、世相の客人に左右されてはならぬと、自覺反省しなければならぬ、利欲の幻影が眼前にちらつきたる時、我は念佛者である、貪欲の客に誘惑されて、淨土の行人の面目をつぶしてはならぬと、胸に手を拱く所に、主人の權威が現はれて、金剛堅固の動かぬ大人格を研き上ぐることが出來るのであります。

斯くは云ふものゝ無始以來の習慣は、此の光輝ある大人格を破壞せしめんとすることが幾度もあるで、決して油斷することは出來ぬ。されば「法門と庭の松とは、いふにあがる」であつて、時々刻々自己を反省して行かねばならぬ。何分にも久遠劫來我が心は常に三毒の方へ枝を出さうと欲し、我が身は常に疑情の闇を慕うて、其處に我が儘の惰眠を貪らうとするものなるが故に、能く我が心を打明けて、智者の敎誨を聞き、能く我が身をたしなみて、賢者の後を慕はなければならぬ。さすれば心光攝護の利益空しからずして、當初の目的を達することが出來るに相違ない。

佛法と世體とはたしなみによる、一家一族が互に此の嗜みの下に、正定聚の分人の日送りを爲し、淨土往生を願ふとゝなると、家の內には地獄の途も無くなり、餓鬼の途も無くなり、其處には始終歡喜の光風が吹き渡ることゝなる、されば經には、橫截五惡趣、惡趣自然閉と讃歎せらる。斯くて親も子も、夫も妻も、步々光明裡、念々常和樂の生活をすることが出來るやうになる。上人が「佛法をあるじとし、世間を客人とせよ」と仰せられたるは、如何にも御最もなることである。佛法の主人が音頭取りして、聲朗かに念佛の歌を詠ひ、うらゝかなる淨土參りの、春の

道中をしなければなりませぬ。

第二七　眞實の慰安

一。一心にたのみ奉る機は、如來のよくしろしめすなり。彌陀のたゞしろしめすやうに、心中をもつべし、冥加をおそろしく存ずべきことに候との義に候。（第八四條）

一。わがこゝろにまかせずして、こゝろをせめよ。佛法は、こゝろのつまるものかとおもへば、信心に御なぐさみ候、とおほせられ候。（第四六號）

一。佛法には、萬事かなしきにも、かなはぬにつけても、何事に付けても、後生のたすかるべきことを思へよ。よろこび多きは佛恩なり。（第三百條）

此の三ケ條の中には餘り難解の文意はないが、然し若し其の中にて一二を拾うてみると、第八十四條の「冥加」と云ふことは少しく心得ておかねばならぬ、冥加とは或は冥見とも申して、如來樣は私共の肉眼にはみえぬけれども、蔭から御見護り下されて、お力をお加へ下さると云ふことである。次に第四十七條の「心にまかせずしてこゝろをせめよ」とあるは、我が心の思ひの儘に振舞はずして、十の望みは八に、五の望みは三にと云ふやうな具合に、我が心の望みを責め縮めて、勝手氣儘に振舞はせなと申すことである。最後の第三百條の中には、別にむつ

かしいお辭はない。今回は此の三ヶ條を類集して、人生に於て眞に私共の力と成り、又慰安者と成る者は、如何なる者であるかと云ふことにつき、少しくお話しすることゝ致します。

さて此の三ヶ條は拜讀なさると、すぐおわかりになることであつて、此の問題に就いては、如來樣こそは私共のまことの同情者であり、まことの相談相手であり、又まことの慰安を御與へ下さる御方であると云ふことを、お示しなされたるものであります。

全體人間と云ふものは、己れ一人にては決して此の世の中を暮して行けるものでない、必ず誰か相談相手が無いと、心淋しくして、到底生き永らへて參れぬ。司獄官の方から能く聞く話に、如何に極惡非道の横着者でも、監獄の中で獨房監禁せらると、大概弱りきつて了ふと云ふことである。是は人の本來の性質として、互に持ちつ持たれつして話相手になり、力の貸しあひを致さねばならぬに、其れを取り去られて了ふのであるから、たまらないのであります。人は何處迄も

其の文字の示す通り、相寄り相助けて行かねばならぬ、それでないと到底生き永らへて行かれませぬ。

が爾し、斯く大切の片相手となるべき人からも、私共は時によると、離されねばならぬことがある。昨日迄は世の中の人から、彼の方でなければならぬ、あの人こそと重寶がられた者が、今日は誰一人として訪うて呉れる者もない哀れな境涯に陷ることがある。又家庭の中で一家の大黑柱の樣に思はれた者が、一朝にして孫子の者から、見向きもされない樣な身となることもある。啻にそればかりではない、大切なる我が肉身からさへ見離されることもあります。さてさうなつてくると、實に心淋しくてたまつたものでありませぬが、その時こそ眞に誰をたよりとなさるつもりであるか。生住異滅の四相に支配されてをる世の中の總てのものは、決して末通ふして私供の便りとなるものでありませぬ。宗祖聖人は此の意を述べて「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつて、そらごとたはごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにて

おはします」と仰せられました。誠に私共の影となり形となつて、相談相手となりたよりとなつて下さるのは、此の娑婆世界では、たゞ阿彌陀如來樣ばかりであります。かるが故に私共は轉變無常の人事に重きを置くよりも、常住不變の大悲の親樣をたよりとして、一切萬事此のお指圖に任して、日暮しをすることが肝要であります。今此の意をお示しなされましたのが「一心にたのみ奉る機は如來のよくしろしめすなり、彌陀のたゞしろしめすやうに心中をもつべし」とのお辭であります。從つて私共は假令世間の人からは嫌はれても、又我が顏が世間に立たぬと云ふ樣なことがあるにしても、決して世と爭ひ人といさかふべきでなく、たゞ〳〵如來樣の御心に叶ふやうに致さねばなりませぬ。卽ち世間で負ても、如來の御前で勝利を得るやうに心掛けたいことであります。

殊に御文の中にも屢〳〵御示しになつて居るやうに、婦人方は男子に比して心を使はることが多く、從つて罪業も亦重い。所が此の罪の重い爲に、恰も病身の子が一倍親の苦勞の種である如く、如來樣は婦人の爲に特別の願まで建立なさつた程であります。かく如來樣から特別に御目を掛けられて居ると氣付かして頂かれたならば、何としても此の如來樣の御氣に召さぬことは致さぬ樣に心掛けねばならぬことであります。如來樣は私共が三惡道に落ちるのが一番のお嫌ひであり、而して貪欲瞋恚愚痴の三毒の煩惱は、其の三惡道へ墮つべき第一の原因となるものでありますから、此の煩惱の起る度毎に、是は相濟まぬことと又如來樣の涙の種を作つたと、深く恐懼しなければなりませぬ。

斯樣にお話し申すと、佛法と云ふものは何とした窮屈なものである、か弱い女は被護うて行かねばならぬに、殊更きびしく誡められるゝとは何とした敎であらう。怒りたうても怒られず、小言が言ひたうても言へぬ、困つたことである。聞かぬ昔は腹を立てゝも、左程惡ひと思はなんだが、聞いてみれば氣が咎めてさうも參らず、何うも氣がつまることであると、思はるゝ方があるかも知れませぬが、其の思ひの起るのも一應最もと思はれます、現に蓮如上人御在世の古も、左樣に考へた方があつたと見えて、上人は其の意を汲みて「わが心にまかせずして心

をせめよ。佛法はこゝろのつまるものかと思へば」と仰せられたのは、此の邊の心の中をさらげ出してお示し下されたものであります。かく申すと蓮如上人さへ左樣に仰せらるゝならば、私共が氣のつまると申すにも無理はないと、思はるゝ方があるかも知れませんが、若し左樣に心得らるゝと、それは大變な間違ひであります。上人はすぐ次の辭に「信心に御なぐさみ候」と仰せられてあります。してみると、上人は少しも窮屈なんどゝ思召されぬばかりでなく、却つて信心一つに御慰み遊ばされたのであります。

氣がつまると思ふならば、信心を頂くがよい、此の信心はお互の氣の詰ることをほどきて御慰め下さると仰せらるゝとすると、私共は是非共此の上人のお辭を充分かみしめて味うてみねばならぬことであります。それゆゑ此の點に就いて、少しく御相談申上ぐることゝ致します。

貴方々々の中には定めし芝居のお好きな方がありませうが、あの芝居の見物程おかしなものはない。多くの見物人は狹い土間にぎつしりと坐り、何んな暑中でも午後から夜半へかけて、汗を流して見物する。そして興が乘つて來ると、我を忘れて、役者が笑へば自分も笑ひ、役者が泣けば自分も泣く、實に芝居見物の間は己れを忘れて了うてをる。かくて芝居が終てゝ家に歸ると、あゝ面白かつたほんとによい氣晴らしをしたとて、少しも窮屈とも不足とも申さぬ。是はお互に實際に身に覺えがあることであります。

是れについて御相談申したいことがある。外でもありませぬが、今此の處は誠に立派な廣々とした御殿であります、此の御殿の中から終日一歩も外へ出てはならぬと申渡されたら、貴方々々は何と申さるゝか、恐らくはそんな窮屈なことは眞平御免であると、お逃げなさるに相違あるまい、之がおかしひ。芝居小屋の土間から見れば、この御殿は實に廣々として涼しい奇麗な所である。然るに窮屈な芝居小屋では少しも小言を言はずして、あゝ面白かつたと歡び、廣い御殿は窮屈でならぬと申さるゝのは、實に辻褄の合はぬおかしな話である。何故に左樣な辻褄の合はぬことを、我れも人も申すのでありませうか、申す迄もなく、芝居

では舞臺に役者があつて、面白い藝を觀せて呉れるが、御殿にはそれがないからである。若し立派な御殿で、芝居小屋同樣の演藝が觀られたならば、芝居の土間よりも、喜んで其處に坐つて居らるゝに違ひありませぬ。してみると氣樂なと窮屈なのとは單に目前の境遇のみより來るに非ずして、全く己が心の置き所一つで、苦樂就れとも變化するものである。獨作諸善不爲衆惡と、己れを愼むと云ふことは、窮屈至極で心がつまるやうに思はれますが、若夫れ我が心に深く他力の信心が頂かれてをつたならば、此度如來樣の御計らひに依つて、莘出度も尊い凡夫往生の一幕を見せて頂き、未來は往生成佛と、有難い身の上にして貰ふと思うてみると、順境逆境就れに在つても、何時もいそ〳〵と歡んで日暮しすることが出來るものである、それが卽ち信心に御慰み候と云ふ所であります。されば芝居の好きな方は、其の好きな心の儘を以て、念佛をお好きなさればよいのである。何うでござる、左樣なお心掛けにはなられますか。

斯樣に念佛が芝居程に好きになり、役者の藝を慰み得る程信心に御慰み得らるゝ身の上となられますと、此の世の中に修羅の焰を燃やす火種もなくなり、遺恨の齒切りをかむ恨みもなくなつてしまひます。蓮如上人は此の意を次の如く仰せられました、「佛法には萬事かなしきにも、かなはぬにつけても、何事につけても、後生のたすかるべきことを思へよ。よろこび多きは佛恩なり」と、實に左樣であります。佛とも知らず法とも知らぬ昔の身でありましたら、此の腹立ちと共に地獄に墮つべきであるに、今は如來樣の遺瀨なきお慈悲の袖につゝまれてゐる爲、腹立ちの性根ひかへた身が、この儘佛にして頂くと思ふと、腹立ちの焰も忽ち消え打つてかはつて歡びの心となる。或は今日の貧しき日暮しも、昔の心掛けの儘であると、此の世も餓鬼の苦しみ、未來も餓鬼道へ生ずべきであるに、今は心光攝護の御利益を蒙れる仕合せには、未來は淨土往生をさせて頂き、思ふことも望むことも、一つとして叶はぬ事なき身にして貰ふのであると思ふと、貧苦の悲しみも、忽ち歡喜の樂みにかはつて了ふのである。從つて如何なる辛苦艱難の中に處しても、「雖一世勤苦須臾之間後生無量壽佛國快樂無極」の金言に引き

立てられて、勇みある憶念稱名と共に、愉快な人生の航路に上ることが出來るのであります。祖師聖人は金剛信心の行者は、現生に十種の利益を得ると仰せられ、その中に心多歡喜の一益をお擧げなされてある、而して只今申述べた心の歡びは、全く此の利益の顯れであつて、是が正しく他力大行の御計らひより生じたものであります。

上來お話し申したことによつて、始めに掲げました蓮師の御辭の意味は、大要御諒解が出來たらうと存じますから、此の一段の講話は是で終りと致します。

第二八　呼吸の生命

―― 呼吸の生命 ――

一。佛法には明日と申事あるまじく候、佛法の事は、いそげ〳〵と仰せられ候なり。（第百三條）

一。同仰に、今日の日は、あるまじきと思へと仰せられ候。何事もかきいそぎて物を御沙汰候由にて候。なが〳〵したる事を、御坐の由に候。佛法のうへにては、明日のことを、今日するやうにいそぎたることを賞翫候。（第百四條）

一。佛法には、世間のひまを聞てきくべし。世間のひまなき人はいとゞのぞみおほきに。（第六八條）

同數ことなり。佛法には明日と云事は、あるまじき由の仰に候。（第百五五條）

一。今日ばかり、おもふこゝろをはするなよ、さなきだにいとゞのぞみおほきに。（第六八條）

此の四ケ條の中には難解の文句はない、誰が拜讀しても直に其の要領を會得することが出來ますが爾し第百五十五條に「世間のひまを聞きてきくべし。世間のひまをあけて法を聞くべきやうに思ふ事、淺間敷ことなり。」とあるお辭は、少しくお話し申しておかねばならぬ。一體聞くとあけるとはおほきなる相違がある、聞くと云ふのは、世事に追はれて寸時の暇も無いと云ふ中から、種々と差繰りして聞法の時間を出すことであり、あけると云ふのは、今日は多少閑散であ

るから、まあ一つ聽聞にでも出掛けやうかと云ふことである、等しく聞法の時間を作るのであるけれども、前のやうにしなければ、決して聞法の因緣は結ばれるものでないと云ふことである。それで今回は此の四ケ條に就いて、明日と申すことはあるべからずと、御訓誡下されし思召を窺ひ申して、佛法聽聞の心得と、其の心得がやがて私共の日常の日暮しの上に大なる影響があると云ふことをお話しに及びます。

さて孰れの條下にも明日ありと思ふなと云ふことが御懇にお示しなされてありますが、是は抑も何んの爲であると申すと、兎に角世間と云はず、佛法と云はず、總ての事を明日でもすればよいと推し遣つておくと、何一つとして出來るものでないから、昔から善は急げの諺のある通り、今日の中に仕上げておけとの御深切を示されたるものである。尤も此の明日ありと思ふなとの御敎誨は、蓮如上人が始めて仰せられたのでない、大聖釋尊は一代諸經中、到る處に其事を御氣付けなされてをることである。殊に四十二章經には最も剴切に此の意が述

べてあります。

佛、諸の沙門に問ひたまはく、人の命は幾ばくの間あるや。對て曰く、數日の間はありと。佛のたまはく、子は未だ道を爲むる能はずと。復一沙門に問ひたまはく、人の命は幾ばくの間あるや。對て曰く、飮食の間はありと。佛のたまはく、子は未だ道を爲むること能はずと。復一沙門に問ひたまはく、人の命は幾ばくの間あるや。對て曰く、呼吸の間と。佛のたまはく、善ひかな、子は道を爲むる者と謂ふべしと。

御經の意味はかうであります。或時釋尊がお弟子の一人に、人の命はどれほどの間あるかとお尋ねなさると、弟子は、左樣であります、四五日間は間違ひありますまいとお答へ申した。すると佛は、其許は未だ〳〵佛道を修行する身柄ではないと仰せられ、又他の一人に對し、人の命はどれほど續くかとお尋ねなさると、弟子は、左樣であります、命と申すと、食事の間位は大丈夫でありますとお答へ申上げた。所が佛は、其許もまだ〳〵佛道を修行する身柄ではないと仰せられ、復

他の一人を顧みて、同じことをお尋ねになると、今度は、はい命と申すと誠に束の間のものにて、只今呼吸する間だけは大丈夫と申されますも、萬一次の呼吸が續きませぬと、それで終りでありますゆゑ、私はその氣で勉めて居るのでございますとお答へ申上げた。すると佛は始めて、其の心掛けでよい、それでこそ佛道修行者であるとお譽なされたと申すことである。

誠に此の御化導の通りでありまして、私共は眞俗共に明日明後日にと推し遣ることは、よろしからぬことである。實は明日の命が確かに在ると云ふものならば、多少許してもよいのでありますけれども、今晩眠つた眼が明朝開くと云ふことは、決して斷言することは出來るものではありませぬ。生れてから今日まで毎朝開いて來たから、明日の朝も開くだらうと云ふ位のもので、實にたよりないものであります。してみると不定の明日をあてにせずして、確かな今日の間に、總ての用意をしておかねばなりませぬ。蓮如上人が「佛法には明日と申すことあるまじく候」と仰せられたるは、是が爲であります。

然らば明日のことを今日に引上げて、急いでして置けと申さる、其の事柄は何事であるかと申すと、後生の一大事のことであります。世間の學者の間には、やれ人生の目的であるの、或は人生の意義であるのと云つて居りますが、今は左樣な六ケ敷ひ事を申すのではありませぬ。唯釋尊の御示しの上から、我々は何の爲に此の世に生れて來たかを、知らして貰ふことであります。一體私共は何の爲に又何が目的で、此の世の中に生れて來たものであるか、それについては昔の人も云つたやうに、生の歸趣を知らむと欲せば、先づ其の由來を知るの必要がある、此の點について釋尊は、何うお示しになつて居るかと云ふに、佛の仰せによると、私共が此の世に生れ出るについて、其の道はざつと三通り開けてあると申すことであります。卽ち第一は、過去世に於て十善戒を保ち、それによつて天上界に生れ、尙ほ其の餘德が顯れて今生人間界に出ることであり、第二は、前生に五戒を保つた功力によつて、今生人間に生れ出で、第三は、前生三惡道に居つた者が、阿彌陀如來の光明の御照らしを蒙ると、それが大事因緣となつて、次生に其の

苦界を免れ出ると申すことであります。

さて此の三條の道を中で、お互は孰れの道を通つて來たものであらうか。第一の道か、第二の道か、さては第三の道であるか。釋尊の仰せに、過去の因を知らんと欲せば、現在の果を觀よと申ことが在る、此のお辭の意は、私共が昔何處に生を受けて居つたかと云ふことが知りたいならば、卽今如何なる所作をしてをるかと云ふことを、靜かに考へてみると、さては前生は彼處に在つたなと云ふことが、會得されると申すことである。それで今他人のことは知りませぬが、私自身が此のお示しにより、日々の所作をつく〴〵と考へてみると、何うも十善の馨りも爲なければ、五戒の餘德も匂ひませぬ、されば私自身はお耻づかしいことではあるが、第一第二の道に依つた者とは思はれぬ、それであつたならば、少しは其等の事を好みもし、又行はねばならぬ筈なるに、それとは全く反對にて、毎日々々腹を立てたり、不足を云ふたり、身勝手なる振舞ひのみを致してをる、深刻に考へると、私は是等のことを爲すべきために、此の世の中へ生れ來たのでは無

いかと思はる程である。而して此事は單に私一人に止まず、世間多くの人々は或は左樣でないかとも思はる。一體私共は何故に斯樣な淺間敷き日暮しを致すのであらうか、是等の煩惱は何處から生じ來るのであらうか、三毒の煩惱の故鄕は何處に在るのであらうか、お互に深く其の由つて來る處の源を考へてみねばならぬ。而して此事も釋尊の仰せによると其の源は三惡道の奥底に存在してをると云ふことであります。されば私自身の現在の生活は、何處からみても、此の三惡道から生え出した、無明の大樹に咲き亂る、三毒の花としか思はれませぬ。かく承はると、明白に私の前生は、天上界でなく、人間界でもなく、全く第三の三惡道這出しの其儘であります。從つて現在此の世へ生れ出でたのは、全く自分の力で出たのではなくして、ひとへに彌陀大悲の攝護のお力に依つたものであります。

現今は末法五濁の時代であつて、自力の修行は叶ひ難い時であるにも拘らず、各所の名山大刹には、晝夜不斷に座禪の床に觀念の定を凝らしをらるゝ方々が